

シ
オ
の
墓^エ
碑^ビ
石^タ
銘^フ

し
う
や
り
ふ
か
ふ

Prologue

西暦311年、キオス島の近くにある、シオという、小さな島にルシアという名の少女がいた。

その双眸はブリリアントカットをしたダイヤモンドに光を当てたように、いや、太陽のごとく燃え^{かがや}炫^くいていた。不思議なことに、射すようなまばゆさではなく、螺鈿のような、銀と青と紫が靨色に移ろい燦めくよう、神なる^{あや}雯^{あや}のように廻るのである。

瞳が全ての男たちに堪らない欲望の火を点けたが、彼女は美しいばかりではなく、凜とした動かし難い、聖なるまでに清らかな透明さを持ち、男たちの淫らな情欲を近づけなかった。さらに稀有なことに、未だ十四歳でありながら、聖母のような柔らかい慈愛のオーラが眼に見えぬ金色の靄のように初々しい白皙の皮膚から柔らかに醸し出だされていて、嫉妬を燃やす女たちをも自然になごませてしまうのである。

暖かい黄色を孕む白い石造りの建物がならぶ漁師と商人の港町、地中海の東の涯の朝の市場ではタープを張った露店で、香辛料や羊の肉や装身具や織物や編んだ袋に詰められた麦や豆が売られ、どこからともなく魚貝類のスープの匂いがし、鬚を蓄えた男たちが革袋に入れた葡萄酒を、木製のコップに注いで、大らかな太陽の下、酌み交わしていた。

巨大な船が寄港し、荷降ろし人夫がたくさん雇われて盛大に荷物を下ろす。あちこちで野太い掛け声が飛んでいた。大そうな喧噪である。指輪や首飾りに金銀や宝石を使う大商人が愉快そうに談笑していた。

貿易で栄えるこの島であっても、貧しい者たちは多い。

マルコス^{マルコス}は孤児で、叔母の仕事を手伝っていた。オリーブの実を売っている。叔母は寡婦で、亡き夫は古くからの小地主であった家の末息子で、相続した小さなオリーブ林を管理し、その収穫で生きていた。息子たちは大陸に渡って仕事をし、娘たちは島の外に嫁いでいる。マルコスは物心ついたときから独りで、父母のことは何も知らなかった。誰も彼の両親のことを語らない。尋ねても、誰も教えてくれなかった。

だから、自分は捨てられたのだと彼は思っている。それを憐れんで誰も言わないのだと信じ込んでいた。母にも父にも愛されなかったという思いが、何度も彼を絶望的な気持ちにする。母にすら愛されなかったという思いが。

だが、ルシアを見ると、それが癒されるのであった。ルシアも素直で優しいマルコスに、いつも深い思いやりを寄せる。マルコスは漁師たちが港に上げる無数の魚たちを見ても

涙するような少年であった。

神の子ルシアは比喻ではない。母は三日月の夜夢に太陽神アポロンがまばゆい四頭の白馬が牽くプラチナと黄金と金剛石とで製られた太陽の馬車に乗って降りて来たのを観たという。そのたくましい胸に抱かれた。懐妊する。人の子と同じはずがない。燦々と^{かが}焼やく麗しさであった。

彼女の名はいつしか地中海の東に知れ渡る。

多くの有力者の興味を引いたが、クレタ島の剛毅な海商アピリスチア・ステイノスもその一人で、彼は莫大なる富を以て^{ほしいまま}恣に振る舞い、王侯すらも一目置く男であった。その祖先はリビアに棲む遊牧民の大豪族で代々族長の家柄であり、表情のない冷厳なまなざし、残忍と豪放な魂を継ぎ、荒武者の巨軀と日に焼けて鞣革のような強靱な皮膚は黒い血の流れる悪魔という綽名にふさわしい。

アピリスチアは金銀宝石を持つてルシアの眼の前に現れ、迫る。だが、彼女は受け入れなかった。海商は怒りを覚えたが、抑える。しかし、みすばらしい孤児に過ぎないマルコスとルシアとが良き仲であることを見て憤激し、遂に自らの権力を駆使した。ルシアは捕えられ、キリスト教徒だと告発され（キリスト教を公認したローマ皇帝コンスタンティヌス1世のミラノ勅令は2年後の西暦313年であった）、拷問された。火刑と決する。マルコスには信じられなかった。なぜ、このようなことになったのか。あの清純なる聖らかなルシア、誰を慈しみ、誰にも優しいルシアが。彼にはアピリスチアの歪んだ欲望など想像できなかった。

磔刑場に駆けつけ、彼女を見、彼は胸も張り裂けんばかりになる。なぜ、なぜ、彼女がこんな酷い仕打ちを受けねばならぬのか。その問いには、誰も答えられない。権力者を恐れ憚るからだ。

火炙り磔刑になったルシア。それは残酷な刑だ。風の強い海の近くが選ばれる。煙が流れて窒息死させないためだ。生きたまま焼かれ続ける。人間は肉が焼けて骨が剥き出しに露出しても死ねない。凄まじい熱さで叫び気を喪うが、その熱さですぐに意識が戻る。又喪う。戻る。絶叫せざるを得ない激烈な熱さ。

これが続く、これを繰り返すうちに、人間は発狂してしまうのだ。

マルコスは気も狂わんばかりだった。その悲嘆は身を引き裂く。狂人ようになった彼を兵士が張り倒し、近づけさせない。周りの人に問い、助けを求める。なぜ、誰も助けようとはしないのか。誰も眼を伏せ、関わりたがらない。凄絶な絶叫が続く。

全てが終わり、人が去っても、マルコスはそのに伏せていた。もはや慟哭もなかった。ただ、物のように蹲って、何時間も動かない。途方もない叡智が彼の中で目覚めていた。……人間は醜い。人間の心は歪んでいる。誰かの声がそうつぶやいたようだった。とても彼の声とは思えない声であった。ゆっくり上げた顔の、みひら睜かれた凄絶なる双眸はもはや人間の眼ではなかった。

「生きる資格なし。全て滅ぶべし」

歴史概説

眞神族が日本へ涉つて眞神郡に王朝を建てたのは、神武大帝生誕の二年前、眞神暦7367年の戊辰年甲寅月朔（紀元前713年1月1日）とされ、第三六六代王神彝彌眞斗かむいやまとの時代である。

その発祥は紀元前五万四千年以前に遡る（古代エジプト人の祖先が現在のエチオピア連邦民主共和国、スーダン共和国あたりから移動して来たのが紀元前三万五百年頃、定住が紀元前一万二千年頃と言われる）。文献資料のみで、長い間、伝説の域を出なかったが、最近、南アフリカのナミブ砂漠の洞窟で眞神文字が発見され、その顔料に使われた植物の分布年代と、生贄と思われる動物の遺骸の痕跡から、放射性炭素年代測定により、その年代が確認された。

ちなみに、ナミブ砂漠は世界最古の砂漠で、ナミブとはその地域に住むサン人の言葉で「何もない」という意味である。又サン人は遺伝子解析で人類の祖先、最古の人類と目されている。

眞神族はその後、紀元前一万八千年頃から牧畜を始め、紀元前一万四千年頃に農耕を始めた（古代エジプト人ですら牧畜が紀元前一万年頃、農耕が紀元前八千年頃）。

紀元前八千年頃（眞神神統記に拠る眞神元年、西暦で言えば紀元前8079年）、遂に王朝が建つ。主宰神神彝亞咄厨御カムイアレサミの太極真義を言挙げて世界を真実の世界へと戻すべく、激流に棹差すように、正義の秩序を以て世界を組み直そうと魂を滾らせる彝玖邇いくにという偉大な王が現れ、眞神之国を建国した（古代エジプトで集落を作り始めるのが紀元前五千年頃とされる。原始王時代はさらに紀元前四千二百年以降のことだ）。なお、眞神之国の場所は特定されていないが、一説には、現在のチャド共和国、もしくは中央アフリカ共和国あたりと言われている。

彝玖邇の系譜は彝之家として現代まで続くことになるが、イ（彝）とは聖なるものを顕し、聖なるものは純粹を愛し、もの忌みして夾雑を廃し、ナミブと同義とされる。

その後、二千年を経て現在のエジプト・アラブ共和国内と比定される場所に斐圍良之都ひえらのみやこという王都を建て、更に紀元前四千五百年頃に現リビア国あたりに移住（戸璃兔邇栖王朝時代）する。軍事的に強大になりつつある古代エジプト民族を避けた。その際、リビアの古い一族と同盟を結んだが、裏切られ、地中海に難を逃れる。軍事力の必要を痛感した。叡智を結集し、その時代の世界に於いて魂の兄弟を求める。究極の真理を求道する者

には、究竟を求道する者が寄り集まる。

この時代に眞神族に加わった一族はいずれも強大な軍事力を具備していた。彝之家（眞神族の王家）に忠誠を誓った白舟家は三叉戟の紋章の下に大海軍を擁す。さらにインダスの最強戦士族であった炎家が臣下の礼を取った。

軍事力と制海力を増し、眞神人たちは紀元前三千五百年頃にクレタ島（ミノのこく 蕞之国時代という）に都を築き、地中海を自在に渡って、蠍王セルケトの跡を継いだ王ナルメルや、青銅合金を以て周辺を庄するシュルツパクのキエンギ人（ウンサンギガ。シユメール人）と交易して巨万の富を築き上げた。その島に商業の礎を創った。

キエンギ人との交易はアナトリア半島を経て行われる。その拠点としてキオス島が使われた。

しかし、セム語系の騎馬民族に阻まれ、キエンギ人との交易は途絶えそうになる。戦争か、撤退か。眞神人は一計を案じ、半神半人の美しきイヴオアをアツカドの族長に捧げた。「女と交換しろと？ それで全てを放擲しろというのか！」

族長は嘲笑する。しかし、黄金の御輿に乗せられ、絹のベールに隠されたイヴオアがその素足を顕し、炫く笑みを泛べたとき、族長は理性を喪った。全てが転じた。人間を遙かに超えた、まばゆい女神のような美しさは魂を射抜く。

もはや昼も夜もなかった。病に悶える者のように、強き悪霊に憑かれた者のように、魅せられ、耽溺し、その快樂の沼から這い上がることはできなかった。

諫めも聞かず、誰にも止められない。

統治や戦闘は疎かになり、終には、北から下って来た別の騎馬族に滅ぼされた。

「イヴオアの美しさは呪詛だ！」

征服民族の族長はイヴオアに欲望するも、同じ轍を踏むことを惧れ、さりとて殺すことも又怖ろしく、キオスの島に近いシオ島に流謫する。

パティオのある古い館に封ぜられ、女性の奴隷以外は何人も近づくことを赦されなかった。しかし、彼女が二十になると、太陽神アポロンが地上を白熱で覆い、焼き尽くしてしまうかと思われるような光熙の馬車に乗って現れ、イヴオアは身ごもった。まばゆい娘が生まれる。

娘が二十歳になると再びアポロンは降臨し、イヴオアの娘は身ごもった。やがて娘が生まれ、その子が二十歳になると、神は降臨し、またもや娘が生まれ、これが繰り返された。かくして二十年と数か月おきに、太陽神が地上に降臨し、イヴオアの子孫が続いた。娘し

か生まれなかった。

島の人々は数千年に亘って、その子孫を崇敬したが、ペルシャ帝国の侵入の際、イヴオアの裔の行方は誰にも知られなくなってしまう。

ペルシャ皇帝の勅命により探索が続いたが、各地に何百人もの探偵を投入しても、痕跡すら見つからず、皇帝はどうとう断念したのであった。

眞神族も又、その数千年前にクレタ島を去っていた。人々の記憶からも消えた。

第一部 クレタ島の悪魔の虐殺のエピタフに彫られた胡蝶の夢

第一章 エピタフ *Epitaph*

蕭々と降る六月の雨。

稲穂はさざめき、緑濃き丘陵も雨に煙って、鬱蒼としていた。

簡素な葦葺きの屋根から、ぽつぽつと落ちる雫を見て瞑想に耽る。杉の葉の沁みる香り。その葉の尖から滴つて苔を潤す。苔の馨りを醸し、どこか懐かしい落葉の柔らかき土の湿りの匂い、その調和。ハルモニ

その柿葺きの茶房で、平衛隆臥はぼんやり考えていた。ひらえたかふし

爛を傾けて蕎麦を啜るにちようどよい天候などと想いつつ、また。

ここから数キロメートル離れた田圃の真中に、海に泛ぶ嶼しまのように円形の古墳がある。直径は十八丈余。籠盛りと樹木が繋つていて、低い丘のようにも見えた。こむも

その奥津城おくつき（墳墓）には草に隠れた石碑があつて、墓碑銘に眞神文字で、『余りに奇しく、神に等しき光にあらば、人諍あらがふすべなし。経緯いはれつまひ詳らかならず、誰ぞ知らむ。余りにも普あまねきて、草木にすらも知らるに至らば、人とても知るよしもなし』と記されていた。今では誰も気に留めないが、古くからの引継ぎによって、近隣の女性が交替で、毎日、花を添えている。いわれも知らずに。

眞神郡にある眞義塾眞神大学の広大な敷地。

学園内の茶房で喫しながら、隆臥が想起していたのは、その墓碑銘であつた。もう一度考える。心が決まつた。試験問題は完成する。遠くに、中世カテドラルふうの大図書館の塔を見上げた。知性の城砦とも言ふべき大建築。

尖塔、薔薇窓、リブ・ヴォールトの穹窿天井、透彫りを冠するアーチやトリフォリウム、ゴシック建築のカテドラルと同じ様式を持つ、眞義塾眞神大学附属の大図書館及び大文書館は一般に公開されているが、いかにも厳めしい。

莊嚴を湛えていた。

窓のほとんどはステンドグラスであり、その面積は大きいが、照度は良好とは言えない。

いつもどこかで黒い影が翻り、魑魅魍魎が跋扈するかのような陰翳があった。実際、彼には見えたような気がしていた。喩えではなく、現にそうであろうとも、驚くには当たらない。この世がこういうふうに存在するということが奇跡であり、魔法であり、摩訶不思議なことなのだから。

観る人によつて、この森厳なる聖地は、昏い神話の世界であり、神聖と異教の交叉するオルギア狂躁秘祭の静謐、ドルイド教の真兇やヴェーダの陀羅尼が唱誦される魔法の国なのである。

あめのもれい天之黙礼は沈黙を愛した。この世に生まれた多くの人と同じく、こんな世界で生きるために生まれたんじゃないと感覚している。だから、知の殿堂を愛した。

「どんなテーマパークよりも楽しい」

モレイ黙礼は幼少時からそう思っている。次に好きなのは神社仏閣であった。どちらも空想の世界に満ち満ちている。むしろ、彼にとつてテーマパークはリアリティのない、バカバカしいものでしかなかった。約束上のファンタジー、空架された偽装の世界に過ぎない。人はリアルを求めて生きているのではないか。

たとえば、絵画はリアルに向かって発展した。それは写実という意味ではない。より感覚にリアルであるものを求めた。よりヴィヴィッドなものへ、とも言い換えられる。そのベクトルは単純ではない。激しいものであるときもあり、静謐なるもののときもあり、単純なときも複雑なときもあり、過激であるときも平凡で地味であるときも、深くあるときも浅くあるときも、明るくあるときも暗くあるときもあった。決まったかたちはない。もしそうなら、ヴィヴィッド感覚を維持できない。リアルを喪つてしまうのであった。

文化活動の凡てはその志向を持つ。

芸術は生命の精髓からのあふれである。

彼はその日、『眞神神統記』を読み耽つていた。眞神族の全史を網羅する膨大な文献史料『眞神正史紀』の初巻である。ページをめくるたびに感じる印刷の馨り、時を経た紙の持つ埃っぽいような香りが好きだ。毅然たる活字の列も。

又、脇には古代ギリシアの哲学者の典籍が積んであった。タレスから始まり、アリストテレスまでだ。試験対策であった。哲学の試験は最大の難関である。眞神大学附属の眞神

高等学校では進学希望者の特別クラス『大學希望』に選考された生徒は毎週のように試験を受けなければならない。その中で最も難しいのが哲学であつた。合格点に達しなければ、容赦なく、即時普通クラスに戻される。

だから、誰も彼も必至だ。しかし、天才型のモレイには常に余裕があつた。試験対策とは言え、半ば趣味で、哲学を淡々と楽しみながら味読している。味読と言っても、彼の読む速さは驚嘆すべき速度であつた。コツは、読まないこと、文字群全体を絵のように把握して意味を吸収すること、である（脳にはその能力がある）。

スマートフォンが鳴つた。

不機嫌な顔でディスプレイを見遣る。あゝ。

「アギト
アギト」

黒い前髪を垂らした、冥い眼の男を想い出す。天平罫はモレイと同じ進学クラス『大學希望』の二年生であつた。あまひらめぞい

憂鬱な翳りのような奴だ。だが、嫌いではない。むしろ、同じ匂いを感じる。親和性を感じるタイプではあつた。だが。

「アギトはまだ構わないが、彼といつもつるんでいるいしたたみりゆ 整り理ゆ愈ゆ、あいつが赦せない」

生理的に合わない。からし色の髪を無造作であるかのように突き立てた男。軽佻浮薄な奴。そもそも眞神の社会では下層階級に属する男であつた。ガサツで、俗的で、不愉快な、魂に瑕疵を与えるような存在である。カリカチュアのように細くて長い手足、何かを捉まえようとする、いかにも物質崇拜主義的だ。丈の足りない細身のズボンを穿き、小さめのジャケットに帽子を斜めにかぶり、気取つた細い顎、小さめの眼が雲英きらきら々々していて、どこか嘲笑的だ（ちなみに、眞神高等学校には制服はない）。

現実そのもののような奴。

違和を覚える現実そのもののような奴。

特に最近、先輩から聞いた話によつて、神妙な気持ちになつていたせいもあつたらう。むろん、それだけではない。彼自身にも思うところがあつた。現実と妄想の境は案外曖昧なのかもしれない。

異界とこの世界との境も。

喻えるならば、莊子の遺した『胡蝶の夢』の説話のように。夢で胡蝶となり、楽しんで自分が莊周であることを忘れた。後に目が覚めて、果たして夢で自分が胡蝶になったのか、実はこの自分は胡蝶が夢で莊周になつてゐるのではないか……

周囲を見廻す。空想を掻き立てるこの建物も、余計に今が夢か現かを迷わせる。

鳴るスマートフォンを見留めてにらみ、無視を決めた。今この刹那の、陶酔的で精緻な気持ちに壊されたくない。ただ、それだけだ。

眞神の彝佐家^{いさ}には、麗人が多い（男は柔弱のふうがある）と言われるが、彝佐彝配璃亜^{いあ}は人の美しさを越えていた。

まるで、古代ギリシアの神の血を分けた娘たちのように。その光輝く美しさは別次元であつた。

まばゆいまでに燦めく白皙の肌、その双眸は蒼や碧や青や藍や紺が奥深い海のような立体モザイクをなし、その一片一片がブリリアントカットしたダイヤモンドの面のような光学的効果をなす、その睿らかさ。

伝説のイヴオアの再来とも言われ、美しさは理窟を越えて、究竟の真理そのものであつた。

その過剰なまでの美は超越的で、善のアイデアそのもの、彼女を生じさせるために、全宇宙（平行宇宙も含む）は過去に遡つて生誕したと言つても過言ではない、燦々たる光である。

太陽だ。誰もが心奪われた。

だが、多くの人間は諦めた。あまりにも灼かしい遙かなる存在だから。到底、手が届くはずがない、と。

彝佐玲央もそういう人たちの一人であつた。

だが、或る日全てが爆ぜた。

別に特別なことではない。何でもない、いつものような、ごく日常なことだった。普段どおり、ただ、学校の廊下を歩いていた。向かいからいりやが歩いて来た。

すれ違った。

もしかしたら瞳があつたのかもしれない。彼には、はっきりした記憶がなかった。何か体の奥で爆ぜた。そのままそこで崩れて膝を突きそうになった。

以来、彼の人生は狂詩曲^{ラプソディ}になる。

彼自身は何でもない男だ。

病弱的に痩せていて、色白で繊細な眸で、少し長いつややかな黒髪。誰からも、引つ込

み思案で臆病で、柔弱だと思われる。今も附属大図書館にいて、いりやがいることを知っていて、その傍に坐らず、敢えて遠くに坐って、それなのに、じっと見続けたまま、眼を離すことができない。

視線を移す。

又、彼の傍に坐っている炎裂帛汰と炎えれいんを見る。彼らは互いに又従妹（又従弟）であつた。いりやと玲央の関係と同じである。

嗟嘆せざるを得ない。

何度、神に祈つたであらう。

「あゝ、神様、もし、これが運命ならば、運命を変えてください。世界を変えてください。なぜ、世界は希望と異逆するのか」

祈るだけで運命が変わるものなら、もつと多くの人々が救われるであらう。だが、努力も必ず実るわけではない。いつたい、我々は何を知っているのだろうか。無知で知らない。愚かしいことであっても、人は祈るしかない。

眞義塾眞神大学は南北に十キロメートル、東西に五キロメートル。

その広大な敷地の中に、ゴシック大聖堂様式の図書館『ガレン』、第二帝政様式又はネオ・バロック様式の劇場『パレ』、古代ローマを模した円形競技場『コロッセオ』を有し、附属する幼稚園、小学校、中学校、高等学校を包含している。

敷地を南北に貫通する大路があり、東西に横切る大路と中央で交叉し、まるでコンコルド広場の凱旋門のように大通りの交叉する中心に門のような建築物があるが、（形式的には楼門であるが）楼閣部分は楼閣ではなく、大真義堂と呼ばれる金堂で、神仏の像が立体曼荼羅を描くように安置され、荘厳されている。

大真義堂の屋根の上には黒漆と黄金と紅牆のような濃くて鮮やかな深紅で荘厳された五重塔が立ち、天を衝く相輪（露盤、伏鉢、請花、九輪、水煙、龍車、宝珠）の先端は第一層から第五層までの高さと同じという異例な比率で、装飾的な神仏の剣のような鋭さ、地上から百メートルという壮大な高さであつた。

ここ大真義堂に至るまでは、南北大路の東側が幼稚園、小学校、中学校、高等学校（各種球技場や講堂、図書館、学寮を有する）の附属学校群で、西側にアリーナ、劇場、図書館など公開教育施設がならび、大真義堂から北側は東西ともすべて大学の敷地である。

さて、高等学校の敷地内。

濃い茶色の古い石造りの学寮は、葉が白く縁どられ、緑が濃いセイヨウキツタに蔽われている。蕭々と雨に打たれていた。緑の芝生も濃い。

「ちつ、出ないな」

眞神郡の特製であるペイズリー柄に曼陀羅模様を混ぜ込んだ意匠のベッドカバーの上で、胡坐をかいてスマートフォンを握る理愈が言った。

「お前のせいだろ」

アギトは無関心な表情でそう言い返し、さらに追い打ちをかけるよう冷静に、

「実際、お前、嫌われているのに気がつかないのか。ポジティブな奴だな」

しかし、頓着なく、楽しそうに理愈は、

「はーん。誰にでも好かれる奴なんて、主体性がないのさ。アイドルじゃあるまいし、万民に好かれる必要なんてない。本気で生きてりゃあ、価値観の相違でぶつかるのが筋だ。」

憎まれることは、人生のスパイスみたいなものさ」

その高校生らしからぬ言葉に、アギトは、

「何だよ、そのどや顔。オヤジかよ」

二人の傍には十三歳、眞神大附属眞神中学一年の天平伊咄亜がいる。彼女は眞神大学進学のための準備クラス『大學希望』クラスに入るための選考試験を受験中であった。このクラスは高一相当から始まるが、眞神では飛び級も可で、非常に稀だが、彼女のような生徒もいるのである。

六月から九月まで続く超難関の編入選考試験に受ければ、十月から高校一年生となって、三つ年上の先輩たちと一緒に学寮に入寮し、大学受験を目指すのだ。

「ちえ。飛び級で入ったあいつ（モレイ）なら、役に立つと思ったのにな」

ただし、モレイは休学のため、一年留年してアギトらと再び同じ学年に戻っている。

伊咄亜もちつと残念そうだったが、

「あ、いいんです。今日はいろいろ教えてもらってありがとうございます」

理愈は笑った。

「いいってことよ。姉ちゃんに負けるな」

伊咄亜の姉の咄咄亜は眞神高一年生で、現在、同じ編入試験の真っ最中であった。姉妹で狭き門を競うわけだが、姉の方が大いにプレッシャーを感じているであろうことは想

像に難くない。

三人は学寮にあるアギトの部屋にいた。わいわいしながらも、寂寥のある閑とした雨の休日。窓には雨滴。

あめのいさなこ

天之韋眞子は、現在、十九歳。眞神高校出身でも眞神大学生でもないが、図書館『ガレシ』の喫茶『グレコ』、ローマのスペイン広場の近くにある有名な『アンティコ・カフェ・グレコ』に因んで名づけられたその店がお気に入り、常にここにいます。MacBook Airを開き、何やら思案中。Artを愛するが、少し偏屈な変わり者の趣味人。

雄蕊のような睫毛に薔薇のような双眸で、上下の瞼がカフェモカ色、長く真っ直ぐな黒髪。ふつくりした紅い唇が少し突き出ている、眉毛を前髪が隠す。

古い皮革装丁の写本を紐解く。

女帝エレクシーネの物語について調べていた。実在の人物ではない。

ロマン

十三世紀の南仏の吟遊詩人が謡った物語に出て来るキャラクターだ。バーチャル・リアリティ・ゲーム『リアル・ワールド』にも二次作品的に援用され、数百万のキャラクターのうちの一人にもなっている。

次の作品で、悲劇の女性皇帝エレクシーネの像を描こうと考えていた。高い塔の上の一室に閉じ込められ、生きて怨霊と化した彼女の悲愴と恨みの凄まじさを描こうと考えていた。まるで、エロディヤードを題材にした詩作に没頭した象徴派詩人ステファンヌ・ラルメのように。空想を駆け廻らせてそれに耽り、夢と現実の境が曖昧になっていた。

元来、現実主義的でドライな性格だったが、時折、このような潮が彼女を襲うのだ。

「ドラクロアのような色彩で、ドミニク・アングルのような線、ニコラ・プッサンのように静謐で美しい構図、一瞬の激情をヴィヴィッドなままで永遠に書き留めたい」

先日、中学時代の同級生だった藤佐早蕨と電話で話したときも、自分の絵の話しかしなかった。

「お前、入り込みすぎだよ」

早蕨のいつもの飄々とした声がそう言う。

「わかってるわ。」

でも、それが私なのよ。確かに入り込み過ぎていることは感じてるよ。いつも夢に観る。だんだん、どっちがリアルだか、わかんなくなるほどね。

けど、夢の中で、私がエレクシーネになるわけじゃない。そこは違うのよ。そこでも、私はイサナコなの。魔法の国に一員ではあるけどね。

リアルな方が現実だと思う」

「リアルなのはこの現実だ。夢は醒めちまうし、夢で死ぬことはない。死ぬのは、この現実だけだ」

イサナコは微笑んだ。早蕨には見えないが。

「そうかしら。死んだ後に、夢で生きてないと、どうしてわかるの。この世界に死んだ人は存在しないわ」

「そりゃ、そうだな。それ言っちゃうと、もう、どうにもならないね」

「事実よ」

「わかったよ。で、観るのはエレクシーネだけかい」

「他にもいろいろ関連するキャラクターが出て来るわ」

「たとえば？」

「そうね、ラグナレク伯爵とか、古王国コプトエジヤの庶子ユリアスとか。でも、私は私なの。不思議なことだね。

猛吹雪の中、旅をしている。とても、ヴィヴィッドで、リアルで、どちらが自分の本業なのかわからなくなるわ」

「楽しそうだな」

「そうでもないわ」

喩咽亜は静けさを愛した。

彼女は思う。書籍から立ち上る知識の薫り。生きている人間が本質のない、得体の知れないナマコのような魑魅魍魎であるのに比べ、知の世界は規範たるべき本質を備えた建築物だ。かつてセザンヌが印象派を美術館のように堅固なものにしようとした試みは理解できる。

それに比べ、何と非知的な人間が多いことか。知性こそ人の証なのに。図書館の稼働率を問う議員の何と非文化的なことよ。図書館は貸本屋ではない。文化の伝承である。公立図書館の稼働率などを問い難ずる議員は猿の域にいる。非文化の証明でしかない。

彼女は一階にある広い閲覧室にいた。

そこは、図書館のメインを南北に走る身廊の東西に列する柱とアーチを隔ててある側廊から、さらに列柱アーチを隔てた外側にある第二側廊のフロアで、身廊・側廊・第二側廊の順で天井が低くなるため、三階建ての雑居ビル程度の高さしかなく、高窓もなく、低い位置から天井近くまである大きな窓が暗い石の壁に連なっていた。窓と窓の間はオーク材の見上げるような書棚で上の方の本は専用の梯子がないと手にできない。

雨を見るように窓の近くの閲覧机に首を傾けた。

今日は一般利用者が少ない。同じように勉強する十数人の生徒たちがいるだけだ。静肃で、雨の蕭々たる気配のみが感じられる。

喩咽亜は吐息した。

白く細い顎や鼻梁が気品のある、高貴で繊細な顔立ちの、美しい彼女も、その向こうの閲覧机で勉強している一つ年上の彝佐いみりや（彝配璃亜）の神の御子のような、光り輝く美しさに比すと、圧倒されてしまう。

美しいというよりも、真理アレーティアそのものだった。言語や思念を超えた直截的な真実だ。

しばし、勉強を忘れ、見惚れた。

あゝ、あんなに美しかったら、よかったのに。

多くの男子生徒が憧れる存在。喩咽亜も告白されることは多々であったが、よくあるように心で密かに想う人からは何も言われない。もともと、今は勉強が第一で、たとえば、その人から告白されたとしても拒否するであろうが。

彼女は情感を超越する理性主義であることを矜持としていた。自分でさえも、そこまでは気がつかぬほど深く想う人があっても。

雨のせいだ。十六時にもならないこの時刻を暗く感じる。

なぜか不安に駆られて、学園内を貫く大路の向こう、東側に威容を見せる附属高等学校の本校舎を眺めた。

南面する校舎はその左右に、東西へ延びる翼を持つ。両端に尖塔を持つその翼と交叉して十文字を成す本館は長方形で、上空から見れば、十字架を象る大聖堂カテドラルの平面図に近いが、最大の違いは、西欧建築が正面から交叉部までが長いのに対し、こちらは正面から交叉部までが短く、両翼と交わってから後が長かった。

大聖堂のプランが十字架であるのに対し、こちらの方は戦いの象徴、太い刀身と大きな鰐であるかのように見える。

大和朝廷への風水的な攻撃さ、といいかにも訳知り顔で軽口を言う者もいた。実際、どう

なのかわからない。実際のことなんて誰にもわからない。『大學希望』の学寮はさらにその奥だ。更にその奥には広大な大学のキャンパスが大路を挟んで広がる。

そのとき、妹からメールが来た。

『アギトくんの部屋にいるんだけど、来ない？』

喩呬亜は焦燥を感じる。気になるが、行かないことに決めた。動揺したくない。

知と静寂を愛する。本質を愛する。人間は癌細胞のようなものだ。同じような勢いで増え、生きている環境を破壊する。癌細胞と同じく、結局、自分を滅ぼすにもかかわらず、それを止めない。

知こそが生存を滅する放射線だ。

本を閉じた。『存在と時間』。選考試験の最大の難関は哲学だった。彼女は図書館を墓廟であると観ずる。墓碑銘は“Sein und Zeit”^{エヒタフ}

第二章 クレタ島の黒い悪魔アスタロテ

修学旅行は原則的に五月か、十一月に実施された。諸般の都合で、高校入試の時期である二月に実施されることもある。普通の学校では考えられないことだが、職員が人員過多である眞神高校では、授業の少ない入試時期に敢えて行事が実施されるのだ。恐らく公立私立を問わず、日本全国でこの学校くらいであろう。

その修学旅行で、^{いされお}彝佐玲央は奇妙な体験をした。稀有な二月である。数名の同級生か、アギトやモレイなど一部の後輩にしか話せなかった。

さて、眞神高等学校の修学旅行はあらゆる点で他とは異なる。

十四日間の旅行期間中、自由時間が四日ほどある。去年のテーマは『地中海、古代文明及びその周辺』だった。初日は機内泊、フランクフルトで乗り換えてローマに行き、遺跡を見学して一泊。翌日はフィレンツェに行き、アルノ川周辺やウフッティ美術館、サンタ・マリア・デル・フィオーレなどを見学して一泊。ベネチアに行き、サン・マルコ寺院やドゥカーレ宮殿を見学して一泊。シチリアに渡って、パレルモ市街や七つの神殿を見学し、一泊。マルタに渡ってバレッタ市街や巨石神殿群を見学して一泊。クレタに渡ってクノッソス宮殿やイラクリオン市街を見学し、自由行動も含めて二泊。グループごとにサントリーニやミコスに別れて渡り、三泊して自由行動。最後にアテネに渡って一泊し、機内で一泊（日付の上では、二日経過する）、全十二泊十四日だ。

視察した地域に関する歴史論文を帰国後四日以内に提出となっている。彼は常にメモを取り、どこに行くにもリュックに資料を詰めて歩き、主として英文、已むを得ない場合には、現地語の文献資料を買い漁った。

考古学博物館を見学し、クノッソス宮殿からイラクリオンへと戻る途中であった。玲央は或る憂悶に囚われ、半ば現実でないような、霧の中に生きている。地中海の明るい光の中で、それが熱に浮かされたときのような、朦朧として、黄昏のような幽愁を帯びた感情をなしていた。

不思議なことに明るい紺碧の空はそれを癒すどころか、影を濃くし、常軌を逸す何かを増長して名状し難い病んだ状態を、奇妙な感覚を醸造していく。

ずっとその奇妙な感じに、憑かれたように捉えられていた。或る種の神憑りのものかもしれない。地中海の気候風土が原因ではない。それは理由の一部でしかない。既に日本にいるときから、いつも「或る想い」のために、その翳りから免れることはなかった。瀝青のように、それは心にこびりついて離れない。

歴史に没頭しようとしても、思考はそちらへ移行しなかった。あれほど好きだったことも、まるで苦行だ。メモや資料収集に努めてはいるものの、魂のない浮遊の霊のようであった。

とは言え、全く無感銘だったわけではない。

彼が期待したような神的な、奇跡のような瞬間はあった。

クノッソス宮殿で偉大な雄牛と白くて美しい二人の女性を描いた壁画を眺めていたとき、ふとアルタミラの洞窟やラスコー洞窟の壁画を連想し、その刹那に何かが繋がり、何かが化学反応が起こり、何かが成就し、何か、現実的な、事実に魔法が行われた。だが、彼はそれを理解する言葉を持っていなかった。しかし、感じることはできた。

言葉がないと不安を感じる。存在だけが在って、理解がない、と。宙ぶらりんな状態だ。その刹那の奇跡は彼の魂を慰めはしなかった。或る意味では、不安定さを煽った。何かが起こったことを感じただけだ。いつも変わらない、底流に哀しみを湛える、虚ろな木靴の響きのような、憂鬱。胸を捉えて離さない、その人のためであった。轟佐いりや。それが彼女の名だった。

白と碧と赤によって織りなされる彼女は美しさのカノン（規範）だ。ルシアやイヴオ

アに連なる、眞神族の美（善・真）の系譜の上にある存在。明るい髪の毛は黄金の霧をまとっていた。燦然たる微笑を誰が愛さずにいられようか。

何よりも双眸だ。水色やコバルト・ブルーやパステルの青やフレンチ・ブルーやチュニジアン・ブルーや蒼や碧や群青や天青や藍や紺などの色彩が海のように層をなし、三次元のモザイクからなるブリリアンカットのダイヤモンドのような、奥底から射抜くまばゆさを発す。

その透明度はクリスタル・ガラスの比ではなく、リアルよりも鮮やかだ。人はまことにリアリティを欣求して生きるのものなのである。玲央も求めずいられず、憑かれてしまっていた。

彼女への焦燥に比すれば、現実のリアルさなど希薄だ。想いに囚われた者の常で、彼も五感が閉ざされてしまっていた。まるで、球体の中に封ぜられたかのように。

鷹揚なる、自由な、爽快な、太陽の炫く地中海が、異様を高まらせた。

奇妙な感覚に捉えられ続けていて、異国の情緒、風物がそれを増幅する。現実から乖離した感じ、現実感がなかった。薄い膜を隔てて、非現実的に現実を遠く遙かに眺めているかの感じであつた。

漠然とした苛立ち。乾燥地帯で覚える焦燥。

「さあ、出発です」

クノッソス宮殿の見学時間が終わると、ガイド数人が宮殿を廻って静かに声を掛ける。紺碧と純白のデザインされた貸し切りバスに賑やかに乗り込む。空も紺碧であつた。遙かなる絶望。瞼を伏せて古代の呼吸を観ずる。この苦しみから離脱したかつた。過去は決して過去ではない。今も、ここに於いて生きている。そう感じることによって、超越したかつた。

だが、その感慨も空疎なものであつた。浮遊するように、現実が自分の外で勝手に過よぎっているような印象を受ける。

出発してから、バスの中で小さな騒ぎが起こつた。気分が悪くなり、嘔吐した者が出たらしい。バスは止まり、外の新鮮な空気を吸わせるために暫し休憩となつた。

玲央も外に出た。イラクリオンまでわずか五キロメートルほどである。休憩の必要があるのかどうか微妙だが、そういう判断になつたらしい。それも運命のうちか。

乾燥した大地。わずかな灌木の繁みに囲まれつつも、頭一つ抜き出でた大岩があり、その下に小さな墓碑銘を見つけた。複雑な文様が彫られ、蝶々のような徴があつた。だが、

なぜかそれは禍々しい、昏い凄惨な感じを覚えさせる。

「あ、そこには近づかないで」

現地ガイドの女性が後ろから声を掛けた。

「え？ なぜ」

彼女は少し困った顔をした。イラつく。はつきりして欲しい。無駄に思わせ振りだ。

「この人たちは、ここをよくない場所だとしています。特に異国の人に、土足で踏みにじられることを厭います」

「聖域ということですか」

女性は歎息した。

「ええ。或る意味では。けれど、聖なるものではありません」

玲央はまじまじと祠を眺める。まがまがしい感じがしなくもない。

「呪詛ですか」

ガイドは再び歎息した。理解されないことを話すのが億劫ということか、玲央はそう思った。

金髪のギリシア女性はアジアの血の混じらない古来純粹の北方系コーカソイド人なのであろう。

「かつて、ここで惨殺がありました」

「惨殺？」

思ってもみなかった生々しい言葉だった。

「千七百年以上前です。アピリスチア・ステイノスという豪商がここで殺されました。彼は海を渡って故郷であるクレタまで逃げたのですが、逃げ切れず、ここで追い詰められ、喰い殺されました」

「喰い殺された？」

動物ってことか？ それにしても動物なら海を渡って追い駆けはしまい。人なのか。しかし、人が人を喰うのか。玲央は思わず周囲の牧歌的な景色を見廻した。あまりに似つかわしくない。

彼女のまなざしはますます深みを帯びた。

「ええ。とてもゆつくりと最も苦しむように。凄まじい叫びは三日以上続きましたが、誰にも手が出せませんでした」

「なぜ、そんな。しかも、喰い殺すなんて……。人間ですか？」

彼女は三度めの歎息をする。

「いいえ。」

恐ろしい悪魔だったと言われています」

「悪魔？」

悪魔、あくま、アクマだって！ バカバカしい！ いきなり腹立たしくなってきた。しかし、ガイドは相変わらず真面目な表情だ。余計に怒りが込み上げる。

冷静に深刻に、彼女が言う。

「マルコス……、マルコス・アスタロテ。黒の野獣です」

玲央はどうでもいい気持ちになつていた。伝説かよ。もしやとは思いつながらも、一応、真面目に聞いていた自分の愚かさにも腹が立った。騙されたような気さえもする。

「お疑いのようですね」

「そうですね」

今度は玲央が歎息をした。

女性ガイドが唐突に、ぎろりと睨むような眼つきになる。その変化に驚いた。それは疑われて怒ったというようなものではない。まるで、本性が露呈したかのようにであった。裏の世界がいきなり表の世界に顕在してきたかのようにであった。その額の暗さは尋常ではない。

玲央は背筋に冷たいものが走り、ぞつとした。

だが、二度三するとそれは消え、さっきまでの静かな、慎ましい感じに戻っている。

「あれは、いったい、何だったのか」

帰りのバスで考えた。考えても答えはない。

ホテルに帰ってから、友人と話をし、大いに笑った。ガイドの深刻な様子がいかにもおかしかったのだ。だが、玲央の心の奥には、最後に見せられた異様な眼つきへの怖れが燦ぶり続けていた。あれは何だったのだろう。

「さあ、寝ようぜ」

夜ベッドに入ると、玲央は鍵の掛かっているはずのドアが開くのを感じた。闇の中、黒い大きな影が立つ。深淵のように暗い影であった。その底知れなさは、光さえ吸い込まれ出られぬブラック・ホールのようなのだ。異次元への深淵は、底のなさということを感じる、どうしようもない本能的な恐ろしさであった。空のように巨大なる、無際限の谷底を覗き込むような根源的な畏怖。

「笑える者は災いなるかな」

地鳴りのように物凄い野太い声であった。玲央の脳裏を突如、様々な記憶が走馬灯のように駆け廻り続ける。「あゝ」

声にならない叫び。その記憶の大きな渦の中に巻き込まれ、引き裂かれ、闇に消え、終には意識を喪う。

気がつくとき、朝であった。

燦々たる日射し。悪い夢を見たんだな。玲央はそう思った。地中海の空は今日も紺碧であった。名残惜し気ながらも学生たちはわいわいと賑やかに記念写真なども撮りつつ、貸し切りバスに乗り込む。クレタを発つ飛行機では、玲央は出入り口に最も近い席だった。なぜかほつとする。だが、それも束の間であった。ドアが閉まる刹那だ。

「あつ」

何だろう、あれは。そう感じた。よく見えなかった。

ただ、半透明のような、黒い何かが、閉じようとする扉をすり抜けた。いや。

そういうふうに見えただけか。半ば透り抜けるようにも見えたが。

何だったのか……？ あれは。

もしや。いや、まさか。

玲央は寒気を覚えた。一刹那、憂悶を忘れた。

マルコス・アスタロテ。インターネット上で調べても、そんな名はどこにもなかった。

アスタロテ、というのは、検索に引つ掛かる。（むろん、マルコスというのにも引つ掛かるが、関係のありそうなものはない。新約聖書の筆者の一人とか、フィリピンの元大統領とか）

アスタロテと検索して、（検索結果を、悪魔に関するもの、と限定するならば）アスタロトと出てくるが一番多い。

様々なグリモワールによれば、アスタロトは悪魔の軍団の大公爵である。グリモワール『大奥義書』や『真正奥義書』などで皇帝ルシファー、君主ベルゼビュートとならぶ存在である。

ちなみに、グリモワールとは、ヨーロッパで流布した悪魔学書、魔術や呪術などに関する知識、奥義を記した古文書で、グリモワ、グリモアとも言われる。

このように高位の存在とされるのは、歴史的な起源があるからだろう。由緒正しいというわけだ。旧約聖書にも登場する異教の神アシュトレト（又はその複数形であるアシタロト。なお、この名はヘブライ人の間では、異教の女神を指す普通名詞として用いられた）に由来するという。

アシュトレトはオリエントから地中海沿岸まで広く信仰される豊穣・繁殖の神であり、イシュタルにも連なる。

イシュタルは古くはシュメール時代の豊穣神イナンナ（イナンナとは古代シュメール語で、ニン・アンナ「天の女主人」を意味する）をはじめとする太古の地母神の系列であり、メソポタミア神話において広く崇拜され、愛と美と豊穣の女神にして、戦い、金星など、多くの神性を有する。イシュタルという名は新アッシリア語で、語源はバビロニアの『星』である。

古代ギリシア、古代ローマでもアスタルテと呼ばれ、アプロディーテやヴィーナスに繋がった。

アシタロト、アストレトアドや、フェニキア人が天の女王と呼ぶアスタルテとも関連する。又、アシュトレトはエジプト神話では軍神アースティルティトと呼ばれ、戦車に乗り、盾と槍などで武装し、二枚の羽を飾る白くて尖った冠を被った女戦士であった。

その他にも、地中海世界で信仰されたセム系の豊穣多産の女神アスタルトなど、さまざまな女神と習合している。

又遠くは、インドのカーリーと同一視され、カーリーのような姿のアスタルテの刻像が見つかっていた。

「よくあることだ。異教の神を悪魔に墮す。つまり、アスタロテとは『悪魔』の意であると解釈しておけばいいのか。キリスト教のお家芸だ。他人を墮することでは自己を称揚できない人間は卑しいものだ。

けど、今更それをわかって、何もわかったことにならない」

それがマルコスとどう繋がるのか。この先はネットでは無理だ。

「やはり図書館だろうな」

雨の六月だった。傘の雫も憂鬱な日である。

玲央は学校の帰りに、大学附属の厳肅なるバロック様式の図書館に寄った。数十台あるデータ閲覧用のディスプレイの前に坐って、蔵書管理システム上で検索し、目録上、いくつかのそれらしい資料が見つかった。

どうやらすべてデータ・ベース化され、ネット上でも確認できるらしい。全ての管理番号をスマートフォンで撮影し、自宅でじっくり見ることにしよう。そう思った。

ふと見れば、館内の遠くに彝佐彝配璃亜いありや、天之モレイが見える。

近くには、炎家の炎裂帛汰れっばくたと炎絵咽韻えいゐんがいた。

なぜか、彼らの点在が意味のある符号のように見えていた。

学寮の自室で、理兪や伊咽亜の存在を忘れ、ぼんやりする。考えごとだった。窓を伝う雨を見ながら、思い耽る。

天平アギトには、最近、不思議に思うことがあった。

それはとても小さな円形の徴で、どことなく不動明王アチャラ・ナータ（阿遮羅囊他）の背後にある迦楼羅焰らえん（迦楼羅を象った炎）の文様にも似ているし、魔法陣のようでもあった。直径一センチくらいか。

校舎内の各所にもあるし、敷地内の樹木や噴水や図書館などにも散見された。

「なぜ誰も気がつかないのか」

気がついて、わざわざ口にしなないのかもしれない、とも思う。意味もわからないし、幼稚な悪戯にしか見えないし、もしくは思い込みの激しいオタクな狂信者かもしれないし。

話題として言う気にならないようなもの、と無意識的に感じているのであろう。

だが、アギトには気になった。思う当たることが一つだけあったからだ。

オンライン・ゲームだ。『リアル・ワールド（R・W）』というバーチャル・ゲームの中でこれと似たエンブレムを見たような気がするのだ。

「いったい、どのキャラクターが使っていたエンブレムか。思い出せない。もつともキラはたくさんあるから、ユーザーの数だけあるわけだから、憶えがなくとも当然なのだが、この中途半端な状態が嫌なんだよな。

何だろう。思い出せそうで思い出せない」

無意識的につぶやく。

何かとても大事なことであるような気がする。そんな想いもあるせいで、心に引っ掛かるのだ。

「最近ゲームもしないから、なおさら、思い出せない。

進学クラスに入ってからには全く時間がない。科挙の挙人や進士なみの生活だ。睡眠が精一杯だ。これで文化祭やら、欧州修学旅行とか、学校行事が多いから驚くよ。いったい、先輩たちはどうやりくりしていたのか」

しかも、文化祭ではロボット造りなど、かなり高度な出展もある。高校生で起業している奴らすらいる世界なのだ。修学旅行も十四日間も行くし。そのとき、ふとつぶやく、「そうか、修学旅行か……」

何が「そうか」なのかよくわからない。ただ、玲央先輩から聞いた話が妙に気になっていた。修学旅行で行ったクレタ島での話だ。

エンブレムではないのか。エンブレムとシンボルの違いは何だろう。さまざまに想いに耽ると、周囲の存在は忘れられていく。

いつもそんな想いを堂々巡り。『なぜ非存在ではなく、存在なのか』

ライブニッツはそう言うが、そんなこと誰にもわかりようがない。
わかり方がない。

第三章 幻 マヤ 色受想行識の連繋

存在とは何であろうか。誰もが知るのに、誰も知ることができない。

喩咽亜は存在を感じ、書物に向かって伏していた面を上げ、振り向く。

見た。

幻だろうか。

誰かに見られているかのように感じて向けた視線の先に、あり得ない人物がいる。風雨を構うこともなく、窓の外、芝生と彫刻の庭園に立っていた。銀髪その長きを靡かせて。誰も気がつかないのか。それとも自分にしか見えていない幻影なのであろうか。彼女は周囲を見回した。近くに人がいない。学友たちは遠過ぎて、気がついていないのか、いないのかさえも判然としない。再び見る。見れば見るほど、とてもよく似ている。

それも不思議な見え方だ。空間の遠近を超越したように、近くのものよりも近く、くつきりと晰らかに映えている。

いにしへの都の皇族。

ユリアス。沙漠の古王国コプトエジヤの国王の庶子だ。博覧強記で、世界に関する広い知識に基づいた、神慮とも言える賢察を有し、智慧甚深にして計り難く、その上に高貴な

る血を受け継ぐ身なるも、世界を彷徨う若き貴人。憂いの表情と長く靡く銀髪、むろん、現実の人間ではない。飽くまでもサイバー空間、バーチャル世界のみ。コスプレか。しかし。

なぜか、そうとは思えないリアリティがある。

あのまなざしの憂いは。むしろ、現実より鮮やかだ。リアルだ。生々しい。濃い。ヴィッドだ。深い。存在と現実とは、必ずしも一致するわけではない。

喩咽亜は立ち上がった。それは驚きのためか、謎を解こうとするためか、それともリアルな何かを求めてか。窓へと近づいた。

「あつ」

その男は微笑んだ。人差し指を唇に当てる。黙って、という意味か。なぜ？

そのとき、喩咽亜は背後から声を掛けられた。

「ねー、どーしたのっ！」

ドキッとして振り向く。

「イユノ先輩！」

「あれ、本当にどうしたの、顔が引きつってるよ」

「だって、先輩」

指差した。

「あそこに」

そう言うってから、そちらの方を見る。もはや誰もいなかった。

イユノは訝しげに、

「何なの？」

喩咽亜は赤面した。やっぱり錯覚？

「あ、すみません。何でもありません」

イユノは眉を顰めた。

「そうかな」

平衛家の本家、丘の上の赤レンガの家に住む嬢。カムいあれずを眞神族では大貴族の下位にあたる武門（近衛職）の家柄だが、眞神の主幸神である神彝イシユラルのかみ亞咽厨御に次ぐ大神威、彝懿羅婁神を氏神とする一族であり、決して軽んじられることはない。しかも、その氏神の天命の巫女とも言われ、普通ではない力があると囁かれる人であった。県立蒼龍高校から最近、転校して来たのだが、家が近いため、転入前からの知り合いである。

その人が印欧系の遺伝子を色濃く遺す顔を炫かせ、何かを感じ取っているらしかった。表情に古代の紋章が薄つすらとした青や金色の光となって浮かぶ。

「どうしたんですか、先輩。何でもありません」

イユノは周囲を見廻す。

「わからないんだけど」

「え？」

「何かが在るわ」

喩咽亜は不安を感じた。何に不安を感じるのか、どうして感じるのか、どういう不安なのかさえもよくわからなかったが、感じる。

「それが存在よ」

「ええ！」

感じていることを言い当てられ、喩咽亜は驚いた。「なぜ」という言葉さえ出ない。

「ふふ」

面白がって笑うイユノ。

「曖昧模糊。必死でそれを輪郭のはっきりしたものへ、理解の定まったものにしようとして、名前や特性（本質）を付け与えて、落ち着かせようとする。納得しようとする。自分の未来に不安があるから。怖れや期待があるから。希望があるから。」

それが存在よ」

彼女のまなざしの生き生きとした揺らぎの炫きが『その機（はたらき）が生命……』
と言うかのようなであった。

“色（感覚の素となる事象、物象）は即ち是れ空（ゼロ）。”それがないということ。
イユノが心から心へ、そう伝えてきた。喩咽亜は初めての経験で、吃驚する。幼い頃からの知り合いなのに、こんなことは一度もなかった。

「仕方ないわ。最近、覚醒したんだもの」

喩咽亜の驚きの意味を正確に読み、そう言う。これは心を読むというよりは、誰にでもある経験知から来る察しというものであった。

「昔から親類なんかに、そういうことしそうな人だと、言われ続けていたけどね、実際、本当に神懸ってきたのは最近なのよ。」

で、転校して来たってわけ。眞神高で学ぶ資格があるわけよ。眞神のためにも。余り気にしないで。何でもかんでも心の声が聞こえてくるわけじゃないから。

あたしの神様が気にするようなことしか聞こえてこないから。それですら聞こえないときもあるから。気紛れなのよ」

そう言って笑う。

また諭昶亜のスマートフォンが鳴った。

伊昶亜からであった。

「変な奴がいるぜ」

理兪は篠突く雨の降る、窓の外を見ながら、唐突に言った。

「何だよ、急に」

「いるんだから、急もへつたくれもあるかい。見たものはまさしく見たのさ。」

いや、なこたあ、どっちだって同じだ。ごちやごちや言わず、直参しろよ。見てみろよ。ほら、それだ。いったい、何だ、ありや」

怪訝な顔でアギトも窓の前に立つ。

確かに不思議な人物だ。

銀色の髪はくるぶしまであり、やはりくるぶしまである長いローブの上で翻っていた。急ぎ足で、雨をも物ともせず、学寮の芝生の庭を横切つて裏門へ向かい、樹木の生い繁る公園スペースへ向かっている。

白いローブにはフードがついていた。雨が降っているのだから、被つてもよさそうなものだ。しかし、敢えて使っていないようだった。超然として歩いている。

「何かに似てませんか」

二人の間から顔を出して窓の外を覗く伊昶亜が言った。

「似てる」

アギトがつぶやくように言った。

「でしょ？」

理兪も眉を顰め、

「あゝ、おまえらが何言ってるかわかった。コスプレか」

だが、アギトは別の方向を顎で示し、

「あつちも見えてみる。よくわからないが、ひよつとしたら、ただごとではないのかもしれない」

白いローブの男の、百メートルほど後を追う者がいた。

理愈が眼を丸くする。

りゅうしゅ

「龍咒先輩だ」

あまひらりゅうしゅ

天平龍咒は二つ上、眞神大学の一年生で、眞神高在学当時から奇矯な人、ニヒリストで通っている人だ。

一つ、こんなエピソードがあった。

三年前、文化祭で『黒い部屋』というコンセプトチュアル・アートをやることにクラスで決まったのだが、急に気が変わったと言い出し、天井も壁も床も黒く覆われた教室で、バケツ二杯に涵たした、紫禁城の紅牆のような濃い鮮やかな赤いペンキを振り回すようにぶち撒き、遊弋する緋色の龍神を古代の象徴のように表した文様を顕しめ、学友からは非難され、担任から叱責され、生徒指導部から説諭の上、停学処分となった。彼には現実なんて大した意味がないかのように見えた。

だが、古代洞窟壁画のような、原初的な龍のダイナミズムは、思春期の者たちには何よりもリアルで、一部の生徒の間で伝説になったものである。

当時、十四歳だったアギトも理愈もモレイもそれにインスパイアされたクチだった。

「いったい、全体、どうなってるのか、俺には」

「ともかく行ってみよう」

アギトは思い出した。

リアル・ワールド

あのエンブレムが何であったのかを。デヴィル・アスタロテ。R・Wのキャラだ。

血に飢えた殺戮鬼、そういう設定だったかどうか定かではないが、その類であった。アスタロテは戦闘範囲に結界を作る。それが彼の分身であるエンブレムで構成される大魔法陣だ。普通ならバカな話だと思うだろう。説明する気にならない。だから、理愈が眉を吊り上げて、

「行ってみようだって？ 雨だぜ。何だかもわからないのに？ 何の関わりがある？」

「お前の発言には矛盾があるな。」

さつき、ごちやごちや言わずに、と言ったのはお前だぜ」

「それとこれとは違うだろ」

「そうでもない。」

何だかわからないのに、行くのかと言うが、この世にそれが何であるかがわかっているものなど一つもない。

僕は行く。お前は行かない。ただそれだけがある」

「いや、俺も行くさ」

部屋をまさに出ようとする瞬間、アギトは振り返って、

「理兪、お前、最後にあれをやったのはいつだ」

「あれってのは？」

「バーチャルだよ、『リアル・ワールド』！ 決まってるだろ」

「あゝ、昨日やっただけだぜ」

「お前、試験勉強してるのか？」

「ま、いいや。で、伊昶亜は？」

「ゲームのことですか？ 半年くらいはやってません」

「僕も一年以上やってない。」

「じゃ。お前だ、理兪。最後のシチュエーションはどんなだった？」

理兪は怪訝な顔。

「いったい、どういうことなんだ」

「いいから、答えろよ」

「あゝ、いいとも。」

猛吹雪の中を、城攻めに向かうところだった」

アギトが嫌そうな表情をする。

「わかった。じゃ、防寒具だな」

「へ？」

クローゼットからダウンやらマフラーやらラムのコートやら諸々を出す。その他に、去年、初めて冬のキャンプに参加したときの装備がそのままリュックに残っていた。

「これは忘れていたな。好都合だ。お前、持てよ」

「何だか、わかんねーけど、じゃ、ま、わかった」

理兪は防寒具などを詰めたリュックを背負う。

「わたしも行きます。貸してください」

「いや、伊昶亜、君は」

「嫌っ、行きたい」

唇を歪めながらも、アギトは、「わかった。取り敢えず来ていい。でも、状況によっては帰ってもらうからな」

伊咄亜は頬を膨らませただけで、反論しなかった。その表情を見て、アギトは、あゝ、きつと来ちゃうんだろうな、というあきらめを持つ。

「行くか」

エントランスへ降ると、寛いでいた学生たちが不思議そうに眺めた。

構わずにポンチョを被り、防寒具をリュックに詰めた三人は雨の中、学寮を発つ。

龍咒は既に裏門から出て、公園スペースの樹林に消えようとしていた。その背中は煙る雨のために、遠くに微かにしか見えない。伊咄亜は姉にメールした。

第四章 萬物齊同 胡蝶の夢

本来なら笑うべきなのだろう、妹だつてその時点では本気で書いたわけではないはずだ。だが、伊咄亜にとつてはリアルだった。『先輩たちとユリアス追跡中（笑）』

伊咄亜は急いで荷物をしまい、本を返して外に出ようとする。

イユノは当然不審に思った。

「何か、あつた？」

説明が難しい。全部、勘でしかない。

「何でもないです。すみません、私、ちよつと行かなくっちゃ」

しかし、イユノに腕をつかまれた。その眼は光あふれる神の燦めきで熾えるように焼く。

「待つて。あたしも行くから。」

ウイちゃん、彝佐先輩を呼んで来て。

伊咄亜、車で行った方が早いよ。学寮の方でしょ。雨もあるし」

彝佐早蕨は伊咄亜の三つ上、イユノの二つ上の眞神大の学生で、龍咒の同期だ。車が廻される。

図書館のファサード前の広場にある二つの水盤の重なる噴水のあるロータリーにクロカン用の四駆が着くと、助手席にイユノ、後部座席に伊咄亜と天易ウイが乗る。

ウイはイユノの同級生で、彼女の属する天易家は古来、天文占星筮竹太占など易を司る家柄。色白の大人しい娘で、前髪を切り揃えた黒髪はどこか神秘的。

イユノが彼女と一緒にいることが多いことには、意味があつた。常に小型の羅針盤を持っている彼女は欠かせない存在であつた。

クロカン四駆は全天候型の大型タイヤをグリップさせて旋回し、大路に出る。

「……たぶん、……公園内の八角堂へ向かっていると思います」

夢を観るような表情で、ウイが無表情にそう言くと、どこかボンボンつぽさを残した洒落者の早蕨はタン色のドライビング・グローブを嵌めた掌でハンドルを叩き、

「よし。そいつは好都合だ。八角堂なら、公園内の車道が近くまである」

「でも、気をつけて。」

激しい気脈の乱れを感じます」

ウイがそう言った。童女のような神秘の瞳で。

天之モレイは先ほどまで、トリフォリウムを歩く人影が気になっていた。側廊の上は回廊になっていて、列柱アーチが連なっている。それがトリフォリウムと呼ばれる、特徴的な建築構造物だ。

最近、よく見かける幻影だった。

薄暗いのはつきりしないが、その人は床に引きずりそうな真つすぐの長い白髪で、白いマントを引きずり、その下には長くて白いトーガを着ているに相違ない。何もかも不鮮明なのに、薄青い双眸の燦めきだけが鮮烈であった。だが、それは旭日を浴びた湖のようなきらさらしたものではなく、氷河のように冷厳なものである。

モレイには、既にわかっていた。

ラグナレク、神々の黄昏。フランソワ・ラグナレク伯爵。山上のカルデラ湖に聳える湖上城の辺境伯、夢魔と人の間にできた子。その異能で、嬰兒の頃に父を殺し、少年時代には母を殺した男。

この何日か見続けている。萬物齊同。何も不可思議はない。玲央先輩が俺に話したのも、俺がこういう人間だからだろう。

館内には風もないのに、彼の髪はそそよと揺らいでいた。

ラグナレクはモレイを見下ろしていた。指で宙に何かを描く。モレイには指で描く何かが最初は、十字のように見えた。円のようにも見える。

だが、次第にそれが「卍」であることがわかってきた。

いったい、何をしようとしているのか。呪文か。印契か。指の動きの綾で織りなす神咒（真言・陀羅尼）か。

宇宙の神秘を想って一瞬、陶然とする。

まるでそれと呼応するかのように、光燦々たる炎が近づいて来た。

「ん？」

いや、実際はただの人だった。彝佐いりやだ。神のごとくまばゆい人。いりやが近づいて来ていた。

手に冊子を持っている。

『莊子 逍遙遊篇』だった。

しかし、話の内容は手に持ったものとは、何の関係もなかった。ただ、思わず立ち上がって、そのまま持つて来てしまっただけのようであった。

「天之くん」

その双眸の強い燦めき。様々な紺蒼碧青藍で作られた立体モザイクのような瞳の虹彩が、ブリリアントカットされたダイヤモンドのようであった。もしかしたら、彼女はイヴオアの血を引いているのかもしれない。彫金細工のようなどとも長い睫毛に囲われた『眼』という台座に据えられた神授の貴石のようであった。

モレイはその過度な美に動揺を覚えながらも、それに抗するかのように訝しげな顔を作り、問う。

「何だよ」

「勉強の邪魔をしてごめんね。イユノたちの動きが気になったの」

モレイは覚った。彼女も何かを感じている。

彼は彼ら眞神族が靈的に高位の存在であることを知っている。モレイには、この現実が二重露出のように見えた。現にある事実が、少し解釈を変えることで、全く異なるストーリーになっている。うなずいた。

「彼女らは車で出たようだ。ちよつと待ってくれ。俺の又従姉弟のイサナコを、さつき見かけたんだ。確か、車で来てるはずだ。追って行くのか」

あめの いさなこ
天之韋眞子（イサナコ）。二つ上の又従姉弟だ。

ちなみに、玲央はいりやの又従兄妹であった。

「え、どうして！」

いりやが行くのを見て、彝佐玲央は心臓が止まるような衝撃を覚えた。

思わず席を立てて椅子を倒す。浅ましい嫉妬とはわかっていても、苦しい動悸の暴れをどうすることもできなかった。彼が又従兄妹のいりやに心惹かれてから久しい。もつとも、いりやに心惹かれぬ男などいないが。

その動揺を、眼の前にいた炎裂帛汰と炎えれいんは見逃さなかった。

裂帛汰とえれいんは又従兄弟（又従姉妹）であった。なおかつ、二人は交際中である。つまり、玲央は（一つ歳下ではあるが）、似た関係でうまくいつている彼らにあやかりたいような、自分の悶々とした片想いの何かを（片想いを知られたくはないが）わかってもらいような、自分自身でもよくわからない曖昧模糊たる想いに駆り立てられ、話し掛け始めたところであった。

話し掛けておきながら、自分から逸脱してしまったというわけである。

「行けば解る。行ってみようぜ」

何もかも飲み込み顔で、直情行動型の裂帛汰が言った。炎家の特徴だ。えれいんも、間髪入れずに同意した。

「そうよ、行くべきだわ」

二人がそう言うには、もう一つ理由があった。むしろ、そっちの方が大きな理由であった。

荷物を急いでまとめながら、えれいんは裂帛汰にささやく。

「でも、あの黒い影は何だったの」

「わからない。」

でも、彼らを追うように見えたぜ」

「いりやを追う男は少なくないけど」

「そういう感じじゃなかったな」

龍咒を見失った。

「だが、この方角なら、八角堂で間違いない」

「なら、近道しようぜ」

理愈が生垣の中に突っ込んだ。びしょ濡れがさらに念入りにびしょ濡れになる。

「う、うわっぶ」

アギトは小枝や葉が口に入って吐き出す。

「ああん、最低！」

伊呷亜も悲鳴。

「だから来なくていいって、言つたのに！」

「行くもーん！ 大丈夫だもーん！」

八角堂が見えてきた。古色蒼然たる建物だ。八方に広がる瓦屋根。白鳳文化の趣がある。

「はあ、やっと来たな」

理兪が軒下の階段にしゃがむ。

アギトは休まず、鉄の扉に手をかけた。

「さあ、行くぞ」

重い音を立てて開く。

龍咒はいた。

ぼうつと立っているようにも見えた。

八角堂の中は、金銀や紫檀や象牙や縞大理石や宝珠などで荘厳され、柱に絡む龍王や十二神将四天王普賢菩薩文殊菩薩勢至菩薩觀音菩薩地藏菩薩弥勒菩薩妙見菩薩や不動明王大日如来・阿弥陀如来・釈迦牟尼如来の尊像が、立体曼荼羅を做す空間である。昭和初期の時代に造られたものであるが、各像には鎌倉時代のリアリズムの気迫があり、内装は藤原三代の頃の平泉のようであった。

「どうしたんですか、先輩」

「あゝ！」

理兪が問うのとアギトが声を上げたのが同時である。龍咒も顔がどこか神秘的だったし、彼の前に大きな魔法陣があつたからだ。それはアギトが見た迦楼羅焰の文様の魔法陣だった。

龍咒はしばらく無表情であつたが、やがて、

「奴がここに消えたのだ」

「奴って、ユリアスですか」

アギトが訊くと、龍咒は眼を強くし、

「あゝ、そうだ。お前たちも見たか」

「はい」

「昨今の異変は奴らのせいだ」

「異変？ 奴ら？」

「何だ、お前ら、気がついていなかったのか」

「はい」

「徴が遺され、結界が作られている」

「あ、それは気がついていました」

「耐火金庫にしまわれていた哲学試験の問題も盗まれた」

「ええ！」

これには皆が声を上げる。

「間違いない。」

外部講師でお前らの学校に来ている隆臥くんは俺の一つ上だが、彼が言ったのだから、間違いない。眞神の哲学に関する試験問題は、ただの試験問題ではない。真理の奥義だ。これを盗むことは大きな罪だ。

また、魂の穢れた者に奪われては、真理が悪用されかねない。大きな問題だ。どうしても追わねばならない」

「奴らって？」

「お前らが見たとおりさ。何か不思議があるか」

ある。あるに決まってるじゃんか。

理愈には信じられなかった。ここで消えた？　ばかな。ユリアスがだつて！　あり得ない。だが、不可思議な超越性を帯び、道徳とは別の魅惑を湛えた龍咒を見ると、眞実が逆転してしまうような錯覚が生ずる。

眞の韜晦者。あゝ、理解や眞実はこうして創られるのかもしれない。全てはただ力だけの世界か。

さような理愈の猜疑の表情を見て、龍咒は嘲り、

「疑うか。愚かな。」

そんなことでは哲学の成績は落第だな。莊周の物化を思い出せ。萬物齊同だ。全ては等しい。是非もないことだ。

莊周が夢で胡蝶になったのか、胡蝶が夢で莊周になっているのか。ユリアスが出たくらいで右往左往するな」

アギトはこつくりとうなずいた。その後、伊咄亜も。少し間をおいてから、理愈がうなずく。

龍咒は冷厳な遠い双眸をして長い髪をかき上げながら、

「よろしい。」

さて。ここから入るのはよいが、この先がどうなっているかがわからないので、思案していたところだが……」

彼も逡巡することがあるんだとアギトは想いつつも、

「真冬のようなです。でも、防寒具は用意しました」

それを聞くと、龍咒は眼を嶮しく細めながら、

「さすがだな。しかし、武器がない」

と言いつつも、神将像の手が持つ武器を抜いて、刃を眺める。

「上等だ」

「使えるんですか」

「心があればな。」

これから行く先は物象の世界ではない。忘れるな。心が全てを決める」
理愈が異を唱えた。

「しかし、先輩、なぜ、そんなリスクを冒すんですか」

龍咒はにらむ。

「先ほど言ったはずだ。真理を奪い返さなければならない」

伊咄亜が初めて龍咒に対して口を開いた。

「でも、どうやって入るんですか」

龍咒は冷笑する。

「難しくはない。我が真神族の者ならば。まずは防寒着をしっかり着るんだ。」

そして、印契を組め」

伊咄亜が困った顔をした。

「印契って？」

「こういうのさ」

アギトは右手と左手の指と指とを組み合わせ、独鉈印を結んで見せた。

「あゝ、何か見たことあるう」

龍咒は智拳印を結ぶ。理愈は遣魔印を結んだ。

龍咒が言う、

「では、瞑目して。」

そうら、あの菩薩像を見ろ」

見た。

木彫の菩薩は、背後の光背を輝かせ、蓮華座か、又は文殊菩薩の獅子や普賢菩薩の象などのように、禽獣座きんじゅうざに坐す、又立つ。

額には白毫があり、結い上げられた髪かみの結い残しを肩に垂らしすいはつ（垂髪）、下半身に裳も又は裙くん（腰に巻く衣）を纏い、左肩から右腰へ条帛じょうはく（襷状の飾布）を掛け巻く。

宝冠、瓔珞ようらく（貴金属や貴石を繋いだ装飾）、耳璫じとう（耳飾り）、天衣てんね（細長い飾り布。肩や腕に掛ける）臂釧ひせん（腕輪）、腕釧わんせん（ブレスレット）、足釧そくせん（アंकレット）を身につけている。

神秘的な気分になる。何かができそうな感覚がある。

龍咒は続けた。

「考えるな。言葉は虚しい約束事でしかない。根拠はない。経緯きんゐ、歴史性があるだけだ。時と経験が累積して荘厳な意味を支えているだけだ。心の機はたらきを動かす契機でしかない。

考えてみる。

夢を観たとき、行ったこともない場所がなぜありありと泛ぶのか、不思議に思わないか。なぜ細部まで具体的に、と。

理由は簡単だ。我々の見る具体性は、実は具体性を観ているのではなく、インパルスによる信号のいくつかによって、具体的に見ていたかのような心的効果を造って、それが観たものとして解釈されているに過ぎない。見たことのない土地を、現実に見たかのうに、記憶上に造ることができるのは、そういう原理だ。

しかも、夢も又、現実のように、自分の自由にはならない。好きなように動かせない。まるで客観的な存在のようではないか。現実との差異がない。

逆に言えば、この現実すらも、実は同じようなものかもしれないという、一憶測を可能にする。

全ては心機が領する。

それを鑑み、信じ、凝らし、合理的な濫用による解体を行い、この魔法陣が示す世界へと、ログインするんだ。

心機をつかめ、観照せよ。されば、自ずから動く」

わからない。

わからないけれども、わかるような気がする。

何をしたらよいのか、わかるような気がした。

身体から黄金の靄が立ち上る。そのような気がした。

腕や指先の皮膚の上に、螺鈿のように移ろう黄金で文字が泛び、燎原の炎のように、炫きを増しながら全身へと広がって行く。

たちまち、ぐるり、と世界が引つ繰り返り、意識が遠のいていく……解体され……散り散りになり、無辺なる宙空へ舞い消えて……再び結び直される……

早蕨の車が公園駐車場に止まると、

「おい、大丈夫か」

と声を掛けられるのも構わず、喩呿亜は濡れるも厭わず、傘を差しながら走り始めた。そうせずにはいられなかった。胸の苦しみに駆り立てられていた。

彼女を駆り立てている想いは、彼女自身が認めていないものだ。認めていないのに、生々しい。荒々しい。意思を超えている。そんなことない、そんなことないと、いくら心で叫んでいても。

平衛イユノと天易ウイがそれに続き、早蕨は最後に車のドアをロックしてから、追う。

ウイがずっと言い続けている。

「何だか、胸騒ぎがするの。」

気が乱れているわ。こんな乱れ方って」

イユノにもわかっていたが、うなずいただけで、何も敢えて語らなかった。

さて、その少し前だ。

モレイはイサナコが車を廻すのを待たず、先に大路に出て、ぎりぎりまで早蕨のクロカン四駆が路を曲がるのを捉えていた。

「どうやら公園の方へ向かったようだ。あ、こっち、こっち！」

イサナコの車が来て、濡れた体のままシートに雫を垂らし、助手席に座る。後部座席には彝佐いりやがいた。

「いったい、何だっていうの。いきなり来て、『車に彼女（いりや）を乗せて、図書館の前の大通りに出て』って。

あんたってば、訊いても、『とにかく急ぐから』って」

「でも、行動してくれた。説明しなくとも何かを感じてくれてうれしいよ。とにかく走っ

て」

「つたく。で、どっちへ？」

「えっと、あれ、あの、そう」

刹那、慌て過ぎて、頭が真っ白になり、言葉が出なかった。

「公園の方へ。そう、そっちへ」

「OK」

イサナコはハンドルを切った。プジョーがホイールスピンしてテールを振る。

傘をつかんだままの玲央が図書館を飛び出したとき、すなわち、裂帛汰とえれいんがポ
ンチョをつかんで被りながら外へ出たとき、イサナコのプジョーが大路で、モレイを拾っ
ているところだった。玲央は見失うまいと、切羽詰まった表情で走る。走り去った車の後
影が曲がって見えなくなる刹那を必死に視覚が捉えた。

執念でどうにかイサナコのプジョーが脇道に入るのを見ることが出来た。

「走ろう」

裂帛汰とえれいんは筋力に優れ、俊足だった。雨の降りしきる中、ダッシュする。玲央
は傘を差す暇もなく、たんだまに全力で走った。

頭の中では、同じ言葉が無意識的に繰り返されている。

「いりや、いりや。あゝ、ただ、それだけだよ。それだけが現実。それだけが真実、
生命の全て、僕の言葉と行動の全ての意味」

第五章 銀嶺、その非情

アギトは真っ暗な場所にいた。真っ暗な闇をだいぶ前からずっと見続けていたのに、真
つ暗だ、ということ、今、認識する。さらにその一瞬後に感じた、物凄く寒い、と。

「理愈、いるか」

しばし沈黙。え、僕は一人なのか？ と思った瞬間、

「あゝ、いるよ。やっと、意識が構成されてきたぜ。」

さつきまで、『どこ』とか、『どんな』ってのが、その内容が、じゃなくって、それ自
体が何だかわからない、って言うか、うまく言えないんだが、何て言うんだろうか、そう

いう枠って言うか、そういう価値設定が頭に構成されていなくて、何だか、あゝ、全く溺れちまってるみたいだった」

そう言えば。

アギトもだんだん吹雪を感じ始める。頬を切るような冷たさ。

新雪の上にしゃがみこんでいるようだ。周囲に樹陰を感じる。斜面だ。山岳地帯か。とてもなく寒い。漆黒であつても、感じる荒涼たる山の広さ。恐るべき広大な空間が凍え切っている。

「さあ、行くぞ」

龍咒の声だ。伊咄亜は？

「おい、伊咄亜、いるか」

理愈が大声を出す。

「い、います。はい、大丈夫です」

「お前たち、防寒服をすっかり着てるか」

三人がハイと応える。だが、凍るように寒い。

しかし、龍咒はすぐには進まなかった。

「とは言え、どっちへどう行くべきか。

何も見えないし、何かが起こっている様子もないな。最近、来たのは理愈、お前だったな」

「はい、そうです」

「ここは、どのあたりだ」

「いや、さっぱり。夜なもので」

「だめか。頼りない。では、野営しよう」

龍咒が決然と言うと、理愈が声を上げる。

「ここぞ！」

「じゃ、どこなら、いいんだ？ どこに行けば、いいんだ？ そこに何があるんだ？」

「い、いえ。わかりません」

「じゃ、ビバークだ」

最初、雪でカマクラを作ろうとしたが、伊咄亜が悲鳴を上げた。

「きゃあ！」

「どうした？」

理兪がそう尋ねる間に、龍咒は調べ、

「動物の死骸だな」

訝しげな声で理兪は、

「熊か狼の群れにやられたのかな」

「それはおかしいな。ここにいる三体は、一頭の熊と二匹の狼だ。しかも、バラバラだ」

「猟師ですか」

アギトの言葉にも、龍咒は首を振る。

「じつと見ると見えてくると思うが、これは刃で捌いたものではない。鉤爪を喰い込ませ、物凄い力で裂いている。裂いて、内臓を喰っている。喰いちぎった痕もある」

理兪が強張ったのは寒さばかりではない。

「何か怪物がいるってことかよ、それとも、悪魔？」

龍咒は冷たく鼻先で笑う。

「ま、そんなところだろ。」

考えてもわからない」

気味が悪いので大きく場所を変えて、再び作業に入るも、もう体は凍え、手はかじかんで作業がはかどらない。そうこうするうちに、大木に大きな洞があるのが見つかった。

「広い。腐食もささくれもない。乾燥しているし、洞の壁面も滑らかだ。思っていたより、も遙かに快適だな」

「まさか、熊がいたんじゃない。だとしたら、戻って来るかも……」

「ならば、臭いがもつと残りそうだ」

「むしろ、ヒノキの匂いにする」

「空気坑を残して、雪で或る程度、塞ごう。武器を出せ。刃の尖を入り口に向け立てておくんだ」

時がただ過ぎた。ふと。

吹雪の物凄い風音を通して、何かの気配を感じる。雪を踏む音も。これって、もしかや。

四人が闇で顔を見合わせる。

「熊だ」

龍咒が小さくささやく。伊呷亜が悲鳴を上げそうになった。その口を理兪が押さえる。近い。唸りや、鼻息も聞こえるようになった。大きく木が揺れた。前脚で打ったようだ。怖ろしい熊の咆哮が響く。

「ぐがああおー」

雪で塞いだ入り口を前脚で払おうとして刃で掌を切ったらしい。洞の中にも、ドスンという衝撃が走った。

「やばいな」

龍咒が言う。そのときだ。突如スマートフォンが鳴った。理愈が声を殺して悪態を吐く。

「バカ、何やってんだよ」

「だって！」

伊咄亜のスマホだった。

「があああおおお」

凄まじい熊の雄叫び。

「クソ、闘うか」

だが、理愈は腰を浮かしかけたが、意外にも熊は叫びにも似た咆哮を上げながら走り去ってしまった。じつとしていた龍咒が冷めた皮肉な口調で、

「どうやらスマホの音に驚いたらしい。そんなもんだ」

「何なんだ……」 「ふう」

しかし、一難去つてまた一難。

「おや、この異様な腐臭は」

理愈が言うと、龍咒が鋭く制す。

「声を立てるな、オークだ」

しかし、鼻は向こうの方が敏感であつた。

「ぐふ、ぐふふふ。臭うぞ、臭うぞ」

「げへへ。隠れてるつもりらしいが」

「この木だな」

しかし、龍咒は落ち着き払っていた。

「どうやら敵は三匹だ。今この場限りに於いては。

殺れる」

空気の波動で理愈がうなずくのを感じる。その震えを。アギトも同じだった。

龍咒が飛び出して、ばつさり。禍々しいオークの悲鳴は吹雪にかき消される。

「心を観ぜよ。ここに入ったときのように、印契を結びながら。念いを凝らして印契に集中しろ。念いを胸に燃やして己に帰れ。ログスに聴従せよ。目覚めよ。そして、……敵を

打っ！」

何だかわからない。何を言われているのか。ただ、無我夢中だった。

心で結んだ印契が炎の文字となって全身に走るとき、身は軽やかに躍り、気志神の如く、気がつけば全てが終わっていた。三匹のオークは雪上に斃れている。

「おい、アギト、俺たち、やったのか」

「ど、どうやらそうらしい」

「うひょー、初めてだぜ」

龍咒はそんな二人の感動や動揺にもお構いなく、

「さあ、武器を奪え。鎧は無理だな。臭過ぎる。剣や楯も雪で濡いでもダメなら、仕方ない。さすがに俺もそれを我慢しろとは言わない」

楯は腕にはめるタイプだったので、あきらめた。剣は奪った。アギトが龍咒に言う。

「武装してます。きつと軍の一部でしょう。近くにオークの軍隊がいます」

龍咒もうなずく。

「そうだ。ところで、理愈、お前の記憶の限りで戦争にオークは参戦していたか」

「人間だけのはずだった、と」

「わかった。戦争している奴ら以外に何かの力が働いているということだ。この戦場では。」

そもそも、この戦争は何なんだ？」

理愈が答えた。

「現皇帝である女帝エ렉シーネとその父である上皇ストウークインの戦いです」

「骨肉の争いか」

アギトが問う。

「そうとも言えるが、そうでもない。エ렉シーネは建前上、上皇と后アキーコネの間の子だが、実際は上皇の父である法皇ゴーシライとアキーコネの娘なんだ。公然の秘密とも言える。」

アキーコネは幼少女のときから眉目秀麗で、七歳のアキーコネを当時上皇であったゴーシライは片時も手元から離さなかった。ストウークインとアキーコネが婚姻してからも、ゴーシライは夜な夜な后プライベートな寝所に忍んで、交わりを結んでいたらしい。

上皇は女帝エ렉シーネを娘と認めず、嫌否している。決して顔を合わせようとせず、皇城とは別に上皇は宮殿を建てて」

伊咄亜が歎息し、

「娘にとっては途方もない不幸ね」

「そう。」

しかも、それだけではない。分裂と運命の悲しみのためか、皇太后アキーコネは三十半ばの若さで崩御された。

その直前、太后の危篤を聞いて、最後にひと目会わんと駆けつけた女帝は門前払いを喰らい、遂に今生の別れ、死に目に会うことはなかった」

「何てことなの」

伊咄亜は涙ぐんでいる。龍咒も皮肉な笑いを泛べながら、

「是非とも女帝側に味方したくなる話だ」

理愈は咳払いして話を続けた。

「さて。ここで行われている戦争はその一部だ。地方の、ほんの小さな一部だ。

ヘンリー伯爵と武装集団グウェイとグレンの傭兵隊、これが女帝エレクトシーネ派だ。そして、聖ユーロックス騎士団とヴィルヴィル男爵、こっちは上皇ストークン派だ。

だいたい、察していると思うが、ここは山岳地帯で、それぞれ山の中腹に陣を構え、谷の平野を挟んで対峙している。氷河の削った底の平らな広いいくつかの豊穡なる谷以外は、入り組んだ小さな嶮しい深い谷ばかりだ。それは、たくさんある」

アギトが尋ねた。

「僕らが今いるこの山は、どっち側だ。女帝か、上皇か」

「さあな。こう真っ暗じゃ見当もつかん」

「あの三匹のオークの兵は何なんだったんだろう。戦争には関係なさそうだな。オークの傭兵など使うだろうか。ということは、この戦争とは別の何かの動きがあるってことか」

「だろうな」

「第三の力か。さあ、どうしましょう」

アギトの問いに龍咒は冷笑的に応える。

「戦争している者たちが試験問題を盗んだわけではない。どちらかと言えば、その第三勢力とやらを調べる必要があるかもしれないな。」

暗躍しているそいつらを」

「取り敢えず朝までは隠れていませんか。できれば、気候が回復するまでが望ましいんですけどね」

理愈の言葉に、龍咒は苦笑しながらも、

「やむを得ないだろうな。」

ところで、伊咄亜、さっきの電話は誰からだ」

「あー、すっかり忘れてましたー。えーと、あ、お姉ちゃんだ」

「喩咄亜か」

「ええー」

「何だ、どうした」

「あたしを探してるって。八角堂まで来たけど見失って。」

けれども、イユノさんが一緒に、彼女が『伊咄亜たちは魔法陣から入って行った』って
言っているんだけど、本当なの？って訊いてます。

イユノさんは入ろうとしているようだって」

「イユノがいるのか」

龍咒の声が希望を帯びた。

「彼女がここにいてくれれば心強いが。ただし、防寒着を用意するように、もし来るならば。」

そう伝えてくれ」

「わかりました」

「よし。それまで凌ごう。最大の心配はオークの軍隊がどこにいるかだな」

龍咒がそう言うと、アギトは、

「奴ら嗅覚が鋭いです。雪に隠れる方が賢いかと」

龍咒はオークの死骸を見ながら考えた。悪鬼どもの荷物を探る。

「うーむ、どう判断すべきか」

「どうしたんですか」

アギトが尋ねた。

「見ろ、これを。見えるか」

眼は闇に慣れ始めている。

「携帯食糧ですね。本隊はさほど近くではないかもしれませんが」

「同感だ。ひとまず安心としても、油断はならない。ともかく我々の今は脆弱過ぎる。」

傭兵部隊に雇ってもらうか。いや、信用されまいな、こんな戦場では。スパイだと疑われるのが関の山だろうな」

上空の強い風のせいだろう、雲が切れて一瞬、皓月に照らされた非情な銀嶺が遙かな頭上に聳えているのが彼らの眼に映った。それは神の威嚇のようにも見える。怖ろしいばかりの、底知れぬ大威厳であった。

理愈が気づく。身をかがめて、

「これって、人間のものじゃ」

革の切れ端を奪うようにつかみ取り、渡す。龍咒は眼を凝らす。

「まさしく。」

地図だ。これは隠し場所だな」

「隠し場所？」

「そう。山賊なんかが略奪品を隠す場所を記した地図だ。理愈、これは、この辺りか」理愈はしばらく眼を凝らし、闇を透かそうとする。微かに明るさが現れ始めていた。

「よくわからないな」

「そうだろうな。わかるくらいなら、今、ここが上皇派側か、女帝派側かわかるはずなのな」

龍咒が皮肉な口調で言うと、アギトが地図と一つの山を見比べ、

「あの三角の尖った山の位置と、三つ峯のあるあの山と、この谷川の位置。どうですか。地図と似ていませんか、ほら、この辺です」

「似てる。よし、探そう。よく気をつけて」

雪に腰まで埋まりながら進む。吹雪きに、皆すぐに息を切らせ、休む。凍え切った身体。また進む。飢えが襲う。休む。手先も足先も感覚がない。寒さと疲労感と空腹、先の見えない不安、絶望感。しかし、必ず夜は明ける。もう限界だと思っても、無理やりもう一度、一歩足を前に出した。

黎明。やがて夜が明けた。身体は相変わらず凍え切っているが、心の何かが少し緩む。吐息した。

「何かほっとしますね」

伊咽亜がアギトに言う。

「あゝ、そうだな」

無関心な龍咒とは異なり、アギトは、

「希望が湧くような気がする。昨日までの不安や暗鬱が嘘のようだ。生まれる前の胎内から希望の生存へと脱出したかのような気分だ」

地図の示す場所のうちの一行くと、山賊は殺されていた。雪に埋もれ、人型の盛りになっている。血は雪に濯がれ消え、凄惨な感じはない。

「まさかあの三匹のオークがこれをやったとは思えない。ここを襲ったときは、集団だったんだろな」

龍咒が分析すると、アギトは、

「じゃ、ここは、通り過ぎた後つてことですか。ということは、奴ら三匹は偵察というよりは後始末、後処理つてことですか」

「生き残った山賊の追尾を抑える役目だったんだろな」

「そうですか。つてことは」

「そうさ、山賊どもの生き残りがいて、再びここに舞い戻つて来ないとも限らない。

備えと用心は怠らないようにしましょう」

龍咒は無情にも死骸を雪盛りで支えるように坐らせて、周囲をにらむように半環状にならべて配置する。咒を唱えた。

「呪詛だ。

横変死した人間の怨霊が壁となつて敵を近づけない。東洋の古代社会で行われた手法だ。領域の境に立つ木の枝に生首を逆さに吊るす方法もある。蒼褪めるな。同情もいらない。人の権利を奪う者に人権はない。生きる資格もない。

人権は生得権だが、永遠ではない。人の価値は行為で決まる。当り前のことだ。人道を踏み外す者は自ら望んで人権を放棄するのだ。同情の余地はない。彼らの望みどおり、剥奪してやればよい。

さあ、少しだけ洞窟の中を調べよう。全て調べたいが、その余裕はない」

と言われても、アギトも理愈も伊咄亜も真つ青になつて震え上がっている。

龍咒はそんなものは無視。

さて、探してみれば、洞窟には武器が隠され、食糧の備蓄があつた。乾いた薪もたくさんある。早速火を点けて、暖を取ると、指先に血液が甦り、生き返つたような気がする。痺れるような快感だ。

「山賊どもが占領する前は神聖な祭祀の場所だったかもしれないな。何となくそういう神域的な気配がある。これも縁だな。

さあ、ここをベース基地にしよう。イユノたちを呼び寄せてくれ」

「そういう装備なら車にたくさん積んであるよ」

早蕨は車のラゲッジ・スペースから荷物を取り出すために、八角堂を出た。出た途端に、モレイ、いゐりや、イサナコに会う。

「どういうことなの」

イサナコの問いに早蕨は答え、彼女らは話を聞くと、眼を丸くする。

「防寒の用意？ 今すぐは無理ね。家まで戻らないとないわ。」

え？ 行くわよ。むろんじゃない。疑うわけないわ。面白そうじゃん」

面白いから疑わないのか、とちよつと思わないでもないモレイであったが、行くこと自体には賛成であった。

かくして、早蕨を含めた四人が駐車場まで引き返そうとするまさにそのとき、黒い影が過ぎつたような気がした。

「あ」

「え？」

「何、あれ」

戸惑っているうちに、走つて来た裂帛汰、えれいん、玲央とばったり遭う。彼らの顔に緊張感が張り付けられているのを早蕨らは感じ取る。

「何だ、どうかしたのか」

そうモレイが言うと、

「黒い人影がおまえらを追っていたぜ」

裂帛汰が言う。

「え、どういうこと」

イサナコが問い、いゐりやが説明した。

玲央は憂鬱な顔になる。

モレイは考えた。しかし、どうとも判断できない。ならば、考えても、どうにもならないではないか。ともかくも、早蕨以外の六人は防寒を持っていないし、早蕨もそんなにたくさんの防寒具を持つてはいない。喩咽亜やイユノやウイの分だけで精いっぱいだ。

というわけで、モレイや玲央など六人は一度帰って、防寒具などを持って、またここへ来ることにした。

八角堂に魔法陣があり、そこから入るといことが伝えられ、その方法については、伊

咽垂からのメールを皆に転送することで解決した。

メールを読んでから、イユノが言った。

「だいたい、合っているけど、これではうまくいかない場合もあるわ。八角堂の神将に力添えをお願いしておくから。」

実際、あそこの立体曼荼羅は、真義堂の縮小版で、何か特異な力を發揮するための、特殊な真理の場所なの。そういう空間なのよ」

イユノは八角堂へ視線を遣っただけだった。それで全て済んだらしい。双眸が一瞬、金泥の鈍い反射光がゆらり、とゆっくり動くように揺らいただけであった。

解散、早蕨は防寒具等を抱え、八角堂に戻る。

「さあ、これだ」

防寒を配り、道具などは自分が持った。テントや鍋やランタンだ。早蕨は汗を拭う。笑顔は軽い。

「さあ、行こうか。冒険へ」

八角堂の堂内、朱塗りの柱のひとつに、アギトたちが来たときにはなかった大きな黒い手の跡が残っていた。よく見ればそこには深い爪の後も。しかし、誰も何も気がついていなかった。

第六章 ログスに聴かせよ

預言者ノストラダムスはロウソクの炎を見つめていると瞑想的な気分になり、未来を幻視できたという。

夕暮れどき。火を囲みながら龍咒が語った。その淡々たる口調を聞いていると、アギトはアルタミラやラスコーの洞窟に暮らしていた石器時代の人々のような気分になる。

「言葉は無力だ。」

我々は常々それを感じる。

無力とは正確な言い方ではない。蝶の羽ばたきは無力だ。しかし、自然の本質と矛盾しない。だが、言葉や概念は空疎だ。乖離している。何と？ 何かとだ。真実から言うべきか。現実性が欠落していると言うのがふさわしいか。

正確な言い方が出来なくてわかりづらいかもしれないが」

龍咒は言葉を切った。そして、再び続けた。アギトや理兪や伊咽垂は秘儀参入するのよ

うな気分には踏み入る。

「なぜ空疎なのだろう。」

言葉だって、鳥の囀りのように自然が生み出したものの一つなのに。決して自然（神）の本意から外れたものであろうはずがないし（神の本意から外れるものなど存在しない。神は全能だから。背教や異教を認める者こそ神への冒涇者であり、背教徒であり、異教徒ではないのか。もつとも、これは矛盾した意見だが）、外れることなど不可能だ。

だとすれば、論理的な思考の範囲内で考えられることは、ただ一つ。これも本意のうちなのだということだ」

「言っていることは何となくわかります」

伊咄亜がそう言った。龍咒は寂しく苦笑する。だが、彼女にはわかりはしまい、などと思っているのではない。知と無知に何の違いがあるのか。

「俺は思う。人類は失われたものを取り戻そうとしている。失われた能力、だ。動物は教わらなくとも食べられるものを知っている。空も飛ぶし、海にも潜る。人間は科学を発達させてようやく追いついた。言葉を発明し、思念を練って、ようやくだ。」

自然の意志は不思議だ。まるで本当に誰かが知恵を絞って考えているかのようなようだ。擬態する虫や川に帰る魚や美しく咲いて受粉の手伝いをさせる花々や。

たとえば、チョウチンアンコウ（提灯鰻鰻）だ。彼らは頭部の誘引突起（イリシウム）から、餌となる魚たちを誘うため、又は相手の眼を眩ませるために、発光液を出す、不思議に思わないか。まるで誰かが思案して発明したかのようなアイデアだ。人為的な仕掛けのようだ。

だが、それを人為的と思うのは顛倒した思想だ。当然逆で、人類が膨大な潜在意識の中から本能的に汲み上げて、無意識に模倣したから、結果として人為的なものと似ているのだ。

そういう意味では、月影や風や潮や雨のように、人間の創意工夫も自然現象のうちの一つなのだ。ならば、言葉の空疎化も自然の必然なのだ。

一度失い、懸命にそれを取り戻すかのように見えることも、実はそうではない全く違うことか、もしくは人類の考えるような意味とはかけ離れた意味を持っているか、或いは想像もつかないような何かなのだ。

それは、見かけとは、違うのかもしれない。あたかも、神が全能なのに、異教徒や背教徒が存在するかのように見えるのに似て」

アギトは心を清まし、静かにさらに静かな境に、言葉にできない深い瞑想に入った。途轍もなく深い闇。深い深い底なしの漆黒。そして途方もなく広い。焰があった。聖なる蒼の焰が。それは摂理に適った力であった。ロゴス。

古代ギリシアの（生まれは、今で言うトルコ西部だが）哲学者ヘラクレイトスはロゴスに聴従せよと言った。

そのとき、理愈と眼が合った。互いの感覚を理解し合う。同じことを感じているのだということ、はつきりと感じる。

なぜ自分たちが獰猛なオークたちを斃せたのかを理解したのだ。理は力なのだ。自然の理に通暁すること。失われたものを取り戻さなければならない。

それが自然の意志なのだ。

そう直感するとき、大自然という巨大な大河の微妙な琴線に触れた。そして、感じる。

「来たな」

アギトが言った。

「ああ、そうらしい」

理愈もうなずく。龍咒は皮肉な笑みを泛べる。

「そのとおりだ」

アギトと理愈は剣を持って飛び出す。

夜陰に、まなざしを覗する。卑しい獣欲の眼を。くだらぬ欲望のために他人の生きる権利を平気で奪える人間の屑ども。そのくせ、自分の生きる権利が損なわれるときは醜く抗う人種。卑しい山賊どもの残党だ。

真理が最も強い。正義が生きる意味だ。それらが現実だ。

アギトは敵が来るのを待たない。舞うように高く跳ね上がった。実際、常人ではあり得ない飛躍である。隼のようであった。

視覚に捉えられなくとも、正確に存在を把握し、針の穴に糸を通すように精密に繊細に数人の間を抜けて斬る。

逆に理愈は雪を蹴って跳ぶも、地上すれすれに低空を平行に飛び、敵を下から上に縦裂きに斬り上げる。

「ひやつほう、一丁上がり！」

楽しくなってきた。次第に恐怖は薄れている。凄いスピードで山賊どもの間をすり抜けながら、頭上を越え、足下をかすめ、斬る。まるで燕だ。「そらそらそらそら！ う

ひゃあ、ジェットコースターのように楽しいぜ」

たちまち叫びとともに十数人が斃れた。

暗闇を韋駄天のような速さで自在に剣を振るう二人に山賊どもは怖れを成したが、遅過ぎた。一人残らず、退却する暇もなく、無残な遺骸となる。

「た、助けてくれ！」

「助けてくれだと？ お前にそう懇願した人を何人助けたことがあるのか？ ないだろ？ ないくせに、自分のときは助けてか？ 醜過ぎるっ！ うぜえっ！

早く死ね！ って言うか、初めから生まれて来るな！」

理愈はそう怒号し、襷掛けに切断する。

剣の刃先をそつと撫で、闇を透かして見た。刃毀れしていない。

「簡単過ぎるな。人間はもう相手じゃない」

アギトがつぶやく。

この修羅場においても深く瞑想に入る。心身を統一する。背中と、かかとで呼吸する。息を吐きながら、臍下丹田に気を込めて硬く膨らませる。

心（神）を精妙にする。

全ては呼吸だ。敵の気脈を読み、おのれの気脈を知る。機をつかみ、機はたらきに身を任せ、ロゴスに聴従し、存在を解明し、自然の理に沿って戦う。自然の摂理に遵って、攻撃をかわし、敵を打つ。自然の摂理を以て勝つ。

どこまで深い真理に達することができるか、それが勝負を決める。

真理は言葉でも概念でも理解でもない。実在する。

呼吸を整えながら、鳳凰のように左右の腕を広げ廻して、日輪のごとき円を描き、全身に耀く螺鈿のような人間の文字ならぬ聖文字が泛ぶのを観ずる。

これが真理の末端である。これを極めた者が最強となる。

試験問題を追う意味が次第にわかってきた。確かに意義があるし、間違いなく危険だ。しかし、奥義に達した者が悪に走るであろうか。

それはわからない。全ては戯れのようにも見える大「自然の営みだ。自然の考えることは、人間の概念を遙かに超えている。

アギトはそう感得した。

周囲は死の静寂。濃い黒の深み。だが、感じる。禍々しい怒り、無知、怨嗟、憎しみ。ねじくれた魂、残酷さ、無関心、蒙昧、非情。

これは、いったい。

ぶびゅつ。

耳を劈く風切り音が空気を裂く。火矢だ。突如、火矢が飛んで来た。と同時に、周囲から異様な臭気が。低い獣的な唸り声。爛々たる赤い獣眼。

闇を透かして本質を観ずる。

理愈が嫌悪を露わに、

「アギト、オークの軍隊だ。反吐野郎ども、来やがった」

動揺もせずにポーカーフェイスで、アギトは、

「らしいな。さて、最後尾の処理隊が戻って来ないから引き返して来たのか」

唾を吐き、理愈が、

「奴らは、そんなに律儀じゃないだろ」

「ふふ。じゃ、本能で、何かを嗅ぎ取ったか」

「それとも誰かが操っているか。そいつが試験問題盗難と関わっているに相違ない」

「盗んだ張本人かどうかは別にして、関わっているからこそ僕らを狙う、ってことか。

それは、あり得る！」

斜面に展開する数百もの禍々しい修羅の群れ。闇でも爛れるように燃える赤い眼。獣のような唸りは彼らがまたがるワグ（巨狼）の唸りだろう。獣と化け物どもが発する異様な臭気が黄色く漂うのが見えるかのようだ。

龍咒が出てきた。

「打って出るな。洞窟の出口を護れ」

「しかし、それでは時間の問題」

そう言いかけたアギトが次の言葉を言う暇もなく襲い掛かる群れ。太くて野蛮な剛剣、残忍な大鎌、驚くべき大鈍、巨大な戦斧、ハンマー。獰猛なワグの怖ろしい醜怪な顔、涎を曳いて舌を出し、尖った牙やコウモリのような鼻が迫る。

突如、松明の炎が照らす。

「おお、我こそはゲルドバルド軍団第九連隊長ウガルッド様だあ。

さあ、臆病者ども出て来い」

巨躯で筋骨隆々たる毛むくじやら、ワニのような顔のオークだった。

その迫力にアギトも理愈も一瞬怯むが、龍咒は飛び出し、

「俺が相手だ」

その手には八角堂から持って来た神剣があった。氷河のような蒼白いほのかな光を発する刃を大きく振ると、ぶわおつと音を立てて、炎のように、赤みがかった黄金に燃え耀く。

襲い掛かる巨大な狼を二、三匹まとめて一刀両断する。

「小癩な」

ウガガルドが『二律背反』と銘された大きな諸刃の戦斧を振りかぶるも、龍咒は正眼に構えたまま動じず、その気迫に斧は裂けて落ちた。

「うががー」

巨軀のオークは眼を白黒させて驚愕し、震えて後退し、兵隊の背後に隠れた。

「やれ、お前ら、びびってんじゃねえ、行け！ 行かないと後で炙って喰らっちゃまうぞ」

「ひー」

醜い顔を半泣きにしてオークたちは自暴自棄に突進してくる。龍咒は一切の憐みもなく、切り捨てた。

それに鼓舞され、理愈とアギトも応戦する。

「それぞれそれ、そいや、ほいさー」

無駄なく斬り捌くも、数は尽きない。動中の禅、闘いつつ心を研ぎ澄まし、やがてランナーズハイのように瞑想を深め、彼我もなく、舞いのように、聖句のように、印契のように、宇宙の営みのごとくに斬り捨てて。

次々襲い来る。次第に疲弊し始めるも、別の命の蘇りを感じていた。

霓にじのような霧が顕れ、吹雪の中に燦めく。

イユノは炎叢のような光とともに、この世界に現象すると、自分の存在を唐突に世界と関連づけて確立し、また、この世界に意識を凝らしていくつかの微妙を聴き取り、龍咒らのいる場所を察知した。彼らのいる場所よりも高い位置にいて、夜の闇であっても数百のオークの軍隊の様子を見て取った。

「やってる、やってる」

そう言うと、微笑みながら静々と近づいた。その後ろから追って来る喩咽亜、早蕨、ウイ。防寒具に丸々と身を包んで入るが、武器は一切持っていない。

石や金属のぶつかる激しい音や叫び、獣の唸りを聞き、ところどころで動く篝火を見

て、ウイが心配そうに言う、

「ねえ、大丈夫なの、闘ってるよ、怖い。それに凄く禍々しい気が、この世界を蔽っている」

しかし、喩咄亜は、

「あの中に、伊咄咄亜もいるのね。私は行くわ」

伊咄咄亜とアギトが一緒にいる。

荷物を持った早蕨が、

「それじゃあ、僕が行かない、というわけにはいかないな。武器がないけど」

イユノが微笑む。

「大丈夫よ。」

問題ないわ」

雪深き斜面を下ってさつと戦場に飛び込んだ。だが、戦いに夢中な両者は小さな女の子の存在など、この闇のせいもあって気がつかない。

「さあ、出でよ。わたしの眷属たち！」

その鋭い言挙げに一瞬、闘いが止まったかのように見えた。空間を裂いて、耀く煙とともに凄まじい神氣の龍神や巨魁な怪物や荘厳なる英雄たちが次々と現れる。

イユノの眷属は主として天子（天、神将）・龍族・修羅で構成されていた。天子が上位、

龍族が中位、修羅族が下位で、数は百を超えた。

黄金に輝く鎧装束の天子たちは帝釈天や火天や水天や梵天や日天子や月宮天子などに匹敵する者たちだ。オークなどそもそも敵ではない。龍神や修羅にしても、強さは圧倒。

いずれも、三、四メートルはあろうかと思われる巨軀にもかかわらず、小型肉食獣のような速さ、しなやかさ。その動きは怖ろしいものであった。オークたちは次々と捉えられ、天子に切られ、串刺しにされ、龍に喰らわれ、修羅に八つ裂き、十六裂き、三十二裂きにされる。

恐怖に引き攣ったオークの将ウガガルドが叫んだ。

「やべえ、逃げろ！俺は逃げるぞ。退却だ、あひー、殺される！おら、邪魔だ、どけっ！どけっ！どけっ！」

遅かった。逃げ出しても追いつかれ、惨殺される。手当たり次第に、ちぎられる。逃げ惑うも、捕まる。逃れようのない速さに次から次へと。

イユノは龍咒たちの方へ近づいて来た。

「お待たせ。ちょうど、いい感じだったわね」

「ふ。来るのは、わかっていたぜ」

理愈は「打って出るな」と言った龍咒がイユノの到着を感じ取っていたことを理解した。

喩昶亜は伊昶亜に駆け寄った。

「無事だったの！ 心配させないで！」

「大丈夫だよ、龍咒先輩もアギト先輩もいるから」

伊昶亜はわざとアギトの方を見ないようにした。妹の口からその名が出るたびにドキリとするのをどうしようもできない。理愈が不満げに、

「おい、おい、何で俺の名前が出ないんだよ」

伊昶亜は舌を出し、

「だってー、頼りないもーん」

「言ったな！」

妹の仕草は可愛い。喩昶亜はそう思いつつも、苦汁のようなものが胸にじわっと広がるのを感じる。

伊昶亜が心配そうに訊いた。

「帰った方がいいのかなあ。お姉ちゃん、心配？」

なぜか喩昶亜に怒りが込み上げた。

「そうはいかないわ。協力しなくっちゃ」

「うん！」

荷物を洞窟の入口に降ろすと、早蕨は龍咒を振り返った。

「よお、龍咒」

「来たな、早蕨。これで最低限の態勢は出来た。暫時、ここを拠点にして盗まれた試験問題の行方を探そう」

「そうだな。状況は伊昶亜のメールでわかった。

それにしても、深そうな洞窟だな」

洞窟の方を顧みながら言う。

「深いだけではない。奥に行くほど、広がっている。下に行くほど、複雑に枝分かれし、クノッソス宮殿の迷宮ラビュリントスのようだ」

※ラビュリントス…「両刃の斧の家」の意。クレタ島の王ミノス Minos のクノッソス迷宮の紋章である両

刃の斧（ラビュリス）がラビュリスの語源。ラビュリスは生贄の雄牛に用いた儀式用の斧。

「どのくらい行ってみた」

「まだだ。そんな時間もなかった」

「行ってみるか。少し」

「ああ」

しかし、そのような生易しいものではなかった。

怖ろしく深く続き、時に狭く、時に広く、玄室のような部屋もあり、どこからともなく反響する爆流の音も轟き、瀧や地底湖もあった。

だが、彼らを驚かせたのは、壁画だった。旧石器時代後期のクロマニヨン人が遺したと思われる絵画。もしかしたら、ホモ・サピエンスではない可能性もないわけではない。今は失われた人類かもしれないかった。

絵の神聖と芸術性は高い。ラスコー洞窟やアルタミラ洞窟のように、鮮やかな線や色彩で、野牛や野生馬やシカや狩りをする人などが描かれていた。

「これは凄い」

早蕨は驚嘆した。そう言つてひざまずき、

「龍咒、見ろよ。」

「ここで儀式をした跡がある」

「そんな昔のものがわかるものか」

「だから、昔じゃない。数か月か、せいぜい数年だ。」

岩の窪みに獣脂を垂らして燃やした跡や土器がある。この素焼きの小皿は決して石器時代のものではない。

「見ろ、紙だ」

縦に長い、箋のような形になるように縦に折られたA3判サイズの紙が壁画の前、少し高くなつていて、かつ平らな場所に置かれていた。不思議と、しんとした、静かな感じがあつた。

龍咒も驚いて眼を睜る。

「何だか、わざとここに置いたみたいに見えるな。四隅を拳ぐらいの大きさの石で押さえている。恐らく正確に東西南北に向いているだろう。俺の方向感覚に狂いがなければな」

「嘘だろ。この状況で正確な方向感覚を維持できるものか」

「凡ては精神が変える。ロゴスに聴従せよ、さ」

龍咒は慎重に石をどけて紙を広げる。裏返す。表も裏もまっ白であった。

「何なんだ、これは」

早蕨がうめく。龍咒はまなざしを鋭くした。

ただの紙だ。

ツタに蔽われた学寮の一室。

玲央は悶々としていた。支度を急ぐも、昏い想いに胸を囚われている。

恋する者は様々な不安を呼び覚まされ、妄想に悶えるのであった。一秒でも早く追いつかなければ。繚^{まじ}い乱れ絡みて綾^{あや}なす嫉妬の炎は真紅の薔薇のクロッシェレース Crocheted lace のように耽美でもあるか。

突如。急ぐ彼の前に、黒い影が現れた。絶対零度の凍結地獄から、時間と空間とを裂いて冷徹に立ち現れ、聳える魔物。凄絶さを全身から発する。

「久しぶりだな」

玲央はがくがくと震えた。生まれて初めて感じる恐怖であった。

全身を光も吸収されてしまうような空洞の黒さのマントで包み、黒い乱れ髪を垂らし、褐色に焼けたラテン系の顔立ちで双眸は暗く、黒い火焰の炎のようである。

だが、もつと恐ろしいのは、その眼であった。

凄まじいその双眸は人間のものではない。冷血であった。獅子や虎のような獰猛な怒りだけではない。蛇のように微動すらない。理性のない、底なしの無明のように見えた。神霊のような、超越的な非情性を帯び、巨魁な山脈を見上げたときのような、又は三千丈も落下する谷底を見下すときのような、根源的な畏怖に襲われた。※三千丈……明治の尺貫法で言えば約9キロメートル

玲央は絶句して言う。

「ま、マルコス。……マルコス・アスタロテ」

黒い悪魔は厳かな低い声で応えた。声は、口からと言うよりも、周囲全体から響き合っているように聞こえる。

「そうだ。……お前だ。お前を追って来た」

「ぼ、僕を……なぜ」

冷酷な殺戮の笑みで微笑む。

「決まってる。浄化だ。」

究竟の真理を追って来たのだ。究極の真実を。眩^{まばゆ}い炎を。生きとし生ける者は皆、それを求める。光り輝くものを。

人間を清らかな青い炎で浄化する。いかなる生命体も生きていけないほど、純粋な空気を」

玲央は眉を歪める。

「それがなぜ、僕を」

無表情に睥睨し、やがて言った。

「お前も知っているはずだ。お前の中にその痕跡を見たのだ。だが、俺はもう見つけた。それを告げに来た」

そう言った後は、黒い霧となって失せた。禍々しい空気だけが残っている。だが、彼はまだアスタロテの言葉の真の意味を理解していなかった。

第七章 デヴィル・アスタロテ

原人(恐らくは、ホモ・ハイデルベルゲンシス *Homo heidelbergensis*) の時代にも遡る洞窟は要塞化する。早蕨の持つて来たものを合わせ、装備はいくらかましになった。イユノは、さらに装備を充実させるため、ここへ連れて来た眷属の半数をさいて調達に向向かせる。

その頃、夜明け近い深夜に、彝佐いみりや、天之モレイ、天之イサナコらは早暁の酷い吹雪のさなかに現象したが、辛い環境には晒されたのはわずか一時間弱、イユノが彼女らの着地点を見つけ出してすぐに迎えに来てくれたからだ。

洞窟の中は、火が焚かれ、坐る場所にはマットが敷かれている。凍りついた頬に暖かい血が戻っていくを感じた。荒々しい岩肌に炎の影が揺らめく原始的で、野蛮な幻想的風景であったが、まるで団欒に帰ったかのように安堵する。

「あゝ、生き返ったよ」

さすがのモレイも日頃のクールさも忘れ、涙を啜る。

アギトが皮肉を言った。

「お前たちは、いいよな。」

僕らのときは大変だったんだからな」

そう言いながら、いりやを眺める。

炎に照らされるとまた異なる美しさに炫く。魅せられる気持ちをどうにもできない。可憐で、初々しく、清らかで、神々しい。神聖だ。

それを横眼で見ながら、伊呷亜が頬を膨らませた。喩呷亜は、ただ、蒼白くなるのみで眉も動かさない。

その後、さらにイユノが眷属に運ばせた絨毯やタペストリーやテーブルや薪で、居住性が高まる。食器や鍋や食べ物も集まった。理愈とウイがさつそく調理を始める。イサナコはインテリアをアートし始める。人づき合いは悪いが、個性的で、アートの深く興味があり、絵画やオブジェの作品もある彼女だった。

さて、続いて、彝佐玲央が現象する。彼は単独で来た。炎たち二人を待つことが出来なかった。黎明の時刻とは言え、猛吹雪のために暗く、荒岩と針葉樹のシルエットがおぼろにわかるくらい。山岳地帯であることは理解できた。

頭の中も妄念の嵐である。

そうこうするうちに、寒さで凍えて動けなくなった。そんなところに女帝軍の三人の斥候に捕縛されそうになるも、幸いなことに、炎裂帛汰と炎えれいんが近くで現象し、状況を一瞬で察して駆けつけ、長い木の枝で斃し、兵士の剣を奪った。三人は剣と盾を持つこととなる。

「さて、皆、どこにいるんだろう」

「電話では何度か話しているんだが、暗いし、眼を凝らしても同じような山や谷や巖や樹木がおぼろに感じられるだけ、何の目印にもならないし、どこがどこなのか、お互いに全然わかっていないから、向こうの言うことも説明になっていないし、こちらも理解のしようがないんだ」

激しい吹雪。どこに行けばよいのか、見当もつかない。終に夜明けとともに、極端に温度が下がり始め、途方に暮れた。

「いた、いた」

玲央が振り返る。

「その声は」

「あたしよ、イユノよ。遅くなったわ、ごめんね」

「ああ、助かった」

玲央たちが来る頃には、洞窟はもはや洞窟ではなく、絨毯の敷かれた各部屋に木彫の扉

もつき、壁も塗られ、描かれ、タペストリーなど掛けられ、寄せ木細工の箆笥やマホガニ
ーの棚などの配置も考慮され、暖かくて清潔な居住空間であった。食糧も蓄えられ、煮炊
きの湯気が立つ。簡易な風呂さえあった。一日でこれほどになったのである。玲央の妄念
も、この一瞬だけは大人しくなっていた。

「最高だな。夢にも思わなかったよ。凍えていたときに嘘のようだ」
熱いスープを啜る。

十四人の少年少女らは語り合った。特に玲央のがアスタロテと会った話は誰もが驚き、
考えさせられた。

龍咒は決然と言った。

「そいつが言った真理・真実とは俺たちが探しているものではないな。あ、もしかしたら、
知らない奴もいるのかな。簡単に言っておく。眞神高校の試験問題が盗まれた。哲学のだ」
そう言って、かいつまんで説明する。

「というわけだ。ところで、誰かアスタロテについて、何か調べられないか」
モレイが口を開いた。

「図書館で『眞神正史紀』を読んでいた。その中に、蓑之国時代（クレタ島時代）にあつ
たイヴオア伝説というのがあって、その後日譚としてキオス島に近いシオという島で神
の子ように美しい少女ルシアの虐殺と、その友人マルコスが悪魔となって、ルシアを冤罪
に陥れた海商アピリスチア・ステイノスをクレタ島まで追いかけて屠る逸話があつた」
玲央が眼を丸くする。

「僕がクレタ島で聞いた話と同じだ」

龍咒が険しい顔になった。

「だとしたら、アスタロテが狙っているのは、いゝりやだ」

イユノと早蕨とアギトが深く頷いた他は、皆驚愕した。特にいゝりやの愕きは激しかつ
た。龍咒はそういう仲間を見直し、

「考えれば、自明なことだ。奴にとつて、真理・真実とは、ルシアに他ならない。恐らく
ルシアはイヴオアの子孫で、消えたイヴオアの子孫の血が眞神人の中に混ざつてもおか
しくない。

どうだ、イユノ」

「間違いないわ。

あたしたちは皆、多かれ少なかれ、（人類の中では）最も神に近いところにいる人種な

のよ。あたしがイシユラルの神威を持って生まれたようにね。

いりりやの光輝くような尋常ではない美しさを見れば、誰にも疑念はないはずだわ」
龍咒は首肯する。

「誰しも振り向かざるを得ない美か。ふふ。つまり、玲央、お前の心に痕跡があったというのはそういうことか。ルシアの痕跡、すなわち、いりりやの痕跡だ。

おい、まさか恋してたとはな」

玲央は場違いにも赤面し、

「先輩、ちよつと待ってください」

と言ったものの、悪魔が恋い焦がれて狙う者がいりりやであると知って、愕然とした。
くるめきを覚える。

早蕨が慎重に言った。

「相手は人類を憎む悪魔だ。一筋縄ではいかないぞ。しかも、ここは戦場だ。女帝は苛烈なところもあるが、正義の滾る心を持つ人だと言う。まあ、それゆえに過酷なのだが。父から愛されなかった悲しみを強い心で隠しているのだろう。

だが、上皇は冷厳で何を考えているかわからない人だ。長い鬱屈の生活から、心は捻じ曲がっている。残虐であるとも聞く。彼の中には復讐しかない。積年の怨念が、もはや対象を特定しない、無明な憎悪となっていて、誰に対してとは、もはや言い難い、全てに対する復讐だ。

悪魔と復讐帝。僕らの状況は、危険極まりない」

その言葉に軽くうなずきながら、瞼を半ば閉じて気怠そうに龍咒が応える。

「あゝ。わかつてるさ、だから。

今、考えているんだ」

アギトが重い口調で、

「もう一つ気になることがあります。アスタロテのエンブレムが眞神高校を中心に、眞神大の敷地の各所に見られました。

自らを優位にするために自在になる戦闘領域を、エンブレムによって構成される大魔法陣で、結界化にするというのは、よく聞く話です。

いりりや奪還（？）のために作ったのでしょうか」

「思料すべき材料がまだないから、何とも言えない。アスタロテが眞義塾眞神大学に戦闘領域を作る理由も意味もないように思うがね」

それについても、龍咒が応えた。

早蕨は異なる疑問を呈し、

「ユリアスはなぜ試験問題を盗んだのだろう。彼はそういうキャラではなかったはずだ。皮肉屋だが、正義の側にいる」

モレイが急に思い出し、

「そう言えば、図書館でラグナレクを見た。トリフォリウムのところだ。指を動かして空中に卍を描くように見えた。」

湖上城の主、ラグナレク辺境伯だ」

ラグナレク、『神々の黄昏』という名を持つ男。人とインキュバスとの間に生まれ、幼少期に父母を殺し、絶大なる力を持ちながらほとんど表に現れず、恐るべき魔人中の魔神として、見えることのないレアな存在で、謎のベールに包まれている存在。

「ええー！」

先ほどに劣らぬほどの愕き。

「ユリアスに、アスタロテに、ラグナレク。いったい、どうなってるんだ！」

理愈が天を仰ぐ。裂帛汰が腕を組んで、

「ラグナレク伯爵なら、オークを操れるんじゃないか」

早蕨が首を振る。

「そうでもない。そうでもない、というのは、ラグナレクだけが操れるわけではないということだ。物品や金を与えられる人間なら、誰にでも可能だ。つまり、オークどもについて言えば、最も原始的で、蒙昧で、卑しい傭兵だと思えば近いだろう。」

ラグナレクの関与の可能性がないわけじゃないが、なぜ彼がそんなことをする必要があるのか、全く繋がらない。いったい、何のために？」

皆、口をつぐむ。

龍咒は急に理愈を問い詰めるように訊いた。

「そう言えば、ここはどっちの陣営に入っているんだ。」

一度、昼を迎えているのだから、吹雪で視界が悪かったとしても、どうにかわかるだろう」

理愈はすっかりそのことを忘れていたようで、急に眉を寄せ、思索し始めた。しばらくしてから、

「恐らくは、……上皇側だと思う」

誰しも少なからず緊張を感じた。

さて、ここで小さな挿話的な事件が起こった。

イユノの眷属で、予てから、問題児であつた曼殊沙華童子^{かね}が急いて来たのだ。黒い巻き髪靡かせ、紅顔の少年は既に必死の様子。汗まみれだ。

女主人の前に跪き、問う。

「大いなるイユノ様、今日こそ答えてください。

あゝ、何をおっしゃいますか、むろん、究竟窮極を。

いいえ、今日こそは引き下がりません。もしも、お答えが戴けないならば、この曼殊沙華、死ぬ覚悟で参りました。どうか、お答えください。正しい答を、真実を教えてください。

宇宙に起源はありますか。終末はありますか。この宇宙世界は何なのでしょうか」

「愚かしい。

そもそも始まりとは何だ。終わりとは何か。

それを知らずして問うのか。それとも、『知っている』とでも言うのか。

では、一切の前提条件を用いずに、零から始めて詳細に説明せよ」

曼殊沙華は黙ってしまった。

「正しいとは、何か。

誤謬とは、何か。

真実に妥当しないことか。

では、真実とは、何だ。

妥当とは、何だ。

何かを問うことで、何かが検証されるのか。

それは、どうしてか。

その道筋である『論理』というものは、正しいのか。

妥当なのか。

あゝ、しかし、正しいとは、何か。

妥当とは、何か。

それも、説明は論理にしかない。が、それでよいのか。

では、悪いと言えるか。

その判断も論理ではないか。

むろん、かく言う批判も。

全ての思料（意識）も。

答はない。

ありようがない。

あたしは確かに知っている。確かにわかっている。だが、わかっているとは、何か。何が起こっているのか。何が起こっているということになっているのか。

全ては唐突で、経緯も根拠も不明だ。

ただ、わかっている、という気分があるだけだ。理解は心的な現象に過ぎない。心的な安心があるに過ぎない」

「それでも、実存的にはわかっています。

我々の実存が求めています」

「それは哲学的答を求めているのではない。

答のない苦しみからの解放を求めている。

それならば、答えようもある。白紙 タブラ・ラーサ *tabula rasa*。それがお前の欣求していたあたし

らの答よ」

第二部 『湖上城』の『神々の黄昏』

第一章 白紙 タブラ・ラサ *tabula rasa*

「真実はない。ただ渺茫たる荒野のみ。誰もが生きることには堪えられぬ恐るべき荒野のみ。答は永遠に失われてしまった」

上皇ストークインは後の墓廟の前で涙する。

それは暗い嫉妬の念を深く伴っていた。親の決めた相手とは言え、幼い頃から間近に見ていて、実際、初恋の人であった。

それがこともあろうに、あのような老人に操を奪われていたのだ。それを思い出すと、感傷と哀切は消え、どす黒い濛々たる情念が焰となって最も残酷な顔を剥き出しにする。

「どこにも答はない。ただ事実がある。あゝ、憧れた人は醜い情欲に汚されていた。余は裏切られていた。愛する人からも、親からも。どんな答もない。どのような答であっても、事実が消えない限りは、この心の枯渴を満たさない」

法皇が後の寝室に通う報告を忍びから受けるときのあの劇しい苦しみ、動揺、喪失感、怒り、それはどのような言葉にもならない。どんな聖なる言葉も癒せない。思うたびに胸が裂ける。どれほどのものだっただろうか。

あの老いた手に撫でられてどのように髪を亂し、あの澄み切った、気高く清純なる表情をどのように歪ませ、よがり悶えたのであろうか。しかも幼き頃から聞く。

后に決まる前から遙か遠くから眺め、憧れの存在であった。しかし、姻を結べばお手付きの上に、継続しているとは。屈辱と嫉妬。

「今でも言い尽くせぬ。到底言い尽くせぬ。おお、この怒り。噴煙のごとく天をも覆いそうであるぞ。あゝ、我が心は既に鬼神なり」

立ち上がると、墓表を王杖で打った。

「あゝ、赦せぬ。赦せぬ」

静かな足音が聞こえた。上皇は威を正し、冷静を取り戻す。

侍従長を務めるメルヴィル卿であった。恨みを持って死んだ人間の怨霊のように陰気な顔であった。

「陛下、お約束どおり、神聖シルヴィエ帝国大枢機卿イヴィル殿がご到着いたしました」

上皇ストークインは厳かな顔で言う、

「よし。謁見の間に通せ。余もすぐに行く」

広大な謁見の間に於いて、白金に近い薄い金髪を垂らす伶俐な顔立ちの、帝国の大枢機卿は立っていた。

「よくぞ参った、イヴイル殿」

「陛下に置かれましては、ご機嫌麗しゅう。まことに畏欣の至りでございます」

「貴帝国の絶対皇帝レオン・フランシスコ・デ・シルヴィエ陛下におかれては、皇位継承の儀、戴冠の儀以降は、叡断を下され、内政に専念されておると聞くが。息災であられるか」

イヴイルは微苦笑した。

「それにつきましては、わたくしは陛下と皇帝の位を争い、敗れて公務を解かれ、詩文を練るなどの遊々たる身の上を赦されたに過ぎない者ですから、語る資格を持ちません。

こうして枢機卿の位も、我がささやかな命も、元のままに今あるは、全て陛下のご慈悲でしかありません」

「貴帝国では、神政国家ゆえ、皇帝は法皇を兼ねて絶対皇帝と呼ばれるが、絶対皇帝は五人の大枢機卿の中から、互選で絶対皇帝を選ぶと言うではないか。

敗れたとは言え、何も争ったわけではあるまい（まあ、この男のことだから裏で何をやったかは知れたものではないが）。それに帝国の大枢機卿と言えば、諸国の王よりも巨大な軍事力と富とを持つ。

役職などなくて、むしろ、羨ましいくらいだ」

上皇は言葉を切って、相手の表情をうかがった。それを察せぬイヴイルではない。

「お願いの義がございます」

「何でも申せ。余と貴殿の間柄は久しい。我が国が存立するのも、貴殿の采配の御陰だと思っておる。そういう意味では、今回のことについては、大いに不安を覚えたものだが、レオン陛下が従前の絶対皇帝のような領土拡大主義者ではないことがわかって、ようやく安堵した次第だ。

さて、願いを聴こうではないか」

薄い水色の眼を細めるイヴイル。

「真実は巨大な力を持っています。それは天空を凌駕するばかりではない。地球を一秒で七周半する光の速さを以てしても、往き渡るに四百億年かかる大宇宙すらも比ではない。

全ての平行宇宙と、十一次元時空（十次元の空間と一次元の時間）の全ての宇宙を以てしても到底及ばない。それらを超越する大超越界においてさえも。

その巨大な真理は無際限に普遍満横溢するも、又何処にも在らず如何なるにも非ざるとも、又時折あり得ぬようなかたちにて世に顕現するものです。

今回は、三つ目の例、すなわち『あり得ぬかたち』で現れました。そして、古代の叡智を以てしたものか、それを察知し、盗んだ者がいます」

「ほう」

「ユリアスです。ご存知でしょう。スール（南大陸）の最古王国コプトエジヤの王の庶子、世界を流離う貴人ユリアスです」

ストークインもユリアスのことは知っていた。世界で最も古い王国の王家の庶子は、歴史の長い国で身につけた叡智と、嫡子であれば勝手なこともできぬが、庶子という自由な立場で、決して表には出ないが、世界を廻って自らの信念に基づいて正しいと思ったことを利害に関係なく、見返りも求めず行動する若者。

そんな彼が盗むだろうか。むしろ、イヴィルが盗もうとしていたのではないか。それを察知して先に奪ったのではないか。だが、奪う必要があるだろうか。護ればよいとも言える。そうしていられない状況下にあったのか、いや、もつと勘ぐれば、イヴィルが盗むように唆し、盗ませておいてそれを奪う計画だったのではないか。

とすれば、次の言葉はもう見えた。

イヴィルが言う、

「彼は今、この国にいます。捕縛にご協力をいただきたい。そのお礼として私の雇った傭兵とオークの軍でエレクシーネ女帝の軍を攻撃させましょう」

「わかった。」

しかし、ユリウスはどうやって盗んだのか。そもそも、その『真実』とやらは、どのようなかたちで、どういう状況にあったのか」

「真神族の高校の試験問題として顕現した。学校の金庫にあった」

「それを奪う力がユリアスにあるのか」

「ない。」

しかし、奴はマルコス・アスタロテに協力を求めた」

『デヴィル・アスタロテか。強大な悪魔だ。怨憎の力で、凄まじい靈力を身につけた。どいう接点があったのか」

どうせヴィルが仲介したのだろう。ストウクインはそう確信した。やはりな。

「コプトエジヤの王家は古代の魔法に通じている、何だか方法があったと思います。何をしたかはわかっています。」

アスタロテは彼の分身であるエンブレムを配置し、巨大な魔法陣による結界を作った。その設計さえ正しくやれば、魔法陣の中では多くのことが可能です。彼らは、一時的に、四次元空間を作ったのです。そして、金庫を開けずに試験問題を奪った」

「四次元空間とな」

「四次元ならば、箱に入った物を、箱を開けずに取り出せる。袋に入った物を、袋を開けずに取り出せる。わかりやすく言いましょう。」

たとえば、二次元の世界においては、円の中心に置いた物を取り出そうとすれば、円を破らずには取り出せないが、そこを三次元にしてしまえば、上から持ち上げて取れる。それと同じことです」

「しかし、何ゆえ、この国に来たのか、ユリウスは」

「コプトエジヤに行くつもりだったのでしょうか。そのまま、アスタロテの魔法陣を使って、故国へ行くはずだったのです。」

しかし、私は直前でそれを察知し、魔法陣の設計図をいじった。コプトエジヤには行くことができず、ここに着地した」

「書き換えに気がつかぬものだろうか」

「幸運でした。あまりに直前だったので、気がつかなかったのでしょうか」

ストウクインはそれについては、大いに疑念を抱いた。しかし、

「わかった。約束する。貴殿に協力しよう。」

エレクシーネとの戦いは我々が圧倒的に優位にあるが、念には念を入れて協力者を持つことも悪くない」

実際、エレクシーネはゴーストライ法皇の後ろ楯を得ているとは言え、時勢は上皇に有利であった。シヴィルの協力も必要ではない。しかし、超大国の大枢機卿に恩を売っておくことは無駄ではない。お互いに利用し合っていくことは有益だ。

かくして、女帝派のヘンリー伯爵と武装集団グウェイとグレンの傭兵隊と、上皇派の聖ユーロックス騎士団とヴィルヴィル男爵との小さな戦場に、上皇旗下の正規軍大部隊が繰り出すこととなったのである。

アラスタミューコ峡谷。それが土地の名称であった。

そもそも、この大部隊は、本隊と呼ばれ、ユーレイシア平原に布陣していた。雌雄は雄渾な場所で決すべきと言うのが、この国の皇家の正統な考えであったのだ。ゆえに決戦の舞台として、想定されていたのである。

しかし、数に劣るエレクシーネが乗って来ず、上皇は次の展開を考えていたところでもあった。

「**アラスタミ**、**ニコ峡谷**は、神聖なる山岳地帯で、古来宗教的な聖域であった。新石器時代、旧石器時代の人類ばかりでなく、原人が棲み、祭祀を行った痕跡のある由緒ある地である。決戦にふさわしい。

ここでなければならぬ。

我らは大義をこそ欲する」

「呼吸か」

モレイはアギトに訊いた。アギトはうなずき、

「呪を詠唱しながら。そうだよ、智慧は知識ではない。心機だ。できるときにできて、できないときにできない。知ることができるものは、知らないこともできる。だが、真の叡智は知らないことができない。だから、知ることができない。知るよしがない。知り方がない。

古来言う、『余りに普きて、草木にすらも知らるに至らば、人とても知るよしもなし』さ」

指を動かし、印契を組みながら腕を廻して弧を描きつつ、心を澄ます。指先の軌跡に沿って金粉のような燦めきが起こる。螺鈿のように、金泥のように移ろい揺らぐ、鈍い燦めき。

モレイはそれを真剣なまなざしで見て真似る。

同じように、裂帛汰とえれいんは理愈に教わった。

アギトや理愈が真理に近づくことによって、圧倒的な戦闘能力を身につけたことはモレイと裂帛汰、そして、えれいんをも強く刺激したのである。

「あたしも教えて上げるからさ」

イユノがそう言った。言いながら、もう、掌には神秘的な蒼白い炎が浮いている。ゆらゆらと。

ウイも神秘的に微笑んだ。

「ここは古代の聖地でとても善い気が流れているわ。

聖なる気がこの洞穴から噴き上げている」

「そりゃ、ちようどよかった。

さて、俺、そろそろ、巡回に行かなくっちゃならねーから」

巡回。そのたびに誇らしい気持ちになる。

理愈は深々と降る雪の中を、応龍（翼のある龍）一頭と修羅三匹を連れて出た。龍は鱗が紺碧で、漆黒の鉄鋼の鎧を身につけている。

雪を被る針葉樹の幹を左右に凄い速さでかわしながら、林の中を飛ぶように抜ける。大岩を越え、去り際に灰色熊の頭を撫で、樹木の太枝の下側を走り、走って逃げるシカの群れの背中を飛石のように踏んで渡り、雪の急斜面では粉雪を噴き上げてジグザグに滑降り、谷川の激流を擦れ擦れに越え、クレパスの狭間を抜け、氷河の絶壁を垂直に駆け上がる。自由自在だ。

「うひょうつ、何てスリリングなんだ。スキーよりよっぽど気持ちいいぜ。

さあ、もつと早く。スピードを上げるぜ」

理愈は自分でも不思議に感じていた。いつの間か、龍や修羅など、こんなにも怖ろしい連中を率いることのできる自分になっている。

「あゝ、愉快、愉快。愉快で仕方ないな。最高の気分だ。敵が出て来てくれないかな」

理愈がそう感嘆すると、

「あれを見ろ」

雷のような低い声で、龍が言った。

見れば、忍びのような者たちが三人、深い雪を野兔のように身軽に跳び上がり駆け回っている。先を急いでいるようだ。

「捕らえるか」

だが、簡単ではなかった。近づくと、敵方もすぐに察知して三方に散る。理愈は舌打ちし、

「ちつ、仕方ない。一人だけ捕まえよう。よし、あっちだ。あいつを皆で追え」

忍びとは言え、いずれも鍛え抜かれた筋骨隆々の巨漢で、凶体に似合わず、驚くほど敏捷だった。理愈は咒を唱える。敵は振り返り、剣を抜く。燕のように低空飛行で、股をくぐって背に回り、浅く斬る。

「うぎゃあ」

深手を負わせない。生け捕りだ。あとは修羅に任せて、理愈は他を追う。すぐに追いついた。先に回って、前に立ちはだかる。

「やい、待ちやがれ」

しかし、敵は応えず、白黒の剣を振りかぶった。敵がその動作をする前から、その“機”^{はたい}が読めていた（ログスの集合する様子が見えていた）ので、

「しやらくせえ」

振り下ろされた刃を容易くかわし、理愈はその刀剣の峰に乗る。敵の頭を剣の柄で殴打した。昏倒する。もう一人は見つからない。終に逃がしてしまった。

二人を洞窟の基地まで連行する。調べてすぐにわかった。上皇の忍びだった。偵察や情報収集、メッセージや秘密の指令の受け渡しするのが主な仕事である。

同じ頃、近場を偵察中だったアギトはオークの臭いを嗅ぎ取った。

「性懲りもなく、また来たか。」

「いったい、誰に雇われているのやら」

臭覚によって追うと、意外なものを見つけた。峡谷の断崖を羚羊のようにユリアスが走って逃げている！古王国コプトエジヤの王家に連なる高貴なる庶子、銀髪を靡かせて。その数百メートル後、オークの小隊が追っていた。谷底までは1キロメートルくらいはありそうな断崖絶壁である。

「少なくとも、雇っているのがユリアスではないことがはつきりしたな。よし！」

飛び上がって一気にそこまで落下する。空中で直角に向きを変え、絶壁に立つ。ユリアスとオークとの間に立ちはだかった。剣を抜き、構える。

「さあ、来い！」

オークたちは姿を見ただけで恐慌をきたし、這う這うのていで、まるで転びつ逃げて行った。呵々大笑する。そして、

「おやおや。こんなところで会うとは。ゲームの世界ではお馴染みだが、初めまして、ですわね！」

さあ、ユリアス、嫌とは言わせない。どうしても来てもらいますよ」

抵抗すると思っていた。予想は外れた。

「あゝ、行くとも。いずれ行くつもりだったんだ」

なぜ？

洞窟に帰ると、オークを尋問中だった。

「こんなものを持っていたんだ。文書だ。かなり高級で重要なものだろう。ところが、読めないんだ」

ユリアスが割って入ってきた。

「見せてくれたまえ」

文書をつかむと表情が硬くなる。

「大変だ。謀反だ」

龍咒が問う。

「謀反？ どういうことだ」

「密書だ。エレクシーネ軍の諸侯中でも、最も大きな軍を率いるガーゴイルゴ侯爵と上皇との内密の約束だ。内通してたんだ。裏切るつもりだ。」

この文によれば、エレクシーネ皇帝は本軍をこちらへ率いてくるらしい。上皇軍が決戦の場をこちらに変えて移動中という噂は知っていたが。まるで呼応するように、女帝軍もこちらへ向かっているらしい。

その中でも、ガーゴイルゴ軍は女帝のいる本隊の背後に陣しているらしい。

次、戦火の狼煙が上がれば、ガーゴイルゴが後ろから矢で射かけてくる。すると、女帝軍は挟み撃ちになってしまうというわけだ。

知らせなくては」

龍咒が反論した。

「我々を信じるだろうか。皇帝との面会など、そんなに簡単にはできないだろう」

「わかつてるさ。だが、僕ならできる」

皆黙った。

唐突に、裂帛汰が尋ねた。

「皇帝軍はなぜこつちに来るんだ」

理愈が肩をすくめる。

「わからんね」

アギトがモレイに訊く。

「何か予想はつかないかい」

モレイは眉を顰め、

「決戦にふさわしい場所だと思ってくるんだろうな、恐らく」

ユリアスもうなずく。

「私が思うこともそれしかない。人は意義を求める。

ここは古来、聖地だからな」

アギトが少し意外そうに、

「そうなんですか、先輩、知っていましたか」

龍咒は、

「知るわけない。

ユリアス、あんた、実は、わざと、ここに落ちたな。なぜコプトエジヤではないか不思議に思っていたんだが」

高貴なる庶子は苦笑する。

「全く以てそうだというわけではないがね。

正確に言えば、ここに着地するように書き換えられることが見込まれたので、なすがままに、魔法陣を書き換えさせて、逆利用したのさ。

と言つても、何のことだかわからないだろうが」

早蕨が両手を振り、

「さあさあ、話を戻そう」

理愈が腕を組み、

「女帝エレクシーネが俺らを信じるかつてことだよな」

しかし、イユノが、

「あたしが行けば大丈夫よ。いつまでも考えていないで、さあ、冒険に行こうよ」

だが、ユリアスは決然と言った。

「いや。

君には、ここを護ってもらいたい。いりやばは狙われている。それに」

「それに何だよ」

「ちよつと待て。つて言うか、ユリアス、あなたは試験問題を盗んだんじゃないのか」

「そのとおりだ」

「何っ?」「何だって!」

「正確に言えば、盗んだんじゃない。護ったのさ。相応しい聖域に、史上最強の護衛の下、保管している。その護衛たちは、当然、それを守るべき理由もあれば、護るべき資格もある連中だ。」

もうわかっただろう」

「意味がわからん」

理愈がそう言うと、龍咒は、

「いや、わかるさ。現に試験問題は俺たちの掌中にある」

「え！」

皆驚くも、ユリアスは微笑し、

「ふ。君なら気がつくと思ったよ」

「あゝ、気がついたさ。よくも仕組んだものだ」

「何のことだ、龍咒」

早蕨が問う。全くわからないふうであった。

「お前まで気がつかないのか、早蕨。見ていたのに」

そして、小さい声で、

「ダブラ・ラーサさ」

そうか。

それが試験問題であった。

第二章 第二次ポエニ戦争に於いて幻の鴨越を観ずる

ひよとりがえ

激しく巻く口髭顎鬚類髯、彫りの深い思慮深い顔、ルカス・ハニーバールは代々皇帝に使える軍人の家柄だが、祖父エグロス、父ポメロの代に頭角を現し、今や彼に至つては名将として一万九千余のエレクシーネ女帝軍を率いる、疾風怒濤の時代の英雄である。

土地勘のある者を数十名雇い、疾風のごとく山谷を越え、トレヴィイ湖に着く。湖の向こうは、もうアラスタミュコ峡谷であった。湖に流れ込むトレヴィイ川を挟んで、上皇軍と対峙した。

斥候を放ち、様子を窺い、絶えず情報を集めている。魁さきがけを願ひ出る猛者がいた。

ハニーバールは思慮する。彼の頭の中では、チェスの駒のように、さまざまな騎兵や陣の動きがシミュレーションされていた。双眸が輝く。

「よし、行ってよい」

決断した。

傭兵としてハニーバールの下にいるブルードン族の勇者シドは二メートル七〇センチ

を超える巨漢である。川岸まで堂々と駒を進めると、大音声した。彼こそは、英雄シヴィーノとならぶブルーデンの四大豪傑のうちの一人だ。

「やあやあ、我こそは強大なるブルーデン族にして、カートニー・クロヴィスの孫、マツカートニー・クロヴィスの息子、その名も轟くシド・クロヴィスだ。

名のあるものは出合え、出合え」

戦いは一騎打ちが基本だった。正々堂々名乗り出て、意義を認めて戦うのだ。

五万の上皇軍を率いる将軍スピノキオは、筋肉の盛り上がり模した強靱な革の胸当てと鋼の胴巻きと銀色の肩当て、金銀を混ぜた鉄兜で、深紅のマントを翻し、

「小癩な奴め、誰か叩き潰せ」

数で圧倒的に勝る上皇軍は思慮などしなかった。シドは剣と楯とをバンバンと叩き合わせ、さらに咆哮を上げる。

「さあ、さあ、いかがした、いかがした、出でよ、出でよ」

「応とも」

その太強い声とともに敵方から同じような巨漢の騎士が二騎、現れた。

シドは呵々大笑する。そして、言った、

「ええい、めんどくさい、まとめて来い」

そう叫んで川中に飛沫を上げて突撃する。敵方の二騎も同時に突っ込んできた。真ん中で激突。シドの大剣が一騎を馬ごと縦裂き、返す刀で掬い上げるように、これも馬ごと斜めに真つ二つ。

両岸から怒号とも歓声ともつかぬ声が挙がる。シドは二つの首を片手につかんで掲げ、「取ったぞ。一番乗りは、このシド・クロヴィスだ」

戦闘では一番乗りが名誉とされていた。とにかく無茶でも何でも敵方に一番早く突っ込むのがこの国の兵どもの面目であつた。しかし。

いや、ともかくも、怒り心頭の上皇軍が怒濤のように迫る。

それが狙いだつた。

「よし、退却だ」

合図とともに、シドも背を向ける。荒くれた傭兵部隊や先ほどまでさんざん喚いていた猛者たちが牙を翻した。ハニール軍の軍はあたかも怖れをなしたかのように踵を返し、大慌てで狭く険しく峙つ峡谷へと逃げ込む。

「ああ、逃げるぞ、臆病者どもめ、逃すな、逃すものか」

上皇軍の將兵たちの怒りや焦りや興奮は頂点に達し、無我夢中で軍馬を鞭打ち、馬の腹に激しく拍車を当てて、インパラを追う獅子のごとく、追い喰らいつこうとする。

「待て、深追いするな、待て、待て、追うな」

制する大将の言葉も虚しく、追撃戦とした五千の騎兵たちは谷の絶壁の上から降る矢の雨に遭う。さらに沿岸の林に隠れていた伏兵が現れ、背後を閉ざす。完全なる挟撃だ。狭い谷で長い列に引き伸ばされてしまった騎兵は上からの攻撃になす術もない。殆どなぶり殺しであった。

トレヴィイの戦いはかくして圧勝であった。

その夜、女帝軍の煌々たる大天幕の陣営群の中央では作戦会議が開かれた。

美しき皇帝エレクシーネは漆黒の髪をマントの上に伸ばし、長いベンチ―赤い繻子と金装飾の―に坐る。白い虎を侍らせ、寝椅子の枕に肘掛けるように身を凭せていた。細い顔に彫りの深い眼窩、長い睫毛、鷲鼻、背が高く、筋骨は頑丈であった。三人の將軍と、二人の元老。炎を囲んで議論する。

ローメール將軍は白髪と白髭を蓄え、百戦錬磨の老将であった。

「策を弄したは言え、数に勝る敵に対し、今日のような勝利は奇跡に等しい。物量で明らかに負ける我らにとつて、正攻法による戦いは無謀ですらある」

元老院のパルーニもうなずきながら、

「すると、奇襲ですな。しかし、敵も予想はしております。よほど奇抜な作戦か、機敏な動きをしなければ、成功は難しい」

女帝は鋭く問うた、

「人選は」

「スパルタクスの傭兵部隊ではいかがでしょう」

老将の答にエレクシーネは満足げに首肯し、

「おお、野戦の職人どもだ。実戦慣れしたあの連中ならまさに適任」

慎重派の元老メヴィスは、

「しかし、各々方、くれぐれも慎重に取り計らえよ。敵のスパイも相当紛れ込んでいると聞く」

「ありそうな話だ。こちらの兵はあちこちからかき集めたからな」

「今日の作戦も、急に決めたから成功したとも言える」

「隠密裏に運ばなければならない」

かくして、スパルタクスの黒髭の傭兵隊長チユニスの率いる別動隊が敵の後ろに回るべく、夜陰に紛れて出発した。全員黒装束で殺意に満ちている。白い吐息を噴煙のごとく上げて、厳めしく冷徹に粛々と進む。

しかし、それを見送りながらも、濃蜜色の髪と白いマント、金と銀の鎧のギーケイは作戦に不満であった。古い家柄で、鬘の長い龍の紋章を楯に浮き彫りにするヴィスコント家は幾世紀も前から皇帝の側近で会った名家だ。長い髪の巨漢は遂に決意する。

「敵方のスパイがどれほど混ざっているかもしれぬのに、あのような悠長な別動隊など、別動隊にならない。

俺は決めた。俺は行く。

我らが皇帝エレクシーネ陛下に栄光あれ。我こそ真の奇襲を邪悪なる上皇へ仕掛ける。俺は行く。来る者は来い」

「しかし、ギーケイ伯爵、お考えください。お許しもなくそのようなことをされては、後でお咎めがありましようぞ」

「国が滅びれば咎めなぞない。咎めあることは幸いなるかな、うれしきことかな、めでたきことかな。一身の破滅など懼れようか。今は国家存亡の危機、大恩ある主君のため。何ぞ生存を求めん。ましてや名利をや。義をこそ我は求めん。義こそ生命たれ」

鞆に神聖文字を刻んだ大きな太刀を佩き、いなく軍馬に跨った英雄は拍車で馬の脇腹を蹴り、怒涛のように疾駆する。

「遅れてはならじ」

十数騎の荒武者がすぐに続き、しばし遅れて知らせを聞いた数十騎がさらに続いた。その中には稀代の英雄ジヴィーノもいた。身の丈三メートル弱、その腕の太さたるや大の男でも手を廻せぬほど。到底なみの馬などには乗れず、龍馬に跨り、天地を翔るがごとく突進する。

さて、長き黒髪を靡かせて騎馬を走らせるギーケイの先祖はガリア・コマータ（長髪のガリア）であつたと言う。

殺戮の戦慄に満ち、白い息を吐く騎馬、楯と剣がガチャガチャと鳴り、誰しも仮面のごとき非情のまなざしで雪を蹴散らす。

月光もなき夜、道なき崖を登る。いくつもの峠を越え、馬で越えられぬ絶壁は人が馬を担いで登った。彼らはそれほどの偉丈夫ぞろいであつた。

さて、剣のように尖った岩山、イコーク山の頂に来ると、敵の本陣は眼下であつた。時

刻は黎明である。

そのとき、彼らは見た。遠く味方の陣営に、濛々たる煙とともに炎の上がるのを。

「うんぬぬ。しまったっ。」

懼れていたことが起こってしまった。それ、見たことか、我が軍の別動隊は全く間に合わず、むしろ、敵の奇襲を受けてしまった」

「伯爵、しかも下の本隊も、はや動き始めていますぞ」

「今から降りても間に合わぬのでは」

配下の将校たちは威風堂々にして華のある鎧兜なるも、口々にそう言った。

「うぬ。」

ならば、大死してくれようぞ。猪突する以外に道はない。

死は侍の華、命は翅のように軽し。

構わぬ、俺は逝く。命もいらす、名もいらす。ただ、死あるのみ、ただ、死ぬるこそが清し。潔白の武士道なり」

「はっ」

「よいか。」

大死せよ。問答無用だ。是非など、どうでもよい。決死の突撃をせよ、一矢報わずおくものか。死ね、我とともに死ねっ！」

「おおーっ」

戦士たちは炎になった。その形相の凄まじさ、とても人とは思えない。憤怒の鬼神が憑依したかのようなであった。

その頃、別動隊チユニス湖畔の隘路で挟撃に遭っていた。まさにトレヴィイの報復である。

そこは湖に接した杣道で、片側は湖、もう片側は絶壁という、襲撃されたならば、絶体絶命の地であった。

「退却だ」

「もう、間に合いません」

「では、ここを死地として、武の限りを尽くし、大河の濁流に一輪の花を咲かせ、歴史の大海原に光輝を刹那耀かしめようぞ」

「御意」

かくして凄絶なる討ち死にを遂げた。

同じ頃、女帝の本隊も奇襲を受けている。

「おのれ、敵の方が先んじていたか。不覚であった」

歯噛みしても始まらない。しかも、敵は前ばかりではない。まもなく後からガーゴイル
ゴ大公の率いる大軍に襲撃されようとしているのであった。

同じ頃。

「急げ、急ぐんだ、間に合わずば、どうしても！」

龍にまたがるユリウスを先頭に、龍児、アギト、理愈、モレイ、裂帛汰、十二柱の天（神
将）、二十四頭の龍、四十八匹の修羅。非公認の私的援護軍は味方として遇されるかどうか
さえ定かではない。

そこはもう戦場だった。間に合わなかったのである。ユリウスが叫ぶ。

「左翼と右翼を援護しろ。敵を押し返せ。進むんだ。」

勝ち進み続けるんだ。そして、敵本隊の背後に廻れ、囲むように」

「おうっ！」

非公認軍は騎虎の勢いで突撃する。

「そら、そら」

理愈は飛ぶように敵軍を斃しながら突き抜けると折り返す。再び突き抜け……これを
繰り返した。上皇軍は眼を白黒させる暇もない。なぜなら、彼らが見たこともない異装の
神将や龍や修羅がただの人でしかない彼らを次々斃すからである。

上皇軍の左翼と右翼はたちまち蹴散らされた。非公認軍は敵の本隊の背後に廻る。

その理を覚った巻き髯のハニーボールは号令する、

「奴らに続け！ 敵の背後へ」

包囲殲滅作戦だ。

包囲戦の優位は敵の数の多さを殺ぐことができることにある。すなわち包囲されると、
実際に戦闘できるのは縁（へり）の人間だけになってしまうからだ。

もし丸く包囲されたら、闘えるのは田周の部分にいる人間だけである。四万五千の兵は
実質、数千人しか機能していなかった。

女帝軍の士気は否が応にも上がる。

角ある兜から金の髪を靡かせる勇士イグヴェイは黒い鎧と黒い楯を殺戮の気であふれ
満たし、雄叫ぶ。鬣を振るい、騎馬は前脚を立てて嘶く。

「おお、この剣に賭けて。命炎（かぎり）わせて闘わん。勲あらん。」

油断などするには程遠い」

天幕とは言え、幼稚な砦よりは遙かに要塞化していた。巨大なこともさることながら、出入口は高い緞帳のような幕で五重に蔽われ、廂の上が防衛兵用のバルコニーになっている。両脇に見張りのための塔があり、大きな湾曲した牙を持つ戦象が左右に四頭ずついて、神殿を護るように守っていた。

ユリウスを先頭に、龍咒、アギト、理愈、モレイ、裂帛汰、十二柱の天（神将）、二十四頭の龍、四十八匹の修羅たちは物珍しげに左右を見ながらエントランスへ進む。しかしまた、迎え入れる方も彼らを愕きと奇異のまなざしで見つめた。

「さあ、こちらへ」

まずエントランスへ案内される。そこは、深いペルシャ絨毯の敷かれた広い空間だった。周囲は鮮やかなゴブラン織りのタペストリーで飾られる。

「さあ、こちらへ」

侍従がさらに導く。

いくつかの豪華な間を抜けて謁見の広間に入った。エレクシーネは玉座に坐する。

「さあ、聞こうか」

ユリアスは優雅な口調で簡潔に説明した。その内容は龍咒やアギトたちにも耳新しいことがあった。マルコスユリアスはユリアスに協力して日本に来たのか、玲央は意外の念を持つ。それはユリアスとて同じようであった。玲央の胸中に、いりやを感じて、日本に来たとは。

「しかし、陛下。デヴィル・アスタロテがただ私の依頼を請け負っただけであるとは思っていません。神聖シルヴィエ帝国の大枢機卿イヴィルが私にアスタロテを推挙したことが企みであったように、アスタロテにも彼の思惑があります」

女帝は楽しそうに眼を細めた。

「ほう」

ユリアスはその炫くような微笑を見てあきらめの嘆息をする。

「イヴィルは以前から上皇ストークインを保護し、いざというときの懐刀としていました。遂にそれを使うときが来たのです。」

今では神聖帝国の軍を使うことのできない彼は蓄財に物を言わせてオークや傭兵どもを大量に雇い、この国に深く入り込んでいます。この国の混乱をさらに乱し、傷を暴き、深くしています。

戦乱に乗じて私に盗ませた究竟を奪おうというわけです。そのために上皇も陛下も、この国の国民の命も利用されている。

究竟の真理を得て、神聖シルヴィエ帝国の絶対皇帝の候補に返り咲こうという、彼の私利私欲のために何十万もの命を犠牲にすることすらも顧みていない」

「わかった。

要するに朕が勝てば問題はないのだ」

ユリアスは歎息したが、もうそれ以上は言わなかった。

イユノやいもりやたちは洞窟から女帝軍の巨大幕に呼び寄せられた。その贅を尽くした環境に喜んだが、イサナコは全くそれとは違っていた。

イサナコは感激する。本物のエレクシーネに会えたのである。その美貌と高貴と誇り高さ、気高さは芸術の粋であった。

彼女は深く記憶に留めて、絵の完成に資するように無数のスケッチを残した。誰にも見つかからないように。見つければ、不敬罪で捕えられてしまうであろう。

豎琴を借りて、密かに歌を作った。

大いなる頌歌を。

さて、当の女帝エレクシーネとは言えば、激しく焦燥していた。

この勝利に乗じて、態度を決めない諸侯たちへ、我が方へつくように、檄を飛ばしたが、呼応する者はほとんどなかった。それは想定外のことであった。勝利すれば、今まで態度をはっきりさせなかった者らも女帝側につくだろうし、上皇側にいた者らも寝返る者が出るであろう、そう見込んでいたのだ。

その予想は見事に外れた。誰からも応答がない。一人もないのである。

政治力の差を感じた。

誰しもまだまだストウークインを畏れているのだ。諸侯や地方の有力者との利権や政治的な繋がりには未だに強い。戦に勝っても戦争に負けることはある。

「全ては損得勘定だ。大義などない」

女帝は天をも蔑むような、冷徹なまなざしで空間を凝視する。

「生存の本能に操られ、衝き動かされて」

いく日かの平和な日々。しかし、戦わずして、エレクシーネの軍は困窮し始めた。

「陛下、またもや補給部隊が敵にやとわれた傭兵部隊のゲリラ攻撃に潰えました」
連敗中の上皇軍は直接対決を避けるようになった。

女帝軍の補給を断つなど、ゲリラ戦を主とする。食糧補給路を断たれ、兵は飢え、伝染病が流行り、死者すら出始めるに至り、苦境に陥ったエルクシーネは遂に、

「やむを得ない。」

朕は撤退する。ハニーバール、しんがっ殿を申しつける」

「有り難き幸せ。陛下の御心のままに」

英雄はそのとき決然としたさわやかな表情をする。死を覚悟した。死ぬしかない。

龍咒とユリアスは眼を合わせ、うなづく。龍咒が申し出た。

「陛下、その殿役、我らもご協力させてください」

女帝は鷹揚にうなずいた。

「わかった。感謝する」

大軍の大移動が始まった。悲劇の始まりだ。このときが来ることを、当然のように予想し、待っていたストウークイン上皇の兵たちは、山や谷のあちこちから、わっと現れ、激しい追撃を開始する。

凄絶な退却劇となった。

糧もなく、下級兵が次々道殪者となる。ハニーバールの軍の戦いも悲惨を極めた。勇者はまるで消耗品であった。家族にもとられることもなく、泥と雪とに塗れて屍となって逝く。誰にも知られず斃れ、見わけもつかない。こうして彼らの人生は畢つてしまうのだ。奈落へ転落するように崩壊して逝く潰走軍。

龍咒やアギト、理愈、モレイ、裂帛汰は死闘を繰り広げたが、墜ち滅び逝く黄昏をどうすることもできなかった。とは言え、どこからともなく現れた龍咒らの強さに上皇軍は散々に苦戦を強いられ、兵士らは畏怖の余り、戦う前に逃げ出す者も少なくなかった。

モレイも裂帛汰もこの戦闘で大いに成長し、裂帛汰の太い剣は振るたびに炎となつて轟々と燃え、敵の楯を割つて鎧も身も真つ二つにする。チャリオットの突撃も車輪ごと縦に裂く凄まじさは敵を震え上がらせた。

又、モレイの剣は電光石火で、精密であった。まるで解剖のように身体を切り刻んだ。アギトは猛吹雪の中、一人山谷を進む。二日後にここをルートに選ぶかもしれない女帝軍のために単身斥候をやっていた。理愈も溪流沿いのルートを斥候していた。

小さな村の暗い酒場に入り、耳を傾けながらパンとチーズを食む。

「兵隊が行くのを見たよ」

その農夫はカウンターの隣に立つ農夫に言った。

「いや、大人数じゃねえ。四、五人だ」

「へえ、落ち武者か？」

「おらはよお、そうじゃねえと思うな。しつかりした、ばつちりきまった軍装だった。ありやよう、目立たないように小人数で行動してんだよ。」

だつてよお、そのすぐ後にも同じような兵隊を、おら、見たんだぜ」

「そう言やあ、アザンもそんな兵隊を今朝見たつて言つてたな」

「んだろ？」

理愈はすぐに龍咒に連絡を入れた。龍咒は小部隊を率いてエレクシーネのいる本隊の数キロメートル先を行軍している。同様に、ギーケイはアギトのルートを追従するかたちで、本隊の数キロメートル先を進んでいた。龍咒は考える。

「山に入るべきだろう。そまみち 杣道そまみちすらない道を」

女帝の本隊に連絡を入れた。

「已むを得まい」

將軍の声は悲痛である。

「我らも、はや哀れな敗残の兵と成り果てたか」

龍咒は冷たく応える。

「仕方ないですね」

そう言うってから、ギーケイにも連絡したが、遅かった。峡谷の隘路で急襲を受けたギーケイは獅子奮迅の闘い、

「そいやそいや、うらうらうらあめ、見せてやろうぞよ、冥途の土産、究竟の真理、死の戯れ、究極の演武を。やあ、やあ、天の大御神に奉納す」

骨ごと砕くその剛剣で、数十人を道連れにし、刃が毀たれた後は、素手で闘う。馬を斃し、騎兵を撲殺、数十の矢が刺さり、ハリネズミのようになりながらも、次々屠り、敵が畏怖するまでになるも、終には壮絶なる討ち死に、悲愴な最期を遂げた。

攻撃を受けたのは、魁ばかりではない。

殿のハニ―ボールも猛攻撃を受けた。

「閣下、そろそろ、この場を引き上げましょうぞ。いくら殿とは言え、無謀に戦つて死してはお役目が果たせませぬ。」

死すべきときは陛下の入城の日ですぞ」

「むろん、言われるまでもなきこと。私もそれは承知だ。さあ、行くぞ」

しかし、一矢が耳上から顎下に貫く。危うく昏倒しそうになるも、部下に援けられ、どうにか苦しい山谷を逃げおおせるも、数日の後、矢傷が因で斃れ、遂に動けず、その二日後に没した。

稀代の英雄の悲報を聞いた悲嘆に暮れた日の翌日、女帝は帝都を目前にして諸侯の裏切りに遭い、囚われの身となつてしまう。無念の憤りに手を震わせた。

「あゝ、悔しい。まさかあの臆病者どもが朕を裏切ろうとは。あゝ、悔しい、あやつらの裏切り、忘れはせぬ。悔しいかな。かような憂き目に遭おうとは」

嘆こうとも、時は戻せない。牢に封ぜられ、鉄格子の、小さく高い窓から蒼穹を仰ぐ。

どこまでも永遠の青。人間の愚かさを笑うような、永遠の絶望。

やがて、驕り高ぶった勝利者として帝都に入つた上皇は黄金の鎧に黄金のマント、黄金の王杖に深紅の拳ほどの貴石を輝かせ、戴冠して再び皇帝となり、エレクシーネを古城に幽閉。数か月後に古代の辺境である離島に遠流し、その廃れた城砦の塔の最上階に封じ込めた。

さて、遡つて、女帝軍潰滅の寸前、イユノは決断していゐりややえれいん、ウイやイサナコを龍神の背に乗せて逃れている。

最後まで闘った龍咒やアギト、モレイやユリアス、理愈、裂帛汰、玲央らも、次第に敗色濃くなるにつれ、

「もはや、これまで」

「これ以上は人間には不可能だ。ここを脱する。突破する」

「女性たちはイユノが牽引して虎口を脱した」

「僕らも追いつこう」

そして、彼女らを追い、激戦地域を命辛々逃れた。追手に何度も追いつかれ、戦い、また逃れ、追われ、身を隠し、頭陀檻樓になつて逃亡する。

逃亡の途中、火の手が上がり、略奪の行われている村の傍を通った。

「上皇軍の狼藉か」

モレイが憎々しげに言うも、早蕨が、

「いや、よく見ろ、山賊だ。戦争の混乱に乗じて、警察の手の薄いことをいいことに、略奪を行っているんだ」

「何て卑劣な。ただでさえ、戦争で苦しんでいる人々を」

「見ろ、虐殺も。女が凌辱され、撲殺されている。あっちでは、斬り刻まれている」

「ああ、なんてことを。こどもを串刺しにして笑っていやがる。まるで、戯れているかのようだ。もう赦せん」

「待て。」

あれをよく見ろ」

龍咒が指差す方を見ると。

「何もないじゃん」

しかし、アギトは、

「よく見ろ、理愈、炎に照らされて影が」

「ああ！」

「本当だ。何もない、誰もいないのに、影だけがある、炎に照らされた影だけが」

玲央が蒼白になる。

「デヴィル・アスタロテ！」

「何だって」

龍咒が淡々と言う、

「見てのとおりだ。奴が人間の残虐性と憎悪とを煽っているんだ。山賊どもはそれに駆られている。村人たちには恐怖と絶望とを強く与えている」

理愈が一步踏み出し、

「やろうつ、赦さねえ」

全身から紅蓮の炎があふれる。アギトも臍下丹田から蒼白い炎柱を立て、顱頂骨を貫かせた。モレイも氷の剣を抜き、裂帛汰は炎の剣を抜いた。

龍咒も神剣を抜き、

「仕方ないな」

早蕨は周囲を見廻し、神将から大薙刀を借りた。ユリアスは自前のレイピア（刺剣）を抜く。

「よし」

彼らは次々と山賊どもを斬り斃しながら、アスタロテの陰に近づいて行く。

山賊たちはたちまち喚く、

「何だ、何だ」

「何だ、あいつらは。しゃらくせえ」

悪魔に憑かれて興奮状態にある山賊どもは超人的な戦いをするアギトたちを恐れない。モレイはそれを見て冷笑し、

「愚かさは、どこまでも愚か」

一際、強く炎が上がり、濛々たる煙が眼を昏く。真つ赤な紅蓮の双眸を。デヴィル・アスタロテが言う、

「ふあはははは。」

俺に敵対しているつもりか。

哀れな弱者を救うつもりか。

では、山賊どもは哀れではないのか。彼らも百姓も神が与えた欲望に駆られて生きていくに過ぎない。

人間は自分の意志で生きているのか。自由意志はあるのか。コントロールしているのか。なされるがまま、自然が敷いた軌道のまま、与えられたままではないのか。思考ですら受動に過ぎないのに。諸概念すら理解していないのに。

全ては、ただ、現実であるに過ぎない」

龍咒がその懐へ飛び込む。

「しかし、人は正しいと思う方へ生きて行く。心を澄まし、神が与えた真の欲望の声を聴いて、心機に導く」

山賊どもはたちまち滅び、デヴィル・アスタロテは七人に囲まれた。

アギトと理愈が連繫し、それぞれ上と下とから飛び掛かる。

「え、何」「あ、あ！」

何の手応えもない。このまま向こう側に突き抜けてしまうかと思いきや。

「ここは？」

そこは、上下も左右も前後もない、光のない、真つ暗な、遙か果てのない、無限の、無際限なる空間だった。

理愈は慌てた。しかし、アギトの声が心に響く。

「上下左右前後にこだわるな。執著を脱ぎ捨てろ。着地しようとするな。全てを厭離し、心を清まし、真に合致し、機に乗じろ」

理愈は導かれた。

すると、どうだろう。

光の潮に襲われ、飲み込まれ、ばらばらにちぎれ、消え、自由になる。古来、眞神郡に言う、『身も裂き砕き天翔躍るよ』とは、これを言うか。解放された。刹那、解脱する。理愈は叫ぶ。

「わかった。ここは、あの『恐るべき荒野』だ。

佛陀がかつて言った。執着を以ては何人も生きるに堪えられない場所だ！」

たちまち二人は闇を突き抜けた。

アスタロテが再び哄笑する。

「なるほど。だが、その程度では、たちまち、愛憎によって破られるであろう。神の命題は生易しくはない。

理不尽に堪えられようか。

罪なき者が激烈に苦しむのを見て、同情や憤りを禁じ得ようか。

この世のどうしようもない、どうにもならない絶望的な状況に、怒り憎しみを、悔しさを感じずにいられようか。

金持ちや権力者どもの愚かな欲望のままの無慈悲な行為を赦せようか。

あぎゃーはは。

理不尽、矛盾、非情、非道。これこそが天道だ。まさしく世界はこれに充ち、これによって衝き動かされている。ふははははは」

黄金の哄笑の渦の中に、悪魔は消えた。

消火はもう間に合わない。村人は諦め顔だった。茫然としている。俯きながら、焼け跡を残し、龍咒らは去る。悲しみと怒りと悔しさと絶望を噛み締めて。

さて、どうにかイユノたちと無事に会合すると、

「エレクシーネを救出できないか」

アギトは改めて龍咒に訴えた。

ユリアスがそれに応える。

「残念だが、今はその時期ではない。洞窟に戻って態勢を立て直そう。力が必要だ。正義だけでは勝てない。勝つ闘いをしよう。智慧だ。

勝たなければ、人々を救えない」

モレイが皮肉な笑みを浮かべた。

「衆生済度か。それをしなければならない理由は未だない」

イユノが微笑む。

「そうね」

第三章 怨霊 だが、人を恨まぬことなどできようか？

その夜、悪魔が降りて来た。月夜、尖った塔のスレート屋根の上へ。

塔の窓が音もなく、月光を差し込ませながら、開く。

粗末なベッドでエレクシーネは眼を覚ました。

目の前に立つ黒い影を見た。

「何者だ」

黒い影は嘲笑うように、

「お前の兄妹さ」

「兄妹だと？ ふざけたことを。貴様、何者だ。朕を暗殺に来た刺客か」

デヴィル・アスタロテは哄笑する。

「愚かな、何という愚かさか」

エレクシーネは眼を伏した。アスタロテの凄まじい憎悪の眼に自分を感じたからだ。悪魔は獐猛な虎のように喉を鳴らす。霹靂のような低い音で。

「エレクシーネよ、ふふ。お前はわかっているはずだ」

「何を」

「お前は諦めた」

「しかり。こうなつては仕方あるまい」

「そして、せめてもと願ひ出た。死にめにも会えず、弔うことすらも赦されなかった母の墓廟を詣でたいと」

さしもの気丈な女帝は苦悶に顔を歪め、双眸に一人の人間の娘として涙を泛べた。

「あゝ、その親不孝を赦して欲しいと祈りたかった」

「だが、それは赦されなかった。無情にも却下された。お前の父が過去に抱いた深い嫉妬の情念のために」

エレクシーネは狂おしく髪を振った。

「ああ、もう言うな」

まるで大審問官のようにアスタロテは超然と聳える。

「そう。お前は気丈に堪えようとする。高貴なる者にふさわしく、恨みに塗れて狂うこと

はすまい、と。浅ましい怨念に憑かれるなどはすまい、と。憎悪に焦がれまい、と。醜き姿をさらすまい、と。

むしろ、高貴なる者にふさわしく寛容ならん、と」

アスタロテは嘲りの冷笑を泛べる。

「愛は偉大だ。人は言う。赦すことは魂を救う、と。

だが、そうであろうか。

もし自分の幸せを捨ててまで人の不幸を救おうと活動する者がその国の貧しい者や病める者らを救うために自己を犠牲にしているにもかかわらず、無知なテロリストに殺されたら、それを赦すことは正しいのか。

暴虐な権力者が酒色に溺れるために、理不尽な憤りや気紛れから、お前の家族を無実の罪で磔にしたり、火炙りにしたりしたときに、それを赦すのが正しいことか。

無法な暴力組織の醜く浅ましい私利私欲のために騙され、裏切られて殺されたのに、それを赦すのは正しいことか。

ドフトエフスキーの『カラマゾフ』の喩えにあるように、領主が母親の眼前で子供を猟犬の群れに食い殺させたのも、赦すことが正しいのか。

残忍で、無責任で、自分の快樂しか考えられない阿呆で、生きる資格のない暴虐な連中がお前に赦されたことを有り難がると思うか、頭のおかしい奴だと、せせら笑われるのが関の山だ。ふ。

全て赦すなら、正義は必要ない」

エレクシーネは両手で耳をふさぐ。

「黙れ、黙れっ！ お前のような者が言う言葉に真実はない！」

しかし、女帝は泣き崩れた。悪魔は容赦なく、責め立てる。

「お前は生存を超える超越的な、崇高な心で耐えた。

おのれの半生を悔いて、せめて世の平和を祈ろうと、聖なる典籍を、心込めて繊細に清々しく書き写した。心はさやかになった。もう人を恨むまい、世の騒擾からは離れようと思った。その気持ちに偽りは無い。

だが、ふと思った。聖なる書がこのような場所にあつてよいものか、と。

手ずから筆を執って写したこの聖典数巻を、亡き母の墓廟に捧げたい、と。また墓参が赦されないならせめても、と。

そして、墓廟のしかるべきに場所に収め、この国の民の平安を祈りたい、と。ふ。健気

な自制心よ。お前の本音はそうではあるまい」

女帝はもう応えなかった。憎悪に満ちて滾る双つ眼は遙か遠く上皇のいる空間をにらみ焼き裂くかのようであった。アスタロテは容赦ない。

「その願いすらも叶わなかった。切ない、健気な、せめてもの願いも。

お前の書いたものが帝都に近づくことすらも、赦されなかったのだ。だが、考えてもみよ。そもそも、お前に罪があるのか。たとえ、お前が祖父の子であったとしても。

それはお前がコントロールできることではない。だが、お前の父は仮借なくお前を責める。なぜ、お前は、このような仕打ちを受けなければならないのか。非はない。

運命か」

エレクシーネの顔は怖ろしく歪んだ。口は裂け、眦も裂け、吊り上がり、両の眸は爛々たる怨嗟の炎であった。抑えていた憤りがどす黒い噴煙のように濛々と上がる。

「ああ、ああ、あああああああああああああああああああああああああああああああーっ！」

髪は下から吹かれたかのように、ふわりと上がり、服は裂けて黒い翼が生える。その絶叫は全天を牽き裂いて世界に轟く。憤りと恨みが遂に彼女を裂いた。

イユノは目を覚ました。真つ暗な真夜中だ。

その凄まじい叫びを聞いたのだ。そして、滂沱の涙を流した。人間はなぜこんなにも哀しいのか。愛がなければ、この苦しみも悲しみもない。憎悪も。

「全ては遅過ぎた。この運命を変えることができない」

イユノの眼にはありありと見えていた。

凄絶なる大悪鬼と化したかつての美しき女皇帝の姿が。柘榴のような焰の口で叫ぶ。

「朕は生きて怨霊と化す。この帝国を永劫に呪い、千人を輓殺し、万人を焼き尽くす、万世の大災厄、大悪霊とならん」

静か過ぎる夜。沈思した。生きとし生けるものを呪縛するこの宿命について、深い想いに囚われている。

その頃、いりりやは夢を観ていた。哀しい夢だった。それは後から目が覚めても想い出せなかったが、最後だけは、はっきり記憶に残った。まるで脳を操作されているかのよう

突如、幕が開けるように、狭霧のような、暗い闇のつぶやきのような、幼い昏い哀しみの夢は畢り、白いさらさらした長い真つすぐな髪と白いローブを着た白皙の青年が立っていた。

「我が名はラグナレク。かつてはフランソワ・ドルレアン伯爵と呼ばれていた。

我こそ是非情にして理不尽なる自然 フュクス *prima* である。マルコスの憎憤もイヴィルの悪辣もエレクシーネの怨嗟も我を源とする。

究竟の真理なるいりやよ、汝に申し出よう、エレクシーネを救つてもよい、と。我が力を以てすれば不可能はない。

交換条件だ。その替わりに、汝が身を我に寄越せ。考える時間を与える。速やかに返事せよ。

では」

消えた。

櫂の扉をノックする音。いりやは驚いて飛び上がった。

「あたしよ、イユノよ。入るわよ」

似合わない、難しい顔でイユノが入ってきた。

「夢を観たでしょう」

「え、どうして」

イユノは微かに笑った。

「今更驚くことはないじゃない。

ま、そんなことは、どうだっていいわ。あなた、ラグナレクに会ったわね。何て言つた？ むろん、ラグナレクが何を言つていたかつてことよ」

いりやは説明した。

「ふーん、やっぱりね。

むろん、行くべきではないわ。確かに、あいつは根源なのよ。あいつを処理すれば、全てが過去に遡つて解決するとも言える」

「遡つて？」

「そうよ。全ては、あいつが起源なの。あいつを世に出すために無際限に遡つて過去が生じたのよ。ま、時間の直進性なんて、あつても、ないようなものだから、別に不思議でも何でもないんだけどね。そもそも、直進つて何よ、時間つて何なの？ 　　つて話なのよ。

ま、そういうことだから、それは、どうでもいいことなんだけど。

そんなことより、いりや。いい？ 絶対だめよ、だめなんだからね」

イユノはそう言ってから、部屋を出た。しかし、出てから、すぐに立ち止まり、小さな声でつぶやき、考える。

「つたつて、絶対行くわよね。だから、いりやなんだもの。さあ、どうしよう。

あ、ちようどいいわ、そこにいるあんたら、絶対いりやから眼を離しちゃだめよ」

警護の修羅たちにそう命じ、急いで龍咒のところへ向かう。部屋に行ったらいなかった。真夜中なのにどこへ、などと思いつつ、皆が普段集まる広間に行く。いた。

「困ったことになったわ」

説明した。

龍咒も考えた。

「いつそう、湖上城へ行ったらどうだ、皆で」

「あんた、意外にバカね。」

飛んで火にいる夏の虫、つてところよ。ラグナレクには、そう簡単に勝てないわ」

「イユノがそう言うなんてな。お前に勝つ奴なんてあり得ないと思っていた」

「まあね。」

あいつだけは別格なのよ。まあ、自分と戦うようなものね」

「何だかよくわからないな」

「もちろん、あいつだつて父親と母親から生まれたわ。あいつを生成するために、過去と原因の全てが生まれたのよ。原因が結果を生むというのは、臆見ね。ドクサよ。」

結果が原因を生むことも自由だわ。そんなものは人間の概念に過ぎない。現実じゃない。だいたい、現実つて何よ。つて感じ。

まあ、それは、ともかくも、出生の秘密と不幸な運命から、あいつはラグナレクになった。た。

本当は、あいつは書物の登場人物だったのよ。ファルコつていう作家の創作した人物だったのよ、映画にもなったわ。

でもね、あいつに言わせれば、書かれる方が主体で、書く方が客体なの。

書く方が受動で、書かれる方が能動なの。書く方は書かされ、書かれる方が書かれさせているのよ。日本語としておかしいけど、わかるでしょ、龍咒なら」

「あゝ、どうにかな」

イサナコが入って来ながら、

「それに関係しそうな話、聞いたことがあるわね。

確か映画にもなったわ。『ラグナレク伯爵』って。それでさ、当時はバカバカしくて笑ってたけど、そこに出てくるラグナレク役の役者が異様な迫力があるって評判になっていて、実は本物だったなんて噂があったんだけど。

あまりにもバカバカしい、安っぽい評判づくりだな、なんて思っていたんだけど。今に思うと、そうでもないかもね。

ロードショーが終わって数か月後に、ラグナレク役の俳優さんが突然、自分は撮影直前から記憶を失っていたと言っていたとか。そういう噂もあったのよ。

いずれの話も大して騒がれもせずに、いつの間にか消えたわ」

イユノが笑って頷く。

「ありそうな話ね」

第四章 自然の摂理 応龍はなぜ一夜に萬里を翔たか

いりりやは思案した。

いったい、どうやってたどり着くことができるだろうか。湖上城がどこにあるかも知らなかった。たどり着けなくては、(恐らく)エレクトロネの命はない。

無事にたどり着かなければならない。そう思い、悩みもする。

そもそも、ここから出られるだろうか。イユノが赦すはずがない。彼女なら、無限に自分を監視できるだろう。周囲はイユノの眷属で固められている。

とても不可能に思えた。

鏡の自分を見る。人は究竟と言うが、何と無力なのだろうか。何が真理なのか。どこが究極の存在なのか。

あまりに無力ではないか。それは関係ないのか。わからない。わからないしかない。

鏡に映る青い双眸をじっと見つめる。ブリリアントカットのダイヤモンドに光を当てたときのような燦々たる睿らかさのかがやき。

「できる。そう思わなくっちゃ」

部屋を出た。

応龍がいた。翼のある龍だ。龍の表情に緊張が走った。イユノから言い含められているのだろう。いりりやは双眸で強く見つめた。太陽の数千億兆倍の、いや、無際限なる光に

射抜かれては、応龍は逆らうことができなかった。

「湖上城がどこにあるか、知ってる？」

応龍は抵抗を試みた。しかし、全く無駄であった。

「はい、知っています。ユイゴード山の頂上、カルデラ湖の真ん中にあります」

「どのくらいで逝けるの」

「私は一時間で千里（二里＝四キロメートル）を飛びます」

「そう、どのくらいで着くの」

「……二時間もあれば」

「お願いします」

「しかし、それは」

「イユノに禁じられているのね」

「は、はい」

「ごめんなさい。でも、しなければならぬの。イユノには私が謝るわ」

「だめです、だめです、できません」

「わかっているわ。でも、お願い」

「赦してください」

「イユノが禁じても、私は禁じていないわ。ただ、現実があるだけ。私は無力だわ。でも、無力は無際限な力なのよ。

路傍の石や土塗れの雑草も。儚い無力さしかないけれども、それが彼らの闘いなの」

「私にはわかりません」

「でも、逝くわ」

応龍は深くうなだれた。

「さあ、顔を上げてください」

いりりやは龍の大きな顔を両手で持ち上げた。応龍は涅槃に達した。

洞内を歩いていた喩咽亜はたまたまそれを目撃した。

「あゝ、止めなくっちゃいけない」

イユノから全員に言い含められていたのだ。いりりやがここを出ようとしている。しかし、喩咽亜はどこか本気になれなかった。いりりやに少し離れてほしいと思う気持ちがあった。アギトのまなざしがいりりやに向けられないうちに。

あゝ、彼女は美し過ぎるのだ。神のように美しい。

「でも、それは嫉妬。この私が嫉妬？ いけない、いけない。そんなこと、考えちゃいけない、たとえ、一刹那であつても」

しかし、瞬時の迷いを振り払って再びまなざしを向けたとき、もはや、いぬりの姿はなかった。激しく悔いた。

「あゝ、私なんて馬鹿なことを。」

急いで、皆に知らせなくっちゃ。何てことをしてしまったの！ イヌノは何で気がつかなかったのかしら」

イヌノすらも、いぬりのまばゆさに眼を眩まされていたと言えよう。何かを訝しく思い、気がついて、部屋を出た瞬間に、ぱつたりと喩咽亜と会ったのだ。喩咽亜は思わず、眼を伏せてしまったが、瞬時でイヌノはすべてを覚った。

「仕方ないわ。誰も、あんたや応龍を責めないわよ。」

さあ、ともかく急ごう。追いかけてなくっちゃ！」

洞窟内はたちまち喧々囂々の大騒ぎ。玲央は気も狂わんばかりに動揺していた。

「行かなくっちゃ、急がなくては！」

早蕨が制御した。

「待て、落ち着け。どうやって行こうというのだ。走って追いつくか。龍馬だって追いつくものか」

「放してくれ、こうしてられるか」

「狼狽えるな」

それを見ながら、喩咽亜は自分の失敗をも刹那だけ忘れ、アギトがあんなふう心配してくれたら、どれほど幸せだろうなどと想う。震える妹、伊咽亜の手を握りながらも。

その幼い震えを見て、傍にいた理兪はぐつと抱きしめたい切ない気持ちになった。

そんなことでいつになく無口な理兪を退けるかのように、アギトが、

「だが、それにしても急ぐべきは確かだ。時間がない。ともかく出発しようよ。考える余裕はない。動きながら思考をまとめよう」

静かにモレイが問う、

「応龍は他に何頭いるのかな」

厳としてイヌノが応えた。

「ここには三頭ね。連れて来た四頭は皆、小型なのよ。大型なら数十人乗れるわ」

「たくさんは乗れないということか？」

目を覚ましたように理愈が訊くと、イユノは諾い、

「そう。」

しかも、軽いいおりやしに乗っていない方に比べれば、たくさん載る方がスピードは落ちるわ」

さつさと決断し、モレイが言う、

「じゃ、一頭は君一人が乗った方がいい。早いし、そもそも、この中では一番、いおりやを救出する力になるのは、君だ、イユノ。こう言うのも、情けないが、それは事実だ」
アギトもうなずかざるを得ない。

「名よりも実を取るしかない。もう猶予はない」

「ともかく、行くぞ」

そういう結論になるのは、もうわかり切っていたと言わんばかりに、既に出発準備の作業に入っていた龍咒が声を荒げた。イユノが突如、叫ぶ。

「あーっ、やばい」

顔色を変えた玲央がにじり寄り、

「どうしたんだよ」

と陰しい表情で問う。

イユノは蔑み気味の横眼で彼を見ながら、

「最悪ね。マルコス・アスタロテに見つかったわ」

玲央は蒼白になった。胸が重くなつて、呼吸が苦しくなる。激しい動悸がする。彼を単に強靱な敵、危害を加えて来る者、と見るのみならず、いおりやを恋愛対象として狙う者、恋敵のようにも感じているからだ。

しかも、相手の方が圧倒的な力を有している。自分は脆弱な人間に過ぎない。一本の葦ですらない。考えても仕方のない葦だ。

いおりやは今まではイユノの防護壁によってアスタロテの「眼」から守られていたのだ。真理は隠蔽されていた。

早蕨が両手を顔の高さに上げて、

「じゃあ、今となつては全くの無防備、露わとなつてしまったってことか」

「そういうことよ。仕方ないわ」

「遠隔でシールドすることは、不可能なのか。イシユラル神の力にそんな制限があるとは思えないけれど。それがゲームの性質Natureなのか」

早蕨のその問いに、イユノは、

「まあ、そんなとこね」

応龍に飛び乗り、龍咒は、

「よし、イユノは一頭に、俺とアギト、理愈はもう一頭に。

最後の一頭に、ユリアスと早蕨とイサナコと玲央とモレイと裂帛汰とウイと喩昶と伊昶亜とえれいんは乗れ。

神将は龍馬に乗って、龍神とともに翔ける、修羅は全力で走れ。

いいか、行くぞ！」

その掛け声で出発した。

そこから数十キロメートル離れた場所では、獰猛な雄叫びが轟く。両眼をかつと開いて舌を垂らし、夜空に狂喜して舞う漆黒の悪魔アスタロテ。狂おしい興奮に泡を吹かんばかりだ。中空をぐるぐると満月輪に向かって旋回する。

「見つけた。見つけた。遂に、遂に見つけた。ア、アハ、アハ、アアギヤハハハハハハ」

まるで狂躁秘祭だ。オルギア魔法の薬でトリップしたような、黒山羊の魔宴のような哄笑。

何も知らず、応龍に乗って、湖上城へもの凄い速さで一直線に向かう、いりりや。

第五章 真理は秘匿される 人は禁じられたるを求む

「いったい、何だ、これは！」

いりりやを乗せた応龍は凄まじい速さで追いついて来る者を感じた。しかもそのオーラは恐るべきものであった。まるで地獄が背後から迫ってくるように威圧される。夜空を領するばかりだ。

「バカな。こんなに早い者がいるのか」

彼にとつては、未知の存在であった。

急がなければ。本能的にそう直感した。いや、ともかくも恐ろしかった。鬼気迫る魂魄は尋常ではなかった。

いりりやも感じている。しかし、龍を不安がらせまいと黙った。しかし、無事に着かなければ、エレクシーネの命が危ない。

念じた。

『イユノ、聴こえる？ イユノ、黙って出て来て、ごめんね。イユノ、でも、今は援けて

欲しいの。勝手なことを言っているのは承知だわ。でも、今は助けて。ラグナレクのところへはどうしても行かなくちゃいけないの。でなければ、あの不幸なエレクトシーネが』

『聴こえるよ。もう、こうなってしまうては仕方ないわ。皆でラグナレクのところへ行こう』

『ありがとう。けど、追われているわ、たぶん、マルコスね』

『わかってる。奴の方が、どうやっても、先に追いつきそうね』

『どうしたらいい』

『わからない。あなたには、凡てができるわ。でも、それは、結局、何もできないということなのかもしれない』

『全力でやってみるしかない。イユノ、祈っていて。もう間もなくよ。やってみるしかない。運命に身を任せるしか』

『運命は結果でしかわからない。そんなモノ、ないと同じだわ。ねえ、いみりや、お願いだから、持ちこたえてね』

いや、もう間に合わない。応龍は突如、彼を追い越して眼の前に立ちはだかる、黒い轟々たる存在に危うく衝突しそうになった。うわっ、あ、危ない！

「バカ野郎、心臓が飛び出しそうだったぞ。こいつ、何者だ」

応龍は眼を剥く。

黒き翼の悪魔は傲然としていた。全人類を憎悪する復讐の悪魔。冷厳なるまなざし。蛇のように温情のない双眸。

両者は中空で止まって対峙し、にらみ合う。そこは、もう、湖上城のあるカルデラ湖を頂にする死火山、ユイゴード山を遙かに望む場所であった。

裂けるほど眼を睨くデヴィル・アスタロテ。さすがの龍神すらも怖気をふるう。底知れぬ冷たさ、憎しみ。

しかし、いみりやは怖じ気づくことなく、凜として凝視し、煌燦めく双眸で射抜く。アスタロテは呵々大笑した。

「あゝ、ようやく会えたな、いみりや。あゝ、素晴らしい、ルシアと何ら変わらぬ。あゝ、歓喜だ。解脱だ。あゝ、何ということだ。究竟の真理だ。あゝ、あゝ」

悪魔は嗚咽し、慟哭した。その瞳は千数百年ぶりに潤ったのである。

「あゝ、もはや死も厭わぬ。全うされたのだ。生存に戻ることはない。お前がいれば。このような快樂があるだろうか、他に」

マルコスが長い爪と黒い体毛の絡む細長い腕をいりやに伸ばす。

だが、そのときだ。天空と大地と大洋とを、一瞬、真つ白にかき消す超弩級の雷霆の閃光、凄まじい霹靂が轟く。

「ううぎゃああああ」

絶叫とともにアスタロテが墜落する。もがき抗う、燃えながらも。イカルスのように。堕ちながらも、

「おのれ、何者か、何者だ」

それに応えて、天をも凌駕するように響き渡る乾いた声。

「知らぬはずはあるまい、地獄よ。我が名はラグナレク。デヴィル・アスタロテよ、我が所有物を奪おうなどと、身の程知らずが」

唐突に、白く輝く二頭立ての戦車が中空に表れ、神馬が強く嘶く。そのまばゆさは太陽神の乗り物のようであった。白いローブを引きずり、白い髪を靡かせて、背の高い若者が立っている。凍てつく冬の声で言う、

「さて、三千世界の至宝よ。迎えに来たぞ」

「あなたがラグナレク」

「さようだ。何を驚く」

「まるで古典期のギリシア彫刻のように美しいので驚いています。もっと恐ろしい魔物かと」

「完成されたものは全て美しいのだ。さあ、疾く参れ」

応龍は体が固まって動けなかった。いりやは軽々と戦車に乘せられ、消えた。

『あゝ』

イユノはうめいた。

『遅かった。遅過ぎた。ラグナレクの掌中に落ちてしまった』

だが、イユノの脳内には、神々の黄昏の声が響き渡った。

『何を落胆するのか、イシユラル神よ、是非、我が城で晚餐を。確かにお招きしたぞ』

龍咒は応龍に乗ったままでイユノが中空に止まって待っているのを見て驚いた。もう一頭の応龍は誰も乗せておらず、放心状態である。

「いったい、どういうことだ。いりやは？」

彼女は肩をすくめた。

「晚餐まではまだ時間があるわ。少しゆっくり行こうよ」

「何のことだ？」

「まあ、いいから。降りようか」

怪訝な表情でアギトはモレイたちに連絡した。イユノ、龍児、アギト、理愈は地上に降りた。

「コーヒーでも飲もうか」

「おいおい」

理愈も堪り兼ねた。

「待ちなさいって。」

同じ話、何度もしたくないから。ユリアスたちが来たらまとめて話すわ」

「しかし、いりやは」

「無事よ。ラグナレクの手に渡ったわ」

「ええ、それじゃ、やばいだろ」

「あゝ、面倒臭いわね。いいわ、話すわよ。いりやは連れて行かれたけど、あたしたちも晚餐に誘われたのよ」

「余計わからない」

「二、三十年、座禅でも組んでなさい。そうすりゃあ、わかるわ」

やがて玲央たちがやって来て合流する。状況を知ると、玲央は再び恐慌状態になった。

「何てことを。どうにかならないのか。どうしてこんなにゆつくりするんだ。いったい、ゼンたい、わけがわからない。」

「いったい、いりやはどうなってしまうんだ」

イユノが横眼で見て、

「まあ、落ち着きなさい。」

「と言つても無理ね。さあさあ、うるさいからこの鎮静剤でも飲んでいてよ」

イユノは摩訶不思議の文字の綴られた茶色の薬壇を革袋から取り出し、何も言わず、玲央の口をふさぐように飲ませた。強いハーブのような刺激臭。

あつという間に大人しくなる。

「恋愛なんてこんなもんね」

皮肉な表情で喩咽亜とえれいんと伊咽亜と理愈を見て微笑する。

イサナコが難詰する。

「私も理解できないよ」

炎家の熱さモロ出しで、えれいんも、

「わたしだって。到底、理解できない」

肩をすくめて、イユノは、

「ラグナレクは大事にするわ。いりやはラグナレクによって秘匿されているのよ。秘匿された真理。この世の陀羅尼^{だらに}、真言真咒のように。

阿古屋貝の肉に包まれて真珠が秘匿されるようにね。ラグナレクはコロナ（太陽の周りの散乱光。太陽の縁にあるガス層）のようなものよ、フレイアね。

いりやを太陽の薔薇窓だとすればね」

その言葉を言うときのイユノはイシユラル神そのものであった。誰もが息を飲み、その言葉を受け入れるしかない。

一行はキラバンのように隊列を組んで出発した。

そうやって、ゆっくり進むうちに、神将や龍神や修羅たちが追いついてくる。

「夜も明けたわ。朝ご飯にしましょう。」

そう言えば、タブラ・ラーサはちゃんと持ってきたの？」

龍咒がうなずく。

「あゝ、むろんだ。ここに」

懐の中にしてまつてあった筒を見せる。少し懐かしい気がした。最初の追跡の目的は、もうどうでもよいような感じになっている。

「それなら、いいわ」

イユノは見遣った。彼方にユイゴード山が見える。樹木のない死火山は異様な沈黙に聳えていた。周囲を睥睨するかのよう。

翼をたたんで泳ぐように街道を走る応龍の背の上で、龍咒と早蕨とユリアスは何度も相談したが、ラグナレクの考えは全くわからなかった。

蕭然と古街道を進むうちに、ブロワという城下町に着く。ノーロワという川が悠々と流れていた。城壁内の街は盛んで、旅の商人や近隣の村の農夫の荷馬車が行き交い、籠の花を売る娘や仏頂面の肉屋の親爺やワインの樽を看板代わりにしたバル、市場には野菜や薬草があふれ、焼き菓子の屋台などがならぶ。誰もが龍と龍馬の隊列に眼を瞠った。

「こんなに目立って大丈夫か」

顔を顰めて訊く理愈にイユノは、

「ラグナレクに関して言えば、どう隠れようとも同じよ。上皇軍はここまでは来ないわ。どこの国もね。たとえば、神聖シルヴィエ帝国だって滅多には近づかないわ」

揺蕩う大河に沿ってのんびり進みながら、早めの昼食を摂ることに決めた。

「あれは、どうだ」

「あのスレート屋根に赤いタープを張った店か」

「おい、おい、どこの家もスレート葺きだぜ。さらに正確を期して言うならば、旅籠と言すべきだろうな。」

ふふん、ブランか。いい名前だ。炙り肉だと。うーむ。最高だね」

脂の滴る肉を堪能し、自然に会話も柔らかくなる。それでも、窓側に坐った龍咒とイユノはときどき外の様子を窺った。梁が剥き出しで、中世の倉庫のような石積み建物の中央に煙突に繋がる天蓋の下に大きなグリルがある。よく肥えて血色のよい大柄な亭主がニコニコしながら牛や羊の肉を運び、大鍋の臍物スープを各自の皿に注いでくれた。

アギトは緊迫した状況であるにもかかわらず、夢想到誘われ、中世ヨーロッパの旅人になった気がする。気の置けない仲間たちとわいわいするこの瞬間は幸せな気持ちをもたらすものだ。

「さあ、行こうか」

龍咒が言うと、早蕨も、

「そうだな、行こう」

一行は外へ出た。街道に戻ってからも、理愈は後ろを覗く。

「どうだ、いるか」

アギトが訊く。

「いや。いないようだ」

「そんなはずないわ、ついて来ていたわよ」

イユノがそう言った。黒い陰は肉眼では見えない。

「まあ、いいや。このまま行こう」

いよいよユイゴード山が頭上に蔽い被さるかのように迫って見える地点に来た。その怪異な雰囲気が一同を圧倒する。

理愈が思わず、

「怖え。何て言うか、この世の終わりみたいだ」

クスリと笑って、イユノが、

「そう言えば、この辺で、あなた方に少し予備知識としてラグナレクの話をしておかなく
つちやいけないわね。」

よく聴いてよ」

彼女が話したものは、次のようなエピソードであった。

第六章 ラグナレクの伝説

紫の斑点を滲ませた濃紺の甲殻を剥いでオマール海老の乳白色の身を取り出す。口にふくむと汗があふれ、馨が舌を満喫させる。

「伯爵、貴方は信じられない駅通^{えきてい}をお持ちのようだ。どのような駿馬を継げばラス湾から1千キロメートルの内陸にあるこのブロムシヨフの地まで、どのような鮮度を維持するこ
とができるのでしょうか。まったく以て奇跡、魔法です」

壁に古いタペストリーと先祖の歿年を銘する肖像、石床に龍脚を置くオークのテーブル、黒ずんだ真鍮製の燭台、かくも暗鬱な大食堂の荘厳を散じるべく普齊^{ふせう}子爵が努めて明るく賛嘆の辞を捧げても、湖上城の若き城主、神々の黄昏^{ラグナレク}を自称するフランソワ・ドルレアンは背もたれ高い椅子に深く坐し応えなかった。

内面の遙か彼方を眺めやる眼差しでこう言っただけである。

「たとえそう、目薬を差すときだ、わかるかね、子爵。自分で知りながらやっているにもかかわらず、誰しも必ず瞬きをしてしまう。そう、必ずだ。目蓋を微動だにさせぬ人間を私はいまだかつて見たことがない。無害であると承知してつとも身を守る為、条件反射的にやってしまう。」

子爵。これが生存の蠢きだ。未だ幼い頃、私はそのようにして母親を殺した」

腰を覆うほど長く燦めく白髪をまっすぐ垂らしたこの人物は贅沢なお世辞でも言ったかのようにゆつくりと微笑んだ。

ヴィクトイル・ドルレアン伯爵は妻の切迫した連呼に目を覚まされた。金製時計が暖炉の上で告げた時刻は午前二時。飛び起きながら半身を捻って寝台の隣を見る。老伯爵の眼は驚愕^{みひら}で睜かれた。

新妻ヘレナの開脚の上に黒く毛むくじらの生き物が跨って、艷光する尻を蠢かせて

いる。十七歳の少女の華奢な指がシートに襷を寄せて緩ませず、剛毛に覆われた長大な陰茎は悠然と出入する。陰唇の潤みが炉の炎に燦めいていた。

魔物はヴィクトイルを嘲るように振り向く。尖った鼻に切れた口から猥らに垂れた長舌とこうもりの翼、古書の挿絵で見た夢魔の姿そのままであった。

歳に似合わず物静かで貞淑な妻が喜悅の涙に眉根を顰ませ、足指をにぎるように曲げて痙攣する。伯爵には一度たりとも見せなかった若さを奔放に晒し、彼の胸を裂く。それは妻を陵辱された憤りよりも強い衝撃であった。

激情に駆られ、壁に懸かる伝来の剣を手取る。鞘から抜くより早く夢魔が身をよじつて刃をかわした。膨張した陽物からほとばしる液が老伯爵の頬にかかる。魔物は哄笑を残して闇に消えた。

ヴィクトイル・ドルレアン伯爵は泣いて謝罪するヘレナに罪なきことを理解しながら、彼女を赦すこともせず、また自刃しようとする彼女をなじる。「おまえは、純潔の誓いを裏切った上に、さらにわしに自殺した女という汚名を附与するのか」と。

以来、自暴自棄に飲酒しては狩猟に出て遅くに城へ戻り、深夜、涙に濡れた妻の面に二度と笑顔の戻らぬ様を眺めて無表情に時を過ごすだけであった。

悲劇はこれで終わらなかった。

「私は生存を憎む。私は、生き続けようとする浅ましい意志を憎悪している」

そう言つて伯爵ラグナレクは蒼白になっている普齊子爵を睥睨した。

「そう。わずかな湿り気があれば発生する黴や、切り取られた蛙の脚がまだ痙攣したり屈伸したりする様子に嫌悪感を覚えるように、私は生命活動の卑しさを蔑む」

湖上城の礼拝堂の内装はバロック調の、過剰に壮麗なものであった。建築全体はゴシック様式の峻厳な造りだが数百年前に改装されたのである。内陣部に祭壇があり、その前に大きな棺が置かれていた。重厚な彫刻を施された大理石製で基台の上に肅としている。蓋には美しい女人の横臥像があった。

「見たまえ、子爵。これがラグナレクの母、ヘレナの遺骸だ」

軽々とスライドさせられた棺の蓋の下には原形を留めない粉々の骨や乾いた肉の筋の断片があるばかりであった。

普齊は危うく叫びを抑えた。

その日は来た。

ヘレナが九ヶ月目を迎えた。

ヴィクトイル・ドルレアン伯爵は隣室で待つ。膝頭に深く頭を抱え沈めて震えていた。
マントルピース
炉棚の置時計が午前一時を告げる。

伯爵が頭をもたげた。産声。

部屋の扉が開いた。

「旦那様、おめでとうございます。男の子です。お世継ぎがお生まれになりました」

そう言祝いだのはメイドだった。

ヴィクトルの下瞼に苦い皺が走る。家の使用人らは誰も事情を知らないのだ。一瞬、絶望的に眼を睜みひらいていた伯爵が立ち上がり、壁に懸かっていた剣をつかむ。

そして。

伯爵は走った。隣室のドアを蹴り開ける。

驚いて振り返る医師と看護婦との狭間に、産褥衣に紊れ髪のヘレナがベッドで半身を起こして愛し子を抱く寥れ姿。面を上げた彼女の眼差しと伯爵の目とが合った。

刀を振りかぶる。悲鳴。彼の眼前が暗闇となった。

若き妻の足尖で、伯爵ヴィクトイル・ドルレアンは粉々の肉片に変じ、雲のように床に降り注ぎ散ったのである。

恐るべき光景に誰もが起こったことを信じられないでいた。誰よりもヘレナの絶望は深かった。彼女には直感できたのだ。我が子が今夫を、父親を殺したことが。

葬儀を終えて屋敷に帰る黄昏時。伯爵の死から三日の後であった。ヘレナは憂悶に包まれていた。

弔いが急なのは世の常であるけれど、集まった親戚、姻戚縁者らの疑惑に満ちた眼差し、教区教会の外で帽子を胸にあてて待つ領内農夫らやその妻たちの眼、眼、眼。自分が若すぎるがゆえに多くの人々から不貞の疑念を向けられている。莫大な財産を目あての結婚、余りに急な死、その異常な状況の詳細は未だ伝わらずとも町ではヘレナが愛人と共謀して魔術を使い、夫を殺したと噂されていると言う。

屋敷に入れば召使らや執事までもが眼を伏せた。医師や看護婦、出産のとき部屋にいた女中らの口から幾許かずつ伯爵の凄絶な、信じ難い絶命のありさまが家内の者に洩れ伝えられ、誰もが深い猜疑を籠らせている。ただしそれはヘレナではなくフランソワに對してであった。故伯爵の生前の態度から生まれる子にただならぬものを察知する者が少

なからずいたからである。だが余りに恐ろしいその想像をこの時点で言葉でできる者はいなかった。

部屋に戻るや否や、我が子フランソワを抱いて、彼女はハンカチーフで鼻や唇を抑える。未だもの見えぬ息子に語った。

「フランソワよ、私にはおまえしかない。二人でどんなことにも耐えて生きて行きましょうね」

赤子はすり寄せられる母の睫に頬をくすぐられ、笑った。

ヴィクトイル・ドルレアン伯爵の死後、教区教会のイグレスオス司祭が足繁く屋敷に通うようになっていた。美貌の司祭が若き未亡人の許を訪れる、だが風評はさほど起こらない。

「司祭様、ありがとうございます」

「いや、奥様におかれましてはお氣遣い下さるぬよう重ねて申し上げます。しかしながら」

「司祭様」

「お噂のことです。お赦してください。しかし私の務めとして訊かずには済ませられないのです。故伯爵の死から六ヶ月が過ぎました。奥様、お心の疵もいくらか和らぎ今ならば真実をお話いただけるのではないか、そう思ってお尋ね申し上げるのです」

ヘレナは俯いて黙った。故人の死際の様子は少しずつ外部に広まっている。イグレスオスが音立てぬ嘆息をした。

「ヘレナ様、私は急ぎません。お心がそれを許すときまで待ちましょう。では今日はこれにて」

司祭が部屋の扉を閉じる音が聞こえた。ヘレナはその音で司祭が去ったことに気がつく。慌てて窓際に寄った。

伯爵邸を去る騎乗の司祭と従者、その姿を見て農民たちが作業の手を止め帽子を脱ぐ。

「司祭様」

「神のお恵みのあらんことを」

祝福を授ける司祭の面立ちは沈鬱で思いこにあらざるの呈であった。彼が通り過ぎた後に口々に衆らは言う。

「まったく以て熱心なこつて。あの恐ろしいお館にこつても頻繁に行きなさいとは」

「まったくくじや。先の御領主は悪魔に殺されたんじや。よそのもんは奥様がじゃと言うが

そんなこともあるもんけえ。あのお館が呪われとるんじゃ」

「おまいさんたちったら。司祭様はね、きつと他におめあてがおありなんだよ、決まってるじゃないか」

「ばばあ、くつだらねえこと言うでないぞ」

「若奥様はお独りだもの」

「お屋敷は御立派だし」

「何を罰あたりめが」

「けれどよ、あの司祭様、何でもザレグドガルドの大商人の家柄だって言うじゃねえか。わかんねえど、何狙ってつか」

「奥様もどうか。あれだけの美男子」

ヘレナは屋敷の閉じた窓から遠ざかって行く司祭の背を見送っていた。その姿が見えなくなるとベッドに伏せ、声を殺して嗚咽した。

「ああ、神様」

すべてを告白してしまいたい。それが我が子に苛酷な運命を齎すことはわかっている。だが真実を言わなければ夫の墓碑銘は永遠に偽りで封ぜられてしまうのだ。

彼女は視線に気がついて頭をもたげた。眼を覚ましたフランソワが籠からこちらを見ている。青い晴でまつすぐに、まるで大人の表情であつた。母と目線が合うと嬰兒の笑みで笑った。

お乳の時間であることをヘレナは思い出した。何と賢い子だろう、空腹でも泣かずに母を待っている。自ら授乳した。乳母が様々な言い訳をしてやりたがらないからだ。使用人たちは何も言わないが誰もが気味悪がつている。彼女にとつてこの部屋が屋敷のすべてとなりつつあつた。食事に下りるときには外出同然の心構えが必要となつていた。

だが領主として継承された土地を管理運営して行く実務から逃れることはできない。これを怠つてはフランソワの生活基盤が失われてしまうのである。経営に無知であつたヘレナは頻繁にイグレスィオス司祭に相談していたが、家令と顔を合わせたくないために、いつしか彼を代行者として一切の指示を任せるようになっていた。

「もしも……」

最近、司祭はこのようなことを口にするようになっていた。「フランソワが十八になり、領地を継ぐ日が来ても、私はこれを以て任務の終わりとすることなく、彼が独り立ちできるまで誠実に補佐いたすことを誓います、心正しくも憐れ不幸に見舞われた美しき信徒

へレナよ」

五歳になったフランソワは独りで屋敷内を歩くようになると、周囲の者たちが示す態度の訝しさに気がついた。最初、彼は人々が自分を見て退いたり、戸惑ったりするのは特権的な地位の者への畏怖だと考えていた。だが、使用人のこどもたちが物陰で密やかに囁き合い、目が合った途端に逃げながらこころ叫ぶのを、或る日はつきりと聞いた。

「ひゃあ、お化けに見られちゃった！」

フランソワは母が部屋から出ることを最小限にしようとする意図と、この出来事との相関を思慮した。

「おかあさん」

彼は決然と言った。「僕はおかあさんに嘘を言ったことはありません。それなのに、なぜ僕のお母さんが僕に嘘を言うの？」

「嘘って、何のこと、フランソワ」

「おかあさん、本当のことを言ってくれないのは、嘘を言うのと同じです。おかあさんは僕を愛していない。愛しているのなら、どうして隠しごとをするの？」

目が涙に潤む。

「何があつたの？」

「皆が僕をお化けだつて言うんだ！」

そしてわっと泣いた。

「ああ、フランソワ！」

母もまた彼を抱きしめ泣き崩れる。

フランソワは慟哭する母に驚いて涙を止めた。彼にはへレナが心中で『可哀想な、可哀想な私の子！』と叫ぶのがはつきり聞こえた。

「おかあさん、ごめんなさい、お願いです、もう泣かないでください！」

翌日、母が身体のだるさを訴えて起き上がれなくなると、フランソワは食事に下りることもせずに見守り、優しい言葉をかけ、女中らを度々呼んでは用を言いつけたりもしたのだが「お腹が空いたでしょう。食事をお摂りなさい。これは母のお願いです」と言われやむなく階下に行った。背もたれが背丈より高い椅子に独り坐り、大きなテーブルに顔だけ出して食事していると背後に気配を感じた。振り向いた。厨房へ通じる入口に半身を隠すように料理人の子が人差し指を咥えてこちらを見ていた。

「ミハル、食べたいのかい？」 フランソワは笑みを作つて優しく訊いた。三歳のミハル

は吃驚した顔をして固まってしまった。椅子から降りてフランソワは彼に近づこうとした。

「やめて！」 姉のナーシャが慌てて厨房から飛び出して来て奪うように弟を抱きかかえる。怯えた双眸を顫わし、なじるようにフランソワを見た。

深く傷つけられ、哀しみが込み上げた。

「僕は、ただ、……」

「いいえ、お気になさらないでください」

ナーシャは斜め下を見ながら立ち去ろうとする。

「待って、君らは家の子じゃないか。僕はただミハルに……」

兄のドロフが現われ、妹弟とフランソワとの間に立ちはだかった。勝気な顔だった。

「やめろ！」

「なぜだ？ 僕が、いつたい、何をしたと言った。僕らは家族のようなもののはずだ！」

ドロフが憤った。

「家族っ？ だって、お前は伯爵様の子じゃないじゃないか」

フランソワは愕然とした。ドロフが何を言っているのか理解できなかった。だが、フランソワは意識の深淵の中であの事件を記憶していた。むろん、インキュバスの子であることも父を殺したことも知らない。

しかし、無意識の底に胎蔵していた。本能的に畏れ、封印していた。ドロフの言葉は、それを暴いて心臓を貫いた。先を聴きなくなかった。そう思った瞬間、目の前の少年の肉体は爆裂して肉片と血の霧とに変じた。ナーシャが悲鳴を上げ、ミハルが泣き叫ぶ。フランソワは茫然と立ちすくむことしかできなかった。

近くにいた女中数人が聞きつけて現われ、金切り声を上げる。使用人らが集まる。駆けつけた料理人の妻が凄惨な光景に狂人のようになる。憤った料理人が包丁を持って振りかぶった姿のまま執事らに抑えられる。

「やめろ、貴様も殺されるぞ」

騒ぎに驚いたヘレナが看護婦に支えられ、階段を下りてきたが料理人の呪いの言葉と突っ立っている我が子、飛び散った血と肉片とで染まった床を見てその場で意識を喪った。

フランソワは周囲を見廻す。誰も彼に近づかなかった。一人また一人とその場を遠ざかって行った。

翌朝、家令がヘレナの部屋に来て言った。

「奥様、使用人たちが皆お暇を戴きたいと申し上げております」

彼女は顔を手で覆ったまま上げなかった。フランソワは隣の小部屋に閉じこもり内錠を掛け、室外へ出ようとはしなかった。合鍵はあったが敢えて開けようとする者はいない。

「あの音は何」

ヘレナはそう言つて頭をもたげた。家令が険しい表情で窓に額を寄せる。「あ」

彼女も窓の傍に近づいた。屋敷の塀の外を群衆が囲んでいる。領地の農民らであった。

「これはどういうことでしょうか」

人々は鎌や鋤を持つて叫んでいるようだった。窓を開けさせた。

「悪魔だっ」「悪魔を出せ。悪魔を殺せ」「村が滅びるッ」

ヘレナは唇が震え、血の気が引くのを感じる。「いたい」

家令のエンリケスが貼りつけたような謙譲の面持ちを以て応えた。

「奥様。彼らはフランソワ様のことを言っているのです」

「ああ」

一群の民衆をかき分ける騎乗の人がある。

「皆の衆、落ち着きなさい。狼藉をしてはならない。さあ落ち着いて、ここは私に任せるのです」

「おお、司祭様！」「司祭様、悪魔祓いをお願いします！」「このままじゃ、わしら皆殺しじゃあ！」

イグレスィオス司祭の姿を認めて、ヘレナの頬にわずかの血が通う。

「ああ、司祭様！・・・エンリケス、司祭様をお迎えに行つて、お願い早く！」

家令が黙つて頷く。

部屋に招じ入れられるや人払いを申し出たイグレスィオスが彼女の手を握った。もはや頼む人もないヘレナはその手を強く握り返す。

「さあ、何が起つたのかを正確にお話ください、我が妹よ」

ヘレナはすべての事情を話した。眉を顰めたまま聴き入っていたイグレスィオスが言った。

「残念ながら、ヘレナ。フランソワの出生の秘密を知つては、私とて、到底、力の及ばざるものと断じぬわけには行きません。民衆らの言い分は道理です。秘密はどこからともな

く洩れ、彼らは多かれ少なかれ、事実を耳にしているのでしょう。でなくば、各々明日の糧を慮ることしか知らぬ衆らがあのような行為に出ることは考えられない。

ヘレナ、痛ましいことです。貴方の高貴な心掛けを思えば、私も勇気が挫けます。しかしながら、ヘレナ、結論は変わらないのです。母である貴方にとっていかに辛くあるとも、為すべき真実は一つしかありません。明白に言いましよう、貴方の御子息は人々にとって害悪です。いかに貴方が愛そうとも。

それでもヘレナ、衆に害を与えようとも構わず、貴方がその情愛を貫くと申すならば、私は敢えて言葉を閉ざしましょう。ただ命運に身を任せて、そう告げるのみです。神の御心のままに、と。

しかし、貴方は御身さえ善ければ他者はいかようでも構わぬと申されるのですか、ヘレナ。お聴きください、我が妹よ。

彼を処せる者は貴方以外にありません。母親に対して、これは余りに酷い言葉です。だが、今日まで、いつたい、何億人の人間が苛烈な、理不尽な、残虐な運命に哀れ屠られてきたことでしょう！ 貴方だけが例外で済まされるでしょうか、信徒ヘレナ？

私がかく言うも貴方になれば彼は危害を加えないと確信するからです。いかに悪魔の子と言えども、自らの御母に手を下すことはあり得ないのです。もし為すならばそれは悪魔以下の外道、嘔吐すべき蛆虫以下の存在でしかない」

司祭が黙ってヘレナの顔を窺う。

「司祭様、いつたい、私に何をしろと仰るのでしょうか」

その声は震えた。

「悪魔をその生まれた場所に帰すのです。冥府のその奥深くへ」

「司祭様、おお、何と言っことを、貴方は何ということを申されるのですか。それはできません。私にはできない。貴方は我が子をこの手で殺せと申されているのです」

「ヘレナ、ではこれ以上の犠牲を出すことを貴方はどのように考えるおつもりか」

「この土地を離れます。人里から離れます」

「どこにしようと同じ。どこにでも人はいます。犠牲が絶えることはない。或いはまったく人と接することのない地に貴方が行くとして、そのような土地で貴方や御子息のような人が生きてゆけるはずがありません。」

信徒ヘレナよ、一時間の後に戻ります。なにとぞそのときまでに御決断を。そして忘れないで戴きたい、この私が今や身内よりも誰よりも貴方を深くいとおしみ慮っている事

実を」

寂しげな眼差しを造り、美麗な笑みを做してイグレスィオスが去った。

一時間ヘレナはベッドに坐してうなだれたまま動かなかった。

「ヘレナよ」

司祭が部屋に入ってきた。絹袋の手荷物を小箆笥の上に置く。彼の手が彼女の肩にかかる。

「さあ、面を上げてください」

司祭が指尖でヘレナの顎を優しく持ち上げた。「我が妹よ」

悲歎に碎かれ抗うべくもない彼女は見上げる。涙で彼の顔が滲んで見えた。

「さあ、歎いても哀しんでも、また涙に暮れようとも事情は一切変わらぬのです。そしてヘレナ、今の貴方には酷であるとしても敢えて私は言いましょう、フランソワをお子と思う必要はない、と。彼はインキュバスの悪辣な淫業により生じた者」

ヘレナは『悪辣』という言葉聞いて、息子を孕んだあの夜の空前の快美を思い出し、複雑な呵責に自己を苛み、表情を歪めた。

「ただ、貴方の胎内に宿されたというだけで、子息たるべき本質を持たぬ異形者です。謂わばフランソワではない。彼を做す収集はフランソワを做すはずであつたロゴスではない。彼はフランソワのアイデアを持たぬ異端者です」

「司祭様、あの子は紛れもなく私の子、私に愛され、私を愛し、信じています。どうしてそのような酷いお言葉を」

だが、それを言わず、イグレスィオスが彼女の身体を強く引き寄せた。司祭のまとうベルベットがヘレナの顔を包み、若々しい腕が抱く。

「妹よ、迷いを断つのです。神の御心に適わなければなりません。崇高なる神の光芒のみを見るのです。あなたには見えるはず。さあ、清らかなる信徒よ、御心に身を委ねなさい」

その言葉がヘレナの怯え続けた心を柔らく解き放ち撫で、永らく見出せずにいた光を以て陶然とさせた。神の御姿が現前したかのように。

「貴方を見放しはしません。フランソワ亡き後は、私が永劫、貴方の傍にいます。そのためには、僧籍を捨てゐる覚悟さえあるのです」

「イグレスィオス様、それは」

ヘレナは布地に埋めていた顔を上げた。司祭の唇が彼女の唇に重なった。驚きに眼を睜くも離れ難い接吻に目蓋を伏せる。滑らかな聖職者の指が胸元の紐をほどいた。ヘレナは

彼の腕に手を添える。若き男の右手が衣をまくり、まさぐった。唇を離し、彼女は吐息する。イグレスオスの双眸が燦めいて、見つめていた。

「ヘレナ、貴方を愛している」

蠕動していた肉身を言葉に衝かれる。背や腹の皮膚を這う司祭の繊細な指が終にそこに至り、優しさを温もらせ、彼女は自分を抑えるべきすべてを喪った。

窓から差す月影が雲の過ぎりとともに緩やかな明滅を繰り返す。

ヘレナはベッドに伏せ、腰にシーツを絡めただけの姿で泣いた。チュニックを羽織っただけのイグレスオスがボタンをゆつくりと嵌める。

ベッドに近寄り彼女を再び抱きしめた。ヘレナは逃れるように顔を背ける。

「愛しいヘレナ。私の命よ、この世界で最もかけがえない人、聖なる我が愛よ。髪を梳り、その紅潮した美しい唇を口紅で蔽い秘めてください。服を着るのです。そして私の言うことをよく聴いてください。

さあ」

僧衣に身を正したイグレスオスが手渡したものは細くて長い鎚であつた。彼が絹の袋に包んで持ってきていたものはこれであつた。簡易なドレス一枚の姿でヘレナはそれをまさぐりと眺める。

「司祭様、これは」

「教会に保存される聖なる青銅の鎚です」

膝頭の間に埋めていた頭をもたげる。フランソワは廊下で足音が忍ばされていることに気がついた。裸足のようであつた。闇に向かって声を上げる。

「おかあさん？」

足音が止まる。答はなく、鍵を廻す音が聞こえた。扉が開く。廊下の闇はいくらか薄く、フランソワは入ろうとするシルエットを母と認めた。

「おかあさん、来ないで。僕は」

「フランソワ、どこにいるの。見えないわ」

その声を聴いて彼の膚に慄然が走った。

「おかあさん……」

「お願い、蠟燭を点して。見えないのよ、フランソワ」

努めて優しく語ろうとする母の口調が震えを帯びていた。フランソワは不安に襲われた。だが母に背を向けて火を点す。終えると再び向き直った。

炎照に浮かび上がり自分に向かって金属の棒を振り下ろす母の姿が目の前にあった。顔に涙を噴出させ、唇を嚙らせ歯を喰いしぼり、眼周を歪めて睜く形相。みみ「やめてっ！」フランソワは叫んだ。

それはヘレナに対して言った言葉ではなかった。氾濫のごとく内奥から込み上げる自分の力に向かつてであった。彼女の髪が牽かれ宙に吊られる。目に見えない大きな手があるかのようであった。母の悲鳴が上がり、鎚は落ちる。頭皮が剥がされた。空中にもがくヘレナを助けようと彼は必死で近づく。手が届かなかった。「おかあさんっ、おかあさんっ」紙が破られるように縦裂きに裂かれる。ヘレナが獣の咆哮を上げた。骨が音を立てて碎ける。さらに千切られた。フランソワは狂わんばかりに腕を伸び上がらせて飛び散る肉片を紛失すまいと舞いあがく。血の雨が服を濡らす。

ヘレナは原形を喪った物質となった。フランソワは両手でこめかみを抑えながら頬が引き千切れるほどに顎を伸ばし絶叫する。眉の弧はいびつに突き上げられ、目蓋は萎み寄せられた。眼は焦点を喪い、魂が破れた。人とは思えない動きで五歳の少年が床に額を叩きつけ哭き続ける。

「こうして私は母を殺した。ただ自分が助かりたいために、自分が生き延びたいために母親を殺戮した。たった、それだけの理由で自分を産んだ女性を虐殺したのだ」

ラグナレク伯爵はまたあの贅沢な微笑を浮かべる。

普齊子爵は身動きすることができなかった。

「子爵。これが生存だ。わかるかね。これが生命だ。胃の腑が蠕動するように母を殺した。心臓の鼓動を止めることができぬように母を殺した。これが人間行為一切の源泉だ。高邁なる諸思想の起源だ。これこそが諸概念の棟梁(アルケー)なのだ。人間が理想を追求する行為がこれであり、数千年をかけて到達した真理も皆ここから生じた。

子爵、徴が繁殖するのと何ら変わらず人もまた生き延びたいと願う。人が逆上する根柢のすべては自己の存在が脅かされるからに他ならない。

私はかつて一人の男を縛りその目の前で彼の家族を虐殺した。鉄の網を用意して火で炙り、そこに娘たちや妻を載せた。一昼夜彼女らは凄叫し続け途絶えることは一瞬たりともなかった。赤く焼けた網に肉が爛れやがて肉の薄い部分、踵あたりから骨が露われ始める。

子爵、人間は炙られてもすぐには死ねないのだよ。弱火ならなおさらだ。そのときの男

の顔はまさしく見物だった。あれほど人間の眼窩が広げられ、口が開かれるのを私はそれまで見たことがなかったから。だがもしも炙られるのが彼の家族でなければその男はそれほどまでに苦しまなかっただろう。せいぜい嘔吐するぐらいなものだ。同じ人間なのにな。所詮、それだけのことなのだよ、子爵。

家族とは自己存在の延長なのだ。家族に起こったことなら悲劇であつても他人ならば苦しむことがない。自己から遠いからだ。誰でもそうじゃないか。恋人と同じように他の男を愛する女はいない。薄汚い不誠実さだ。すべての人を均しく愛さねば不公平ではないか。差別ではないかね？ 愛などと称してもつまりは浅ましい生殖の欲望にすぎないのだよ、ふふ。家族愛も友愛も自己愛の変形だ。自己愛とは自己の存続、生存への執著にすぎない。地衣類の繁茂と変わらない。

蝶々が蜜を求めるように、獅子が脱糞するように、傭兵が焼き払った村の娘を輪姦するように。

これが命を賭して人民の為に闘うということに他ならない。これが正義だ。これが子や妻を愛し身をも犠牲にする行為だ。晴れた日には耕す鋤を休めて笑うことだ。昼飯を喰らい葡萄酒を呑むこと、それらだ。これが隣人に挨拶し無事を確かめ合う行為なのだ。

自分の為に、自分だけが生き残りたい欲望の為に。すべては生存を動機とする。奇妙奇態な様ではないか。なぜかと訊かれて答えられる者はどこにもいない。笑いたまえ、子爵。なぜそのように引き攣るのかね？」

普齊は憤怒を殺し、ようやく口を開く。

「伯爵、しかしながら、ただ、それを試すだけのために、そのような残虐な行為をなされたのですか」

煌めくように緩やかな笑みを浮べる。

「家族を炙り殺された男の件かね？ ああ、そのことか。

むろん、それもできないことではなかった。ただ偶々その一族は罰せられるべき罪人だった。一家で野盗事業を十数年に渡り営んでいたのだ。娘御らは有為の青年をたぶらかし、夢中にさせては金を巻き上げるか父親に襲わせるかしていた。親爺は金すなわち命だと思ふらしく此れを奪うときには必ずそれをも奪う男であつた。このような奴ばらを裁くは余りにあたりまえにすぎて興趣に缺けるものだ。いっそのこと無罪にしようかと思ひあぐねたぐらいだったよ、子爵」

「それにしても古代ならいざ知らず、現代的価値観からすれば余りに非人道的な刑罰で

はないでしょうか」

「他人の身体生命を重んじぬ者らの身体生命をどうして重んじてやる必要があるのかね。それ一方だけを守る義務がなぜ生じるのか。ならば死した者らはどうなるのかね。死んでしまえばもうどうでもよいのか。人間はその行為によつてのみ評価されるべきだよ。そうでなければ尊属殺しの私は人生の大きな楽しみを喪う。

もう一つ、君は現代的価値と言うが未だ古代ふうの処刑を行う土地は多い。他者の文化を一方的に断じる驕りこそジェノサイドではない。人肉食や首狩や捕鯨食であろうとそれがその文化圏で行われる限り一概に否定すべきでない。これらは人権にも等しいことだ。

愚かなことだよ。自由、平等。誰しも楽しい我が家で培った価値観を超えるのは生理に反するものだ。他人より家族が愛しい、その構造の一端が他者文化を批判することであるにすぎない。

楽しいことだよ、子爵。人間のこのような愚劣さを嘲笑することは。楽しいことばかりだがそれもそのはずだ。すべては生存を起源とするのだから。諸細胞の集積が做す物的現象にすぎぬのだから。笑うべき自己矛盾やら嘘やらを、人間気取りの澄まし顔をして平気で為すのも当然ではないか」

夜明けも近い頃、フランソワは立ち上がる。

物音がしたのだ。

廊下に出る。

イグレスィオスが顎を震わせ腰を抜かしていた。フランソワは察知する。この男は様子を見に来たのだ。彼が母を唆したのだ。自分を見上げる司祭の眼は違う人間を見る目であった。

「た」

ようやく声帯が音を発した。

「助けてくれえ、お、お願いだあ」

フランソワは目蓋を伏せた。様々な現象が夜空の星の数ほどもその眉間の真奥を過ぎった。睜（みひらく）。

自分のまなざしが氷よりも凍てついてきて、眼が極北の氷河の薄青へと変じていることがわかっていった。全身に青白いオーラが炎のように揺れながら霞のようにまとわりつ

いていることをも。

「司祭よ、それが貴様か。宗教家、魂を説く者、理想を掲げる者であつた貴様か。これが人間なのか。

浅ましい。

貴様は命乞いをするのか。そんなに生きたいのか。なぜ生きたいか、理由すら知らぬくせに。貴様のごとく神を奉る身でありながらも、恋々と生に執著するのか。信徒たちはお前の言葉を真摯に受けとめ遵守しているというのに。命などに惜しむ価値があるのか。惜しむ価値のあるなしを知らぬばかりか、もし生が無価値であつたと悟つても、貴様ら人間は生にしがみつくだらう。切斷されても鶏の脚が動くように。

イグレシオスよ、生きたいのか。いいだらう。愚かで惨めな生き物よ。生存の奴隷よ、自由意志のない生き方しか知らぬ者らよ。涎を垂らして生に執著する者らよ。僕は貴様らが下僕として生きることを赦す。

愚かな人間どもよ。貴様らに教えてやる。人間にとつて最善なこととは、この世に生まれて来ないことだつたと言ふことを。次に良いことは今すぐ死ぬこと……。ふ。その様子では、到底、その境地には立てまい。

さあ司祭よ、立つがよい。人間の終焉よ、これから僕が口述する奏上文を書きとめ、清書するんだ。爵位の継承を王に願ひ出る。嫡子は一人しかない。すなわち理を以て僕が統治するのだ」

フランソワは哄笑した。

第七章 湖上城の晩餐

「何てこつた。

いったい、どんだけ恐ろしげなんだ」

ユイゴード山を見上げて理愈がうめく。裂帛汰も眉を困らせ、うなずき、

「まったくくだな。この尖つた巨大な岩の集合体の一つ一つが凄まじく威嚇してくる。ここにいると、どうしようもない不安と恐怖を覚える」

「そうね」

さつきから、ずっとスケッチを続けているイサナコも、かすれた声で相槌を打つ。彼女のまなざしは生命のない非情をも肯おうと、無算の生命を描きとろうとしているかのよ

うだった。

心なしか皆の顔も引きつっている。修羅や龍や、天すらも、全身から闘気を発し、必死で抵抗している。無際限な、宇宙のような、畏怖すべき何かに。

一行はまるで葬列のようであった。それとも生贄に捧げられる悲哀に満ちた子牛だろうか。人間は応龍に乗り、天(神将)は龍馬を駆り、龍は地上すれすれを遊弋するように、修羅は早駆けして、険しく狭い斜面の道を登り始めた。まるで岩の亀裂のような道だ。

「近づけば近づくほど、(見上げているにもかかわらず)底の見えない巨大な大奈落を覗き見るような眩暈と、圧倒的に迫る巨魁な塊のもの凄い威圧を感じる」

龍咒さえつぶやく。

ユイゴード山は既にその姿を見せてから数時間が経とうとも、見る者を慣れさせない。尖った黒っぽい荒岩で、樹木はなく、静寂で、死そのものだ。

にもかかわらず、道は確かに峻しいが、真逆に何事も起こらなかった。

「少し日が傾いて来たねー。何だか不気味」

伊咄亜が言った。確かに日射は仄かな黄金色を孕み始めていた。蒔絵のように。

「何だろう。普通の夕暮れどきなのに。」

何だか、引き伸ばされたバイオリンの悲鳴のような、緊張感がある」

イサナコも双眸を傾く日差しに反射させて言う。龍咒はイユノを見ながら、

「で、まだついて来てるか」

イユノは愉快そうに微笑んだ。

「ええ。いるわ。デヴィル・アスタロテ。すっかり痛めつけられて弱っている。もう、ただの気力しかないわ」

アスタロテにつけられている。それも油断ならない、薄気味の悪いことだ。

余りに異様な緊張感から誰もが疲弊した。黄昏が深くなり、頂上近くになって、イユノが言った。

「さあ、見物よ。びつくりするわよ」

理愈が萎びた笑いで笑う、

「またあ、そんなにハードル上げてー。大丈夫かよ」

疲れ果てたモレイは間近に迫った頂を見上げながら、

「たぶん、驚くだけの体力がないかもな」

頂上に立つ。

唐突に、視界が大きく開ける。

広大な空間であつた。巨大なクレーターだ。向こうが見渡せない。そこに遙か彼方まで湖になっている。カルデラ湖だ。火山の噴火口にできる湖。

湖面もまた、遙か数百メートル下である。鏡のようにさざ波もない。

「異様だわ。何が異様なのか、うまく言えないけど、全てが死のように止まっている」
えれいんがうめくようにつぶやいた。

湖上の、恐らくは中央と思われる場所に、白亜の城が建っていた。そのシチュエーションはわずかにモンサンミッシェルを連想させる。水面に突き出た岩の上に立っているからだ。だが、全く似ていなかった。

皆が息を飲んだ。あれが神のごとく美しく絶大なる力を持つ大魔王の住む城。

尖った灰色の巖の島の延長のように、数十の尖塔が重なって、全体が天を突き刺す鋭い、長く細い剣のような城であつた。

「あれが湖上城よ。その名のとおりに」

指差してイユノがそう言う。伊咄亜は声を震わせる。

「凄い……」

なぜだかわからない、だが、とても恐ろしい光景に見えた。

「さすがだな。ぞつとする」

理愈の強がつた声も空々しい。アギトはユリアスに問うた。

「しかし、あそこまでどうやって行くのですか。応龍で飛ぶ？」

「見たまえ、アギト。もう迎えが来た」

突如、目の前に濛々たる黒煙が発し、その中から八枚の翼のついた龍馬と八枚の翼のついた黒漆塗りの戦車（チャリオット）が現れる。

チャリオットと言えば、古代エジプトなつては二人乗りだが、これは史上にない超大型で、十二人乗りであつた。十二台ある。馭者はいなかった。

早蕨が口笛を鳴らす。

「そういうことか。現象は常に唐突だ」

「理窟はチープだ。さあ、行こう」

龍咒が皆を促す。眷属たちも皆乗った。まるで空間を短縮したかのように城の広いテラスに着いていた。すっかり日は落ちて、皓々たる月が鏡のような湖を銀色に燦めかせる。音がない。静止の世界。不可思議な光景だ。

高く大きなアーチ形の入口がいくつもあった。扉はなく、羅紗のように薄いカーテンが風もないのに揺れている。何という無防備か。

「入りたまえ」

声だけがどこからともなく、空気に溶けるように反響した。ユリアスが皆を見廻し、「お許しが出たようですね」

「じゃ、行くか」

龍咒が言うと、早蕨も、

「そうだね」

ユリアス、龍咒、早蕨、アギト、理愈、玲央、裂帛汰、モレイ、イサナコ、えれいん、喩咽亜、伊咽亜、イユノ。その後、天、龍、修羅たちが続く。

カーテンをめくって入る。

広いエントランスであった。天井も恐ろしく高い。シャンデリアがいくつも蝋燭を灯していた。薄い明りはまるで陰影を作るためにあるようにすら見える。

「こちらへ来たまえ」

赤い絨毯の敷かれた部屋に入る。豪華絢爛だ。金と大理石。繻子張りの椅子やクッション。寄せ木細工の優美な曲線の箆笥など調度類。ペルシャ絨毯。

次の間には、銀製の楯や槍、鋼の刀剣、戦斧、鉄槌など、様々な武具が壁面に飾られた部屋であった。

「どれも由緒のあるものらしい」

モレイが言うと、理愈は、

「俺には、さっぱりわからん」

回廊を通り、ややねじれて美しい有機的な線を描く馬蹄形の階段があり、底を上げると、浮彫の精緻な櫨の大扉があった。金の金具がつく。

誰もせずとも開く。

厳粛で壮麗な大食堂であった。

長いテーブルには純白のクロスがかけられ、黄金の大燭台がならぶ。シャンデリアは暗鬱であった。純銀のフォーク、ナイフ、スプーンとそれらの置台。金の縁飾りに絡む銀の模様がクラシカルな白い皿の耀き。まばゆいナプキン。クリスタル・グラス。

全ては専門の調整師によって洗練された微妙な配置がなされ、何とも言えぬ繊細な美しさを醸す。

テーブルの一番奥、入口に向かい合うように、主人席にラグナレク伯爵が坐っていた。若く美しく、氷よりも冷厳なる真つ直ぐな長い白髪の男。白いシルクのローブを羽織っている。食事だというのに、手には白い手袋をしている。

ラグナレクの席の左右それぞれに百席ずつあった。いずれも背凭れせもたが高く、葡萄酒色のベルベットの張られた広くゆつたりとした肘掛椅子で、実際に坐ると、坐る者の体型に合わせて形を変えた。天や修羅はむろん、龍も楽に坐れた。不思議な光景であった。

「いゝりやは」

玲央が呻くように、誰にともなく問う。

席にはいない。ラグナレクが肅然と立ち上がり、

「ようこそ我が城へ。」

ささやかながら、晚餐の用意もある。美しき料理は真実、真理だ。真理は秘められているが明るみにされる。現象は秘匿を前提とする。

愚かな真実だ。翼があるように軽やかだ」

真紅のシルクにくるまれたシェリー酒の壇には翼があり、それぞれの席おの小さなグラスに芳醇なシェリーを注ぐ。又翼の生えた皿が各々眼の前の皿の上に着地し、見れば、冷製スープが微動もせずに澄まし顔。

ラグナレクは一同の驚嘆の表情を楽しげに見た。玲央は尋ねた。

「しかし、伯爵、いゝりやは、どこに」

緑のダイヤモンドのような香草サラダが給仕される。

「彼女が何処にと問うのか。」

全ての時空にと言おう」

玲央がテーブルを叩く。

「ふざけるな！」

そんな感情的な玲央を見るのは、アギトや龍児などの仲間でも初めてであった。

ラグナレクは冷然と笑む。

「彼女の魅力の本質に気がついていないようだ。」

君の愛はそのようなものだ。その程度と言つてもよい。愛は常に独善だ」

パステルのように鮮やかなテリーヌ・ド・パテなど前菜が麗々しく盛られて給仕される。ソースも絵のように美しい。

「いゝりやの最大最高最奥の真とは、あの掟えようのない双眸だろう。無数の青がブリリ

アンカットの一片一片を為すモザイクのようだが、そのモザイクは二次元的ではなく、重層をなし、立体的な三次元モザイク、いや、四次元モザイク、又は十次元的な、考え得る限りの凡て、有機的な、複雑精妙の全て、究竟の多様性は現実そのものであり、いかなる存在者であつてもそれを知るゆえに、誰にも知りようがない、知り方がないものを為す」

小盛の魚介類の Pasta に、鮮やかな温野菜を添えた白身魚のポワレ。

「そのブリリアントカットの燦めきの射抜きと透明度・純粋度は究竟をも超越する。水深数千メートルの水底の砂利の表面までもが鮮明に晰らかな睿らかさで現物以上に緻密な解像度で見ることが出来るほどの透明度の水に等しい。

純粹透明であつて、一切であるとも言える。何者とも比較できない。最も神聖で崇高、究極、何もかもでもあると。誰もが知り、誰にも知り得ない。何もかもが、それそのものだ。

これは、一定の真理ではない。

それがいりやの双眸だ」

やがて給仕されたのは、肉料理。メインディッシュだ。ぶ厚くも柔らかいジューシーなフイレ・ステーキとフォアグラとトリュフの三層構造建築。愛と真実と正義。

「さて、血肉が給されたが、諸君。兼ね兼ね懸案の事項に就いて言及する時が来たようだ。そう、心配には及ばない。

いりやは、ほら、あそこに」

彼の指差す方を見遣れば、燦めく霞のような、霓色の薄絹をまとい、大輪の薔薇の冠を被つて、アルファベットの「I」を装飾化した一柱の架に、金糸の縄で麗々しく、生贄のように結びつけられ、意識が朦朧となつているいりやがいた。残酷でありながら、優しさや同情や憐憫などの地上的な価値を超えた神々しい、超越的な美しさがあつて、荘厳、厳肅ですらあつた。

「いりや！」

当然であろう、友人らは誰も声を挙げた。

「真理の完成だ」

伯爵は輝かしい微笑を泛べて言つた。さらに続けて、

「これで十一次元時空の無数の宇宙と、その他一切の全てが解決する。十全となる。完結する。希う望みの渴きを涵す。^{ひた}到達する。これですべては用がなくなる。充たされた静寂。

死だ。無余依涅槃よ」

玲央は走り寄ろうと立ち上がる。だが、彼の時間は静止し、運動が不可能になった。芳醇なチーズが給仕される中、イユノが苛立たしげに指でテーブルを叩く。

「で？　どうする気なの？　彼女にご飯も食べさせないつもり？」

死の伯爵は贅沢な微笑を泛べる。

「それが何か。自然は、いつも理不尽だ。人はいつになったら、現実主義になるのか。彼女は自然の美そのものだ。美という本質の根源でもある。

諸君らは心配やら憤りを抱きつつ、嗟嘆し、ここで食事をする。

まるで、日常の生活のようだ」

イユノはそれに応え、

「そうね。だから、普通に助けに行くことは正しい」

すると、玲央は動くことができるようになった。アギトも理愈も裂帛汰もえれいんもモレイも立ち上がる。走り寄る。

「ふふ」

伯爵は最前から独り喉を潤していた血のような葡萄酒の杯を傾け、不敵な笑みを泛べる。

「よろしい。

では、エレクシーネを助けて進ぜよう。相変わらず塔に封ぜられている。死が彼女を現世の呪縛から解放するであろう」

「え、それでは！」

敢えて席を立たなかった龍咒がそう言った。

「むろん、そういうことだ。

人にとって最善の選択は生まれてこないこと、次善は今すぐに死ぬことだ。森の賢人ケンタウルの言葉にもあるとおり」

玲央の双眸が強く輝き、ラグナレクをにらんだ。

「いりやの行為は無駄だった。いりやはお前に騙された」

伯爵は欣然と優美に、まるで贅沢なお世辞でも言ったかのような微笑を泛べ、

「無駄？　では、意義あるとは、何か。意味とは、何か。

君は実に楽しいことを言う。

もはや虚しい過去の遺物。むろん、それも一つの現実。一つの戯れだ。それがゲームの性質 (The nature of my game) なのぢ」

パテシエの作る芸術的なデザートと香り高く濃厚なコーヒー。伯爵は啜る。

「さて。

胡蝶の夢を諸君らに観てもらうこととなる。この世がいかにラビリントス（両刃の斧。迷宮。迷宮は迷路と異なり、一本の道で、区域内のすべてを網羅して踏破する構造になっている）な戯れであるか。自らの尾を咬む原蛇だ」
ウロボロス

豪奢な笑みを泛べる。

「タブラ・ラーサで答を得たつもりになっているな。タブラ・ラーサは確かに真理だ。どこの世界でも通用する一般真理だ。あらゆる次元を貫く普遍だ。

しかし、真理には一般の他に、特殊というものがある。それが生じる機きは説明がない。唐突だ。人によつては、一般真理がその世界に感応して、固有に成立しているのが、個別に存在する特殊真理である、と言う者もいるが。

ふ。

いずれにせよ、タブラ・ラーサは、君らの世界の固有の真理ではない。一般真理だ。君らの世界に固有真理、つまり、特殊真理は」

誰もが息を呑んだ。

指を鳴らした。

「もう一度、事象に還れ」

現象の紐が解けて緩解する。緩解し、電の雫になって燦めき、再び行（構成力）によって再構築される渦のさなかに、ラグナレクの声が残響のように溶けて消える。それは次のような言葉であった。

「君らの至宝は私が、いかなる概念も及ばない、然るべき場所に秘匿しておこう」

塔を訪れる者がいた。豪奢な龍車でマントを翻す。門衛を平伏させた。階段を上がると、牢番が震えながら扉を開ける。睥睨の眼で高貴な男はつかつかと入った。

「変わり果てたものよ、エレクトシーネ。かつての皇帝。生ける怨霊」

奥に坐して、真つ赤なものの凄じ眼で凝視している。

「お前は。シルヴィエの大枢機卿が何の用だ」

生きて怨霊と化した者を懼れるふうもなく、イヴィルは微笑した。

「ふ。

救いをもたらしに来たのだ」

「救いだ」と

「あゝ、そのとおりだ。永遠の救いだ」

エレクシーネの眼の前に、腐敗して殆ど頭蓋骨となった人間の首から上、頭部を置いた。

「あゝ、それは」

見紛うこともない、母が生前していた冠だ。棺から奪い去られたのか。

「ふん！」

枢機卿は剣で縦に裂いて粉碎した。

「あ、ああ、母上、ああああああーっ！ き、貴様ーっ！」

意に介さずイヴィルは再び振りかぶり、「世を恨むがいい。この理不尽な世界を」
そう言つて、凄まじい憤怒憎悪に歪み裂けた女帝の顔に再び剣を振るい、刎ねた。

第三部 真の悲劇

第一章 八角堂 金庫に戻る試験問題

「いりや、いりや！」

玲央の悲痛な叫び。アギトは意識を取り戻す。

裂帛汰は首を振って靄を振り払い、辺りを見回した。えれいんも理解できずに、

「あれー、ここは」

「うう、そんなバカな」

アギトの呻き。振出しに戻るとは、このことだ。そこは八角堂であつた。モレイも、
「まったくだ。双六じゃあるまいし」

「ま、人生なんてそんなものよ。なあ、アギト」

「それが十七歳のセリフかよ、理愈」

「そんなことはどうでもいいから、いりやは本当にいないのか。他は全貰いるか」

龍咒がそう尋ねた。イユノが周囲を見もせずに応えて、

「どうやら、いりや以外はいるようね。いや、ユリアスもないわね。まあ、彼はもと
もと向こうの人間だから。事象に還るべき対象者にならないわけよね。」

さて、どうやって救出したらいいかなあ」

ヤレヤレという顔で早蕨が立ち上がる。

「じゃ、ともかく、また行くか」

「それもそうだが、俺とお前で、まずは試験問題を隆臥先輩に返そう」

龍咒と早蕨は高等学校に向かった。

あとの者たちは八角堂の外に出て、軒下から雨を眺めた。彼らは自分たちの現実に戻つてきたのである。

玲央が激しく訴えた。

「こんなことをしている場合じゃない。僕は独りでも行く」

「まあ、待てよ」

理愈が肩をつかむも振り切つて、

「いやだ」

「おい」

裂帛汰も立ちほだかる。

「どいてくれ」

双眼が執炎で鬼神の眼になっている。

「待って、玲央、いつもの穏やかで繊細なあなたを見失っているわ」

そんなイサナコの制止も振り切り、玲央は魔法陣の前に立つも、

「う、できない」

初めから承知していた顔で、イユノが、

「そうよ。閉鎖されているわ。別の方法じゃないと入れない」

「教えてくれ、イユノ」

「恋愛で現実が見えなくなった人間には理解できないわ」

「そんなバカな。以前、入ったし」

「やり方が変わったって言ったでしょう」

「現実は見えている。何をしようとしているかも、わかっている」

「あなたの魂の希いは、いぬりやと幸せになることですよ。それがあなたの現実よ。あなたの行為はあなたの現実に異変しているわ」

神の眼光に玲央の理性が呼び覚まされ、彼はうなだれてしまった。

「じゃ、どうすりゃいいんだ」

「それを考えるのよ」

「ラグナレクは、どうやって僕らをここに送り返したんだろう」

アギトは疑問を呈したが、モレイは、

「現象の緩解と再構築だよ。つまり、僕らは移動してはいない。解釈が変わったんだ。現実とは投企だ。こちら側から、無色の現実を企画を投じて彩色している。その色が変われば、違う現実になる。そういうことさ、それだけさ。」

魔法陣は、それを誘発した契機に過ぎない」

さらにイユノが、

「それにさー、戻ったからって、そこにいるとは限らないよ。ラグナレクの最後の言葉を思慮しなさいってば。」

さっきまでいた世界がラグナレクの言葉に当てはまるかどうか、根拠ある？ 戻ってもしないかもよ。

戻ることが目的じゃないでしょ。いぬりやのいる場所に行くのが目的じゃないの」
アギトもうなずき、

「それもそうだね。『君らの至宝は私が、いかなる概念も及ばない、然るべき場所に秘匿しておこう』と言っていた。

至宝とは、きっと僕らの世界の特殊真理のことだろうね」

モレイも、

「そして、それはいぬりやのことか。

うむ。『いかなる概念も及ばない場所』は何となく理解できるが、『然るべき場所』とは、どこだろう。

あるべき場所ってことだよな。至宝のあるべき場所。特殊真理のあるべき場所……どこだろうか」

イサナコが腕を組む。

「もつと精密に分析した方がいいんじゃない？ 『事象に還れ！』と言っていた意味も考えた方がいいと思う」

ウイも掌を顎に当てて、

「『秘匿する』とも言っていたよね。

どういうことかしらね。なぜ、秘匿するのかしら。この場合の『秘匿』って、何かしら」
誰も何も言えなかった。

嗟嘆しつつ、龍児と早蕨の後姿を遠くに見送りながら（遠くは、なぜ、おぼろ朧な夢のように見えるのだろう）、アギトは喩咽亜に嘆いて見せた。

「さつきまで命懸けで闘っていた。リアルだった。こうなるともう、どっちが現実だかわからない。

胡蝶の夢の喩えも、本当にリアルに感じるよ」

「そうね」

喩咽亜は少しどぎまぎしながら、少しも緊張のないアギトを恨めしくも思った。

無頓着に純粹に、伊咽亜もつぶやく。

「あーあ、ほんと。現実って、何だろー。何で決まるんだろお」

理愈は何か気の利いた、哲学的なことを言おうとするが、思いつかない。哲学の発祥も、奥底にはこんな動機が潜んでいるものなのかもしれない。

そんなこんな恋愛模様など気がつかないモレイは淡々と語り始める。

「現実是客户的な（非情な）ものというが」

ドフトエフスキーの小説にしか出て来ないような長台詞であったため、要旨のみを限定的に記載すると、こんな感じ、

「人は客観性に真実を感じる性質がある。自分が恣意的に左右できないものを事実と感じる。自分を超えたもの、自分の思惟の俎上に載せられないものを欣求する。空というものに魅力を感じるゆえんである。我々はいかに工夫して思考を凝らしても、空や無を特定の何かとして俎上に載せてしまう。そういうふうにしかな概念と言うか、意識が成立し得ないからである。

何ものでもない、という定義すら自己矛盾である。それがなぜ自己矛盾であるかと言えば、それも論理という思考方法の定義によって決まるのであるが、論理は証明されたことがない。だが、証明されたことがないからけしからん、というのも論理的思考法である。

また同時に、こうやって批判しながら、自己超越を試みるのも、客観への志向である。

だが、客観性が正しい、真実である、という証明もないし、だいたい「証明」とやらは妥当なのか正しいのか、しかも、正しいとか真実とかいう定義にも証明も説明も皆無、という相互補助的な矛盾。

こういう批判自体も又、論理であるからして云々^{うんぬん}と。

イサナコは言った。

「莊子の中に『明を以てす』という言葉があるけど、経緯も根拠も理由もはっきりしない、唐突でしかない意識、認識作用によって、万象を了解する方法を排し、彼（莊子）ふうに言えば、混沌を混沌のままに、胡蝶も莊周もなく、『道』^{タオ}のままに（分別認知ではなく）生きることを意味しているわ。

認識を解体し、真知である『明』に立てと言っているのよね。

でも、それも混沌と分別とを、分別する分別知だし、そういう論の進め方も、経緯も根拠もない唐突な、論理的思考、考概よね。じゃ、どうすりゃあ、いいかって訊かれても、やりようもやり方もない。放置しかない。そのまま生きるしかない。

どこにも到達できないのよ」

アギトが、

「それって、いかなる概念も及ばない場所に繋がらないかな」

「繋がると言えば、繋がりそうだが」

理愈も頭をかしげる。

裂帛汰は野性的な感覚で言う、

「ともかくも、とてもかくても、不思議な感覚だ。当り前なことなのに、違和感がある。全然、何も変わっていない不可思議さっていうのか」

そうでもなかった。

龍咒と早蕨が戻って来たとき、二人の表情はとても堅いものだった。アギトがそれを見て、

「試験問題のことで何か不都合でも」

早蕨が肩をすくめた。龍咒は歎息し、

「学園内はオークやゴブリンの巣窟となっている。奴らの狙いが試験問題にあるとすれば、返してよいものかどうか定かではない」

「ええ！」

皆が驚く。

イユノは腕を組んだ。

「やるかも、とは思っていたけど、まさかやるとはね」

「どういうことなの？」

ウイが訊いた。

「物化さ」

龍咒が代わって応えた。

「物化！」

えれいんと裂帛汰が声を合わせてうめく。

イユノが淡々と応えた。

「そうよ、街路樹は街路樹だけど、解釈を変えれば、オークやゴブリンなのよ。全てはタブラ・ラーサ。存在は純粋な白紙。モレイが言ったとおりよ。」

諸概念や現象は色彩。彩色はア・プリオリに概ね行われる。彩色は、つまり、先天的な解釈。全ては解釈に過ぎないから」

アギトはうなずきながらも、龍咒に訊く。

「じゃ、白紙はそのまま持ち帰って来たんですね」

「そんなところだ」

八角堂を出ると、変わらず雨が降っていた。全ては変わっていないように見えた。

「ああ」

むろん、そうではなかった。

信じ難い光景だった。雨に濡れる木々の緑の潤いは、日常の静寂なのに。

大路の方を見遣れば、威風堂々たる幻想の軍が、何十万という軍隊が行進している。示威活動だ。軍事パレードのようであった。見紛うこともない。醜怪な怪物ども、オークやゴブリン、トロールだ。

「何てこったい」

理愈がうめく。

いく人かで八角堂の外へ出てみた。

あふれる醜怪な軍隊。濁った黒い塊に見える。異臭を放ち。

獰猛な獣の咆哮や奇声、赤く濁った殺戮のまなざし。

アギトはムソルグスキーの『禿山の一夜』を思い出した。続々とあふれ出て来る怪異ども。

「いったい、どういうことだ。何をしに来たのか」

理愈が声を上げた。

「どんどん増えている。見てみろよ、標識が揺れている。あゝ、形を変えているぞ。ほら、ゴブリンになった！」

「あつちを見ろよ。樹皮が剥がれながらオークに成っている！」

逃げ惑う学生らや教師らや外来者すらも、叫びとともに、突如、瘤のように肉が盛り上がって服が破れ、オークと化すのであった。

無様な甲冑を着たオークが騎馬の手綱を握り、敷地を縦横に走る。学園内はパニックだ。大学の各所は既に占拠されているようだ。生徒や職員が教室などに監禁されているのではないか。

アギトは呼吸を正し、精神統一を始めた。理愈も印契を結ぶ。

筋肉から気迫の焰が上がった。焰が鎧となる。

「待て、今は戦うな、理愈、アギト、モレイ、裂帛汰。態勢を立て直そう。無駄に戦っても、何の役にも立たない」

アギトと理愈たちをそう言うて制してから、龍咒は、

「さて、どうするか」

イユノは言った。

「最も堅固な場所に隠れるしかないわ」

龍咒すらも眉を顰め、訝しげな表情となる。

「どこだ、それは」

「最も守護されるべきは知だわ。」

知の殿堂こそ、実は最も堅固な施設なのよ。砦のようにね」

アギトが呻くように言う、

「大図書館か」

早蕨も理解し、

「では、一度、八角堂に戻ろう」

玲央や喩咽亜たちが待っていた。

「そうなの？ 聞いたことないけど」

「ともかく、一刻を争う」

アギトが言うと、喩咽亜は少し眼を伏せる。なぜかはわからない。それを見て、逡巡しているかのように思った伊咽亜が、

「お姉ちゃん、信じて行こうよ。ここまで来たのに。一緒に」

信じてるわよ。そう心の中で思ったが、何も言わずにうなずいた。

「じゃ、俺が先頭に行く。最後はイユノに頼む。すまないが」

「わかってるわよ」

「図書館までは大した距離ではないが、それでも道程は五百メートルくらいあるし、大路は通れないので植え込みをかき分けて進むし、傘も差せないし、それなりの覚悟はしてくれ」

龍咒が八角堂の扉を開けて周囲の様子を確認する。一分と少しだったが、相当長く感じられたし、実際、入念に確認した。

龍咒が身を低くして滑るように素早く外へ出ると、その後にアギトが続いた。その後、は、モレイ、早蕨、イサナコ、玲央、ウイ、えれいん、裂帛汰、伊咽亜、喩咽亜、理訥、イユノ。

龍咒は雨や泥にまみれ、小枝に頬を搔かれながらも、植え込みをかき分け、素早くも実に慎重にルートを選択し、繊細に動いた。何度か、鼻をヒクヒクさせて臭いを嗅ぐオーク

が近くまで寄って来たが、そのたびに、後ろを振り返り、「しつ、止まれ！」と小声で鋭くささやく。身を伏せて、どうにかやり過ごすか、音を立てずに斃した。

アギトとモレイは先頭部の戦闘要員だった。一瞬も緊張を緩められない。五つの感覚と第六感を常に研ぎ澄ませ、周囲の情報を奪取していた。

早蕨とイサナコはアギトとモレイを補佐する形で周囲を警戒した。玲央はその後にくウイをかばい、えれいんも又、

「ウイちゃん、大丈夫？」

などと気遣った。靴はもう水浸しだ。

裂帛汰は中間の要として、周囲の状況把握と戦闘態勢を常に維持することに専念した。その後に続く伊咄亜、喩咄亜を護るのが、理兪とイユノ。

「大丈夫、こつちだ。さあ、気をつけて」

役割は、その後ろの理兪も同じだ。「よし、よし」

続く玲央はいりやを護ることを使命とし、最後尾のイユノがいりやを重点として全体の守護に努めた。ときどきスマホで連絡する。

「イユノよ、こつちはついて来てるから、心配しないで」

龍咒たちは隠れながら、身を低くして、何度も見つかりそうになりつつも、どうにか大図書館を目前にした。

だが、すぐに巖に身を隠した。大図書館の周囲はオークや트롤だらけだった。まだ占拠されていないようであったが、時間の問題だろう。

「さて、どうやって中に入るか」

龍咒が思索した。

「遊撃してはどうか」

モレイが言う。アギトも、

「ここは図書館の北側に位置する。僕が東を廻って、南側で攪乱するから、その隙に、館内に入ってください」

早蕨、イサナコ、ウイ、玲央も追いついてきた。

ウイが言う、

「西風が、大地の気を微妙に揺るがせています。西側に廻った方がいいでしょう。気が革まっついて、澱みが好きなオークたちは力が出しにくいはず。逆に東側は澱んでいます」

えれいん、裂帛汰、伊昶亜、喩昶亜、理愈も来た。

「じゃ、僕と理愈でまず南を攻めて、東へ回り、さらに南東の方角へ、なるべく館から離れるように戦う。モレイと裂帛汰は西側の連中が僕らを追って廻って来るのを同じく南東へ追いやってくれ。」

その隙に、龍咒先輩たちは西側を突破して館内に入ってください」

イユノが来たのを確認すると、龍咒は、

「わかった。それで行くう」

アギトと理愈は飛び出す。

「それ、おい、こつちだぞ」

アギトが剣を抜き、西側に声を掛けながら、南側のオークたちを次々と薙ぎ斃す。葦を斃す大風のように。

「おらおらおら」

理愈が東側に廻る。

「うわおおおお」

大きな方向とともに棍棒を持った巨軀のトロールが現れた。アギトが、

「僕がやる」

振り下ろされた棍棒を遡ってトロールの頭頂に乗り、剣を深く刺す。悲痛な絶叫とともに斃れるトロール。もう残酷とは思わない。大自然と呼吸が一つになったからだ。獅子は良心の疚しさを想うか。雷は憐憫の情を抱くか。

「よし、アギト、西側の奴らも来た」

そのタイミングで、モレイと裂帛汰が飛び出し、剣を振るう。

西側はがら空きた。

龍咒が先頭で西側へ。伊昶亜、喩昶亜、早蕨が出る。

「あ、しまった！」

そこへ現れた黒い存在者は、

「愚か者め、そのような小細工、見抜けぬと思うか」

「デヴィル・アスタロテ！」

悪魔が長い尾を鞭のように振るう。

「あぐっ」

龍咒が弾き飛ばされ、昏倒する。

「くっそう」

早蕨が懸命に剣を振るも、空を切り、虚しく悪魔の手で払い落とされた。

イユノがそこへ来た。

「さあ、地獄のストーカーちゃん、観念しな」

凄まじい霹靂とともに、五色の雲を伴う虹色の炎が稲妻のようにジグザグに落ちる。

「ふん」

アスタロテは巨大なコウモリの翼でシールドを作り、耐える。イユノが円を描くように手を振り放くと、七色の光の剣が現れた。

「あたしと勝負する気？」

その全身から激しいオーラが立ち上る。それは憤怒するイシユラル神の形となった。その勢いにイユノが立っている場所の半径十メートルが深くえぐり削られた。空間が歪む。樹木が倒れた。枝や土の落下速度が遅く、曲がって落ちるように見える。

時空が炎と化したかのようにだ。

「ちっ」

アスタロテは印契を組み、咒を唱える。詠唱を追えると、

「永劫の氷よ、絶対零度よ、非業なる死、非情なる大自然よ、永遠に聳える氷壁よ」

大氷河が突如、盛り上がり、現れる。どんどん膨張する。

イユノは動じない。七色の剣はさらに複雑な様相を呈する。

「現象に過ぎない」

剣は終に透明になった。無空の剣。

「あつ」

透明な剣は潮となつて凡てに浸透する。そのものとなる。氷河は増殖を止めた。

哄笑するイユノ。

「あはは、勝負は決まったわね。

恨みは固執するから無限ではないわ。かろらかな心の自由には勝てないのよ」

黒い悪魔は剛毛を逆立てて、真つ赤な眼を燃え滾らせ、険しい表情で歯噛みし、憤怒の唸りを上げる。

「ううぬぬ。だが、無空になれるものなどあるうか。無は存在しない。存在しないことが無の存在証明だ。ならば、無は存在か。つまり、それすらも無ではない、ないと言えるものは」

イユノが欣然と微笑む。

「だから、あたしが勝ったのよ。」

自由の勝利よ」

それに思い当たって悪魔は蒼白をなし、崩壊を感じたが、押しとどまった。

「うんぬうんぬ。だが、誰が成せよう」

「誰でも成しているわ。ルシアも」

悪魔は遂に絶叫した。そして、その悲痛な叫びの後、激しくイユノを呪い、

「覚えている」

と、それだけ言って物凄い勢いで去って行った。

イユノは、

「さあ、龍咒を起こして。行くわよ」

早蕨は西側の窓から龍咒を抱えるように入り、中の様子を窺う。大丈夫だ。そう見えた。

「よし、入っていいぞ」

喩呬亜が伊呬亜の手を引いて入る。いりやの後からイユノが入った。外を警戒しつつ。

「さあ、セキュリティを動かすわよ」

いつも司書の坐るカウンターへ行つて、龍の浮彫のある蓋を外し、スイッチを入れる。

「西の窓だけ残しておくわ」

大きな鉄の鎧戸が落ち、高窓を閉鎖する。入口も閉ざされる。扉や鎧戸には、聖句に囲まれた聖なる象徴が浮き彫られていた。神威を発す。

その頃、アギトらは大乱戦。理愈が、

「よし、モレイと裂帛汰は撤収しろ」

「わかった」

引き上げようとするモレイと裂帛汰を追うオークを蹴散らし、

「さて、どうするか、アギト」

「このまま、同時で」

「本当だな、わざと遅れるなよ」

「わかった。ばれる嘘は吐かない」

「じゃ、西側窓まで競争だ、それ！」

二人が入ると、数匹のオークも一緒に入ってきたが、たちまち退治される。

シールドは完璧になった。

覗き窓からそっと覗くと、一丈四方以上もある方丈の旗が掲げられ、上皇の紋が。壮麗な鎧兜で威丈高に上位の将校が叫ぶ。

「いりやを差し出せ」

それに呼応するかのよう、敵勢の氣勢が上がる。

「ついに上皇軍も来たか」

モレイがつぶやくようにそう言つて、唇を結ぶ。

理愈が憎々しげに舌打ちした。

「奴ら、俺たちがいりやを秘匿していると思つているようだな」

玲央が歯噛みする。

「なぜ上皇軍までもが……いりやを」

モレイがそんなこともわからないのかと蔑み気味の冷静さで言う、

「イヴィルとやらの差し金だろうね」

試験問題から始まった話が、特殊真理の守護に変わった。

いりやを死守せよ。なぜ。

誰もが無条件に知つているようなこと・ものには、知り方がない。

第三章 城砦

尖塔に上つて全体を見ることにした。見たこともない凄い光景だった。

「信じられない。いったい、どれくらいいるんだ」

「物凄い数のオーク、ゴブリン、トロール……」

しかし。

「待つて」

イユノが言った。

「今、何となくわかつたのよ」

優雅に神秘的に指を、光をこぼしながら動かし、印契を做し、真咒を詠唱する。まるで二重露出のように、図書館閲覧室に八角堂が現象し、八角堂は湖上の城と重なる。壮麗に聳える湖上城が小さな八角堂と重なることに、何ら矛盾はなかった。全てが現実であった。

イユノ以外は誰もが驚いた。

「俺たち今もいるのか、ずっと前から、あそこにいたのか」
理兪がうめく。

「そういうことらしいな。場所なんてないようなものなんだな」
「逝くことはできないのか」

玲央が訊く。

イユノが振り向かず言う、

「ムリね。

あなたたち、いりやの秘匿された場所を考えたの？」

「むろん、考えたさ」

「で？」

「いや、わからないよ。なあ」

「いかなる概念も及ばない場所、それは全てだわ」

「うん」

「然るべき場所、それは秘匿にふさわしい場所、それも全てだわ」

「何のヒントにもなっていない」

「ラグナレクはヒントだなんて一言も言っていないわ」

「うっ」

「臆見ね。ドクサよ」

「じゃ、どうにもならないじゃないか」

「だから、こうよ」

霧が霽れるように、二重露出が払拭される。

そこは熱砂の沙漠だった。

「ここは、どこなんだ」

「存在しないナミブ砂漠よ。ナミブの本質（アイデア）」

「何だ、それ」

「存在しないナミブ砂漠って」

「ナミブって実在する砂漠だよな」

「眞神族のルーツとも言うべき場所」

「真理の源か」

「古典の中に、そういう言葉があったな」

涯しない、遥かなる、熱砂の茜の沙漠。空間は何処までも透明で、無際限に寂莫としている。永遠の絶望のような紺碧の天穹。

大きな砂岩が重なっていた。人の字型に、斜めに傾いて寄り添うように重なっていて、切妻屋根に似ていた。

「最古の聖者が籠もった庵だわ。後に祠になった」

イユノがその間の空洞に入って行く。

龍咒、アギト、理愈、モレイ、裂帛汰、早蕨が続く。えれいん、イサナコ、喩咽亜、伊咽亜、ウイ、玲央がさらに追う。

石でできた小さな祠があった。古の修道僧の質素な庵にも見えた。扉を開ける。

いりやががいる。意識を失っているが、呼吸はあった。玲央がいきなり飛び込む。

「待つて。さわらないで。あたしが先に診るわ」

イユノがそう言った。

早蕨が肩をすくめる。

「いったい、どうして」

龍咒が皮肉な笑みを泛べ、

「これが唐突ということか。思議不能で、甚深微妙な機はたらき、心機か。特殊真理ということか」

イユノが光の手を翳し、いりやが意識を取り戻す。まばゆい双眸が啓く。白晢の頬に微かな薔薇が差す。

「あゝ、みんな無事だったのね。よかった。ごめんなさい」

玲央がその傍らに跪く。涙を零し。

「あゝ、よかった。いりや」

一同安堵したものの、

「しかし、ラグナレクはどうしてこんなに簡単に手放すんだ？」

理愈が疑問を呈す。イユノは一笑に附し、

「まだわかってないのね。手放してなんかないわ。カタチなんか、分別なんか、無意味

ですらないわ。だから、存在なのよ」

「だったら、そもそも、彼女を略奪したことに意味がない」

「でも、世界中で、それらは（そういうことじゃなくても、さまざまなことが）起こっている、それが世界だわ」

皆がいぬりやの無事を喜んだ。

だが、イユノの顔色が急に暗澹とした翳りに変じた。

「大事なことを忘れていたわ。これも運命かもね。」

もしかしたら、この魑魅魍魎の大噴出事件の源泉は、そこかもしれない。憎悪、恨み、悲憤、凄まじい破壊力を持つ暗黒の力よ。

ああ、何て残酷な。彼女はのために利用されたんだわ。イヴィル、赦せない」

理愈が訝しげに、

「何だよ」

と言うも、龍咒が、

「そうか、そういうことか。あゝ、何ということだ！　しまった」

アギトも、

「まさか。そんなことって。あまりにも残酷過ぎる……」

しかし、モレイは首を振り、

「だが、そのまさかだろうな」

伊咽亜が頭を傾げ、

「え、何？」

早蕨もようやく気がついて、

「そうだったのか」

喩咽亜が、

「じゃ、もしかして、女帝は」

龍咒は、

「最悪、薨去しているかもしれない」

イユノもうなずく。

「たぶんね。」

確かに生霊も恐ろしいけど、これって生霊のレベルではない。

完全に肉体や理性から解放された怨念のパワーだわ」

龍咒は席を立つ。

「もはや、一刻の猶予もならない。

ともかく、逝くべきだが、イユノ、どうやったら、リアル・ワールドに戻れるだろうか」

イユノは思案するように腕を組むが、

「同じことよ。

いりやがここにいて、あたしたちがあそこにいちゃいけない理由はないのよ」

アギトが憂鬱な、思案の表情で問う、

「一般真理として、それはわかるけど、実際、僕らはそこにいないし、これって、いったい、どうしたらいいんだろう」

イユノは眼を伏せて、

「ま、そういうことなのよね」

皆が行こうとするとき、アギトは留まりたいと言った。

「先に行ってくれ。

僕は少し、なぜだかはつきり言えないけど、ここに留まりたい」

皆が去った後、彼は独り聖地で坐禅を組んだ。甚深なる瞑想に入る。深般若波羅蜜多行を行ずる。五蘊は皆空であると照見する。

印契を結ぶ。

唵薩縛怛他蘂多塢瑟拏沙

馱都畝陀羅拏薩嚩怛他蘂

單沙馱靚尾補悉多地瑟知底

芍呬鑠斛呬呬娑婆訶

オンサラバータターガターウシユニシャー

ダトムドラニサラバータターガ

タンサダトービプシュタージシツチテイ

ジャクウンバンコクウンウンソワカ

馱都根本陀羅尼である。

まるで刺青のように美しく青い龍神の文様が全身に泛び上がる。その文様は平面的と言うよりは重層的で、さまざまな青を湛え、どこかいりやの双眸に似ていた。

疫病が蔓延した。皮膚が黒ずんだかと思うと、肉が腐って落ちた。やがて鼻から脳髓を零して死する。怖ろしい致死の病であった。庶民も富裕層も軍人も貴族も王族も次々と斃れた。

「女帝の呪いだ」

誰ともなく言い始めると、たちまちそのうわさが世間を席卷した。

なぜなら、疫病の流行る前、上皇の朝見の大広間に百官が集うとき、天窓を破って雷が落ち、十一人も高官が焼け焦げて死んだ。すべて女帝の遠流に関わった者たちであった。女帝の死の知らせが届いたころである。

しかも、病は或る日をきっかけに突如、広がり、爆発的に蔓延したのである。その前日まで一人もいなかったのに、その日に数千人が罹病した。

まさにそれが女帝の死の日だったのである。

帝都は恐慌した。

全ての教会は祈り、神官は斎奉り、僧侶は加持祈祷した。

上皇は人と接するを恐れ、食事を運ばせる以外近づけない。震えて日々を過ごした。「怨霊だ」。

死して肉体を離れた、憤りが、憎しみが、恨みが自由を得て、世間を蔽っているんだ！」

ストークインは両手で顔を覆った。

災いはこれで終わらない。

何ということであろうか。どこから現れたのか、魍魎魍魎の類が各地に大軍をなして略奪、殺戮を始めた。

数千万、いや、数億という、人類がかつて見たこともないような、途方もない大軍が大地を蔽う。山も谷を蔽って、もはや、地の利を生かしたどのような戦略もあり得ない。

ゴキブリのように黒く全てを埋め尽くし、獣の咆哮で怒号するオークやゴブリンやトロールの史上空前の大軍団であった。

数は有無を言わさぬ圧倒的な物的力である。理は消し飛ぶ。非情な事実しかない。

大軍団長ワーグルは突然変異的に巨大化したオークで、巨躯のトロールほどではなくも、3メートルを超える身の丈であった。五つの鎧を繋いだ鎧と戦象用の兜を被り、巨体

よりも大きな斧を持つ。

「皆殺しだ。」

人間を一人も生かすな」

殺戮に満ちたまなざしで言う。

上皇は恐怖のため、宮殿から出て来ない。

勇気ある将軍や将兵たちが半ば自主的に立ち上がった。その数は疫病のせいで多くはない。しかし、崇高な使命感に充ちていた。

帝国軍は絶望的な戦いに出立する。

兵士の中には、ジヴィーノやシド・クロヴィスもいた。

「やあやあ、武者震いがするぜ。やっと、相応しい死に場所が見つかったわい」

ジヴィーノがぶ厚い金属の楯を拳でバンバン殴って昂ぶる。

「おお、腕が疼いてしまったねえ。」

片っ端からぶっ殺してやるぜ、クズども」

シドも喚く。

「ううらあああああああああああーっ！」

戦いが始まった。

「さあさあ、我こそは」

騎乗のサムライたちは皆名乗りを上げて敵にぶつかる。

一万対数億の、それは凄惨な戦いであつた。

砦はあつという間に群がるオークの兵たちで黒く覆われた。城壁に這い登り、上からどんなに攻撃してもあまりの数で、防ぎきれず、乗り越えられてしまう。たちまち殺戮、屍骸の山、壁を壊す。怒濤のように侵入する。十の砦、二十の砦は一時間もしないうちに瓦礫と化する。

イユノは言った。

図書館の広大な閲覧室のまんなかだ。外ではオークや트롤ルが鎧戸や扉や壁までも打ち破ろうと、激しく叩く音がしている。

「あたしが逝くのはできるのよ。」

結局、逝くつてことはさあ、自分で逝くしかないのよ。最初に入ったときは魔法陣を使

ったけど、あれも魔法陣や咒や印契は心の機きを促すもの、契機に過ぎないのよ。
ただし、心って言っても、心情や想いや意識じゃなわ。

言わば、世界そのものね。現実自体みたいな。でも、それは世界が意識の産物だとか脳の産物だとかいう意味じゃないの。そんな簡単じゃないわ。

まあ、今、そんな講義してる時間はないわね。

ともかく、コンピュータのプログラムが組めないのと同じで、咒を紡いで魔法陣を組むこともできないわ、あたしは」

龍咒も首をひねった。

「どうするべきか」

モレイもしかめっ面のままだ。

玲央は少し放心状態だし、理愈は考えることすら諦めていた。

アギトが来た。

「逝こう」

理愈が眼を睜く。

「アギト、おまえ、何言ってるんだよ」

しかし、モレイは察知した。

「できたのか」

アギトは微笑む。

「あゝ。智慧を手に入れた」

龍咒すらも驚きの表情を泛べる。

「本当か、アギト」

「ええ。そうです。」

ウイ、手伝ってくれ」

ウイは済まなそうに喩昶亜を見たが、喩昶亜は視線を逸らした。

アギトはチョークで閲覧机に咒を書いた。ウイが天易家伝来の聖化の装飾を施す。

「それだけなのか」

早蕨が問うと、

「はい。これだけです。では、逝きましようか」

現象への解釈が変わった。

しかし、塔に着いたとき、既に薄幸の女帝はこと切れていた。

「間に合わなかったか」

龍咒は瞼を閉じた。アギトは拳で壁を殴る。

「ちくしょう！」

イユノだけが冷静だった。

「さあ、行きましょう。嘆いても仕方ない」

「待つて」

いりやが言った。

「せめて、お花を手向けさせて」

イユノが俯く。

「わかった。そうしよう」

塔の外に降りた。イユノが手を翳すと、そこだけ円形に雪が溶けて春になり、草が生え、ヒースの花が咲いた。いりやが愛おしげにそれを摘む。

塔に戻る。花は手向けられた。

醜く歪んだエレクシーネの冷たい顔が微かに緩んだようにも見えた。

「いりやを探せつ、奪えつ、略奪しろつ！ 究竟の真理の叡智を以てすれば呪詛も解けよう。さあ、必死で探せ。壊せ、奪え」

イヴィル大枢機卿は狂笑する。言っていることには妙な感じがあるが、それには理由があった。

十メートルもある貂のマントを羽織、大天蓋のついた大きな輿に乗って、オークやゴブリンやトロールの大軍団を眺め、王者のように振る舞うも、振り返こうとするために必死であった。

つまり、こうだ。

究竟の真理、絶対神を得れば、ライバルであった絶対神聖皇帝レオンを突き落として、自らが皇帝候補に振り返き、いずれは絶対神聖皇帝になれる日が来る。そういう妄念の塊であった。

怨霊の呪詛解消を口実に、いりやを帝国の軍隊に探させる。

又、オークやゴブリンやトロールどもには略奪や破壊をさせてやるからついて来いと言う。怨念の呪詛が天下を蔽い、悪は力を増している。魑魅魍魎共はイヴィルの言葉をこ

れ幸いと、持て余した力を噴出させ、次から次へとあふれ出てくるのだ。

それゆえ、神聖帝国の大枢機卿の号令もどこかちぐはぐなのである。

「天網恢恢疎にして漏らさず」

そう嘯きつつ、我ながらうまい戦略だなどほくそ笑む。

「アスタロテやユリアスを使った作戦はイマイチだったかな。

ふ。今度こそ絶対だ。

この世の特殊真理を手に入れば」

シルヴィエ聖教の教祖である聖者イキは、真理は存在しない、と言ったというのに。

突如、霹靂。

軍団が裂けた。騒いでいる。二つに割れた。まるでモーシエスのために裂けた紅海のように。

「いったい、何ごとだ」

そこには立ち登る炎のように、イユノが待っていた。

「相変わらず愚かね。

何を盗む気でいたの？ 特殊真理なんて発想は現象に過ぎないわ。この世はゆらぎの
なよ。
マヤ

幻なのよ。

ほら、いおりやならここにいるわ」

そう言つて、隣を指さすと、黄金の霧が渦巻いて、いおりやが現象する。難詰するまな
ざしで、清冽な凜としたその双眸で、イヴィルを見つめていた。

大枢機卿は輿の上にいらながらも、たじろぐ。無意識的に、わずかに後ろに下がった。す
ると肩が何かに当たった。

「え？」

黒い悪魔デヴィル・アスタロテ。イヴィルはその激しい怒りのまなざしにさらに動揺す
る。

「ウわ、何だ、貴様！」

悪魔は冷厳に凍りついた憤りを放つ。

「俺を利用したつもりだったか。この俺を騙したつもりだったか。ふふ」

枢機卿は蒼白になった。

「待て、違う。貴様は騙されている」

アスタロテは欣然と微笑む。

「生まれて来たことを後悔するぐらいに長く苦しめて殺してやる」

第五章 華によつて怨憎会苦は霧散するか

いりやの手向けた花。その花々に囲まれたとき、エレクシーネの苦悶と憎悪で固まった顔がわずかに緩んだようにも見えたが、気のせいであろう。

イサナコがエレクシーネを描いた絵を置いた。

それはかつての誇り高く美しかったときの彼女である。死して怨霊と化したその亡骸と、描かれた肖像とは、何という違いだろうか。

芸術は魂を慰撫してくれるのであろうか。この悲惨を前に、誰にもわからない。

あれほど美しかった高貴なる面立ちは面影もない。

その表情は凄まじい怖ろしいものであったが、あゝ、何と苦しげなことだろうか。

憎悪は理不尽や悲憤慷慨、遂げられぬ想いなど、苦しみもがくさなかに生まれる。苦しめて霽らずにいられないのだ。

誰しも、例外はない。それに嵌まるときは嵌まつてしまうものなのだ。少しでも世俗的な価値に染まらぬように、古代仏教が出家主義で、厭離することを旨としたのは、その所以である。

人の力ではどうにもできないのだ。心の深層、魂の奥に宿った人間の暗黒はそうたやすく一掃できない。

彼らが大海原だとしたら、我々はその表層の上に泛ぶ一枚の木の葉でしかないからだ。むしろ、彼らが主体であつて、我々は装飾品なのだ。だから、恨みや憎悪の一掃は難しい。

いりやのような神の癒し手でなければ。ただ、神のごときいりやの力でなければ。

神の慰めのごとき、魂の癒やし手でなくば。

その光は奇蹟であつた。

超越的な歓喜、もはや死しても悔いのないほどの歓喜がそれを清めよう。

だが、このようなことは誠に稀有で、奇蹟の上の奇蹟でしかない。しかし、絶対不可能ではない。なぜなら、いつも人が憎悪の苦しみからの救いを求めていることも又、事実なのだからである。

疫病は眼に見えて衰退していった。急速に勢いを失った。それは嵐の黒い雲が切れて、黎明が現れるかのようであった。

数億の魑魅魍魎の軍は萎むように衰微していく。

アギトが立つた。理愈も。

「待っていた。遂に正義の時節が来た」

モレイが咒を唱えると、手に氷の剣が現象する。裂帛汰が舌なめずりして言う、

「さて、片っ端から片づけるか」

「いや、奴らを解放してやるのさ」

戦闘はいつ終わるともない激しさで続いた。

無限の憎悪との戦い。

いつしか渺茫たる忘我の境に入る。瞑想のようだ。

魑魅魍魎を斬りつけながら、動中の禅に入る。

「ここは、どこだろう」

どこにもない場所。

霧に包まれて何も見えない。静寂。

上皇ストークインは血の気が失せて死霊のようであった。その双眸は既に狂気の中にある。

軍は敗走していた。もはや逃げ場はない。

「自害する」

近衛隊長コルドビュウスが制した。

「陛下、早まってはなりません」

だが、コルドビュウスを突き放し、

「触れるな、あゝ、遂に報われることなく滅ぶのだ。

遂に得られなかったあの人の想い。あの人の心。あの人の愛。永遠に」

それが得られようもないことは、わかり切ったことであった。もはや、理性も正気も失っているのである。

「あゝ、遂にこのまま滅ぶのか。あゝ、今知った、人は、ただ、愛だけを求めているのだと」

刃を抜く。

「陛下！」

その夜、いりやの部屋に再びアスタロテが現れた。だが、彼女は毅然としていた。アスタロテは何かが壊れかけていた。

いりやは立ち上がった。

あゝ、何という燦然たる美しさだろう。

肌は白いと言うよりは燦然と輝いていた。眼が見えなくなるほどの激しいまぶしさ。射抜くかのように。

神としか言いようのない奇蹟であつた。

彫像よりも整い麗しく、少年と少女の間のように鎖骨が見えるような細く青く不安定で、初芽のように柔らかく繊細で、生まれたばかりのように初々しい。

その髪の毛は黄金を超えた神的な黄金で、更に金砂をまぶした七色の虹を霞のようにまとっている。その輝きの強さは濃さ、深さ、明るさ。相矛盾するものが超越的に整合していた。

その双眸である。

虹彩という、瞳孔の開きを調整する筋肉の一種に色素が少なく、太陽の青い光線が吸収されないまま亂反射することによって、眸の碧さは生ず。

虹彩は瞳に放射状の縞目の文様を做なし、ダイヤモンドのように美しい。

又虹彩は（螺鈿のようでもあり、金属や鮮やかな化学反応のような青い燐光で炯らかに燦めくアゲハ蝶、翻りあざやぐ燠火のよう爛々たるモルフオ蝶や、ミヤマカラスアゲハのようでもある。

土耳其玉の色、バビロンの城門の青、瑠璃 (Lapis Lazuli)、チュニジアン・ブルー、サファイア、フレンチ・ブルー、コバルト・ブルーなどなどの、様々な青や蒼や碧や藍や水色や紺碧や群青のダイヤモンドの片の一粒一粒が鏤められた爛々たる燦技のモザイクのよう、一つ一つが氷の太陽のごとくコロナの炎を随えて瞭かに炸裂のごとくに熾り燿く。

その鏤め方は Brilliant の光燦があらわれるよう精緻に嵌められ、又はステンドグラスに荘嚴された、聖なる薔薇窓のよう、Flame をなす。

そこからは光の潮が氾濫し、三千億兆光年を超えてすべての宇宙にあふれ、亂射し、強烈燦裂たる光輝の八紘が、何もかも無際限にありとしあらゆる一切をなす。

喩え難き、強さ烈しさ。

虹彩の亂反射の捉えられぬまばゆさの原因は虹彩を蔽う角膜と、角膜と虹彩との間の前眼房を満たす眼房水とが、尋常ならざる晰らかさで、クリスタル・ガラスのよう透けているからである。

その透明度は湖面から水深一〇〇mの底にある砂粒一つ一つが表面の凹凸の一々をも精緻な解析度で明晰にし、めまいをさせるほど晰らかな清水をも遙かに超える。

煥ひかり為す青碧。蒼燐が紺碧に燦々と炯らめく。碧蒼なる燠火の如く炮烙し、奥になるにつれ炳焉らかとなるその奥に、燠せる青蒼を赫奕と太陽のごとき燎らかさで燦めかせる。

光燦の聖なる天、無際限に広範囲なる光焰輪の紋。言葉にならぬ無限永劫の真実。人間が一秒たりとても呼吸することできない、高純度の鮮烈な空気。人は虹彩の尖熾に射抜かれる。

超越的な愛。

アスタロテは鹽の柱となった。そして蝶々がさなぎの殻を破って生じるように、鹽の柱を崩して、白い悪魔が現れた。

伶俐凜麗とした新しいアスタロテだった。高貴なる悪魔は冷然と美しく微笑した。

「ふふ。

何と素晴らしいのだろう。

生まれ変わった。解放された。自由を得た。私は……

あゝ、いりや、心から感謝しよう」

いりやは微笑んだ。

「いいえ、あなたの心が勝ったのです。心機をつかんだのです」

アスタロテは高らかに笑って窓から去った。

それを庭の檜の木の子に坐って見ていたユリアスが満足げな溜息を吐く。

「これでいい。全てうまくいった」

光なる歡喜が苦しみを慰める。癒す。救う。

悦びこそが苦しみから解放し、憎悪怨嗟を解消する。

愛は喜びをもたらす。人は愛し、愛され、肯定し、肯定され、呪縛から解放され、歓喜する。

地上を超越すること龍のごとし。

古来、真神では「龍肯を現する者は解脱する」と言われる。

超越的な愛は、龍のごとき超越的な肯定である。

第六章 最後の戦い 太極究竟神

アギトは深い霧の中を歩き続けた。

四方がわからない。西も東も南も北も。そればかりか、上下も左右もわからなかった。眩暈とともに嘔吐が襲った。

「何もない、何もない」

しかし、言葉に過ぎない。

究竟とは何だろうか。

全てとは、宇宙だろうか。

宇宙は炎である。未だに膨張し続ける。ビッグバンの継続である。光すらも数百億年かかるという、想像を絶する広大な空間。

宇宙の一つではないという。平行宇宙というものが無数にある（多元宇宙）という。その統合的な広さは何千兆光年にもなるのであろうか、それともそれ以上か。

又は量子論的な多世界解釈もある。

他には異次元（四次元や五次元など）の宇宙がある。三次元を立方体とすれば、それを切ったとき、その切り口は二次元である。二次元と三次元はそうにかかわっている。恐らくは四次元の切り口は三次元なのであろう。そのように多い次元は少ない次元を含む。

また、三次元に於いて、二次元に干渉することは出来るが、四次元へはできない。だが、四次元からは三次元へ干渉することはできるのであろう。

空間の次元は十次元までであるという。これに時間軸の一次元を加えれば、十次元時空になるという。

十次元時空には無数の次元が包含され、それぞれに無数の平行宇宙がある。いった

い、この全体はどれほどなのか。

だが、それは凡てだろうか。想像を絶する超越の世界がありはしないか。ただ、空想するだけなら、可能だ。

諸考概の及ばぬ無際限な世界が。

それら全てを網羅し、いや、それらすらも遙かに遙かに超え、超越的に一切を蔽う龍のように。

全方位を網羅する肯定の『龍』とも言うべき龍神。

かたちなく、無際限に変易して一切何とも矛盾せず、否定もしない移ろいの蜥蜴(蜥易)の背。

喰らうのか喰らわれるのか一切の結論に達しない自らの尾を咬む原蛇が。ウロボロス

ただ、一つの石ころですらも、理解・解明・解釈もできないのに。そんな壮大なことを考えるまでもない。

我々は無知ですらない。それは非知ですらない。

それを敢て喩えて言うなら、『ありとしあらゆるものが知り得るような『知識』は、誰にも知りようがない』という神仙の詩になるのであろう。

そもそも、知り方がない。

旧石器時代人や原人すらも知る真理。いや、鳥や花や風月すらも知る真理。石や空間や重力ですらも知る真理。無空すらも知る真理。

それがこそが究竟の真理なのであろう。その真理に説かれることこそが究竟の真実なのであろう。

そんなふうにはんやり独りごちていると、後ろから、理愈が言った。

「だが、それが何の役に立つのさ」

「立たない。」

だから、人間は考えるんだ。いつも、その都度、考えるんだ。

そして、義しいと想ったことをするしかない」

「だが、それじゃ、主観主義だ。その都度、その都度で、ぶれるし、相対的だ。現実社会では制度的なものがどうしても必要だ。実践的には、どうしてもそうせざるを得ない」

モレイも言った。

「理愈の言うとおりだな」

「制度にも矛盾はある。」

戦争放棄とは言っても、敵国に蹂躪されては意味がない。外交手段で平和的に問題解決すればとよく言うが、うまくいくと言えるか。

では、武装すれば正しいかと言えばそうでもない。あれば闘いが起こる可能性は高まり、外国との緊張も生む。

正しい人間が、その都度、考えることが本当は、最も正しいのだ」
理愈が不満げな顔をする。

「そりゃ、絶対に間違った考えをしない賢人が常にいればね。

俺だってわかるさ、実際、真の賢人が絶対君主であれば、最高だってね。ただ、現実にはあり得ない。もし奇跡的にあっても、一代しか続かないだろう。

やはり現代に至ったことは伊達じゃないんだ。実践的・現実的には、民主主義が最高なんだよ」

アギトは吐息した。

「むろん、そうさ。

だが、本来の正しい答を憶えておくことは無駄ではない」

モレイが笑った。

「正しい答は『誰もが知らざるを得ず、誰にも知りようがない』だろ。どうにもならない」

アギトは首を振った。

「そうじゃない。

自分で考えて行動するんだ。たとえ、人間の思考が真の自由意思でなくとも。それしかないのだから。心機を観するんだ。現実を生きるんだ」

黎明が訪れた。

いつもの当り前な朝だ。

第七章 試験の結果

「まいったね、白紙だったとは」

定期考査が終わって理愈が嘆く。アギトは微笑み、

「気がついていなかったのか、さんさんタブラ・ラーサがどうのこうのと言っていたのに。」

でもさ、できただろ？」

二人のやり取りを横眼で見て嘲笑的な薄笑いを泛べるモレイは、

「あれなら、たとえ、事前に問題を見てしまったとしても、同じだと思うね。結局、わかる奴もわかっていないし、わからない奴にもわかってるのさ」

そのとき、ちょうど出題者の大学生、平衛隆臥がいつもと同じ服装で飄々と、遠くを歩いているのが見えた。

感慨深げにモレイが、

「あの人が考えたんだな」

理愈も同様にすうつと澄んだ表情になって、

「何か不思議な気がする」

「今回の冒険には、結局、何も関係しなかったけど」

アギトが言うと、モレイも、

「或る面では、あの人の作った問題を中心に回っていたようなところもあったからな」
「だよな」

三人はしばらく黙った。

やがてアギトが、

「そう、そう、だから、事前に見たとしても、減点にはならないって言っていたね」
すぐ後ろに追いついてきた裂帛汰は溜息混じりに、

「よー、どうだった？ あの冒険で経験を積んだから、どうにか何かを書いたけど、普通の人間じゃ、到底、書きようなんかなかったんじゃないか」

「わたしも、そう。もー、今さら、いろいろ思い当たることあるのよねー」

さらに後から追いついたえれいんが悲劇的な表情を作って言う。

えれいんの後ろにいたいみりやとイユノは黙っていた。肩をすくめて理愈は、
「むろん、できたんだろうな」

イユノが小バカにしたように、笑いながら、

「誰もが知らないことができるけど、誰にとっても知り方すらないものを、できたものできないもないわ。どうしろって言うの？」

莫迦ね。

何が正解かは、呼吸が決めるのよ。心機がね」

裂帛汰は暫時、ぽかあんとしていたが、

「何だか、聞いたことあるな、それ。」

禅の公案みたいだ。公案への応え方みたいだよな。あー、あつたなあ、そういうの」
そう言って、独り合点にうなずいて手を打つ。

理愈は小難しい顔をわざと作り、

「どうしようもないな。何もできないや。それでも、できているのか？ あ、いや、まあ、
そうでもないか……。ちえつ、こうしていられるんだから、いいか」

「だな」

裂帛汰もそう言った。

ウイが言う、

「見て。」

あの遥かな山の嶺を。今日は特に強く龍脈が息づいて見えるわ。龍が見える。ねえ、そ
うじゃない？

地球の生命が。非情な、龍みたいな大きな肯定が」

八月末、伊咄亜の合格が決まった。

「あー、やっと一段落」

十三歳の少女らしく伸びをして屈託なく言う。

「いやア、そんな甘くないぜ。地獄の始まりさ。太陽を見る日がないとはよく言ったもんだぜ」

理愈がそう言ってからかう。

「もう、頭来る、先輩って！」

それを見ながら、ベッドの上で胡坐をかいて翳りて微笑むアギト。

微笑まない咄咄亜も合格していた。

何も変わっていない。でも、いつしか変わるだろう。自然のなすがままに。

皆が学寮のアギトの部屋に集まっていた。

エレクシーネの肖像画『エピタフ』を書き終えたイサナコが廊下に軽快な足音を響かせながら、部屋に入って来たとき、えれいんと裂帛汰は窓際に坐って他愛もないことを語らいつつ、夢中で、今日も楽しそうだし、龍兎はアギトの机に坐ってクールで皮肉な笑みを泛べ、早蕨はその足元に胡坐をかいてタブレットをいじって、自分の世界に入っている。

中央に立ってイユノは毅然とし、モレイはベッドの隅で静かに本を読む。

ウイもベッドの隅に坐って、羅針盤をにらみながら古文書を紐解いていた。

玲央は入り口近くに立って変わらぬ暗鬱な面持ち、窓際に立って、外を眺めるいおりやは燦々と姚^{うつく}しい。

数千年前もこうだったに違いない。

完